茨城県教育財団文化財調査報告第168集

北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

古峯A遺跡
古峯B遺跡
高土台塚群

作業専用

平成12年3月

日本道路公団東京建設局
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第168集

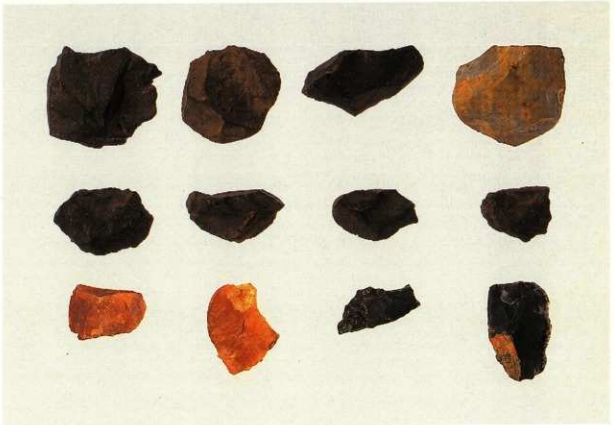
北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

古峯(ふるみね)A遺跡
古峯(ふるみね)B遺跡
高土台(こうどだい)塚群

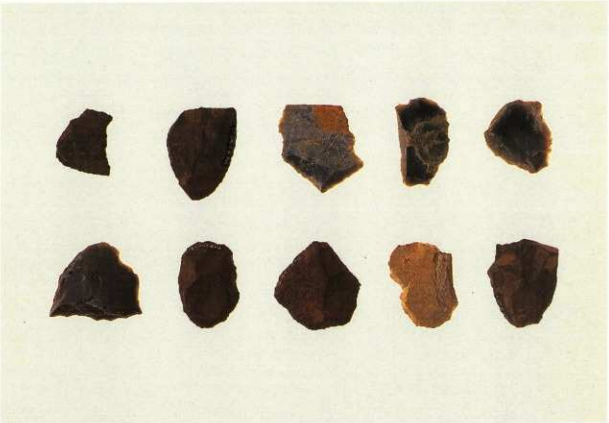
平成12年3月

日本道路公団東京建設局
財団法人　茨城県教育財団

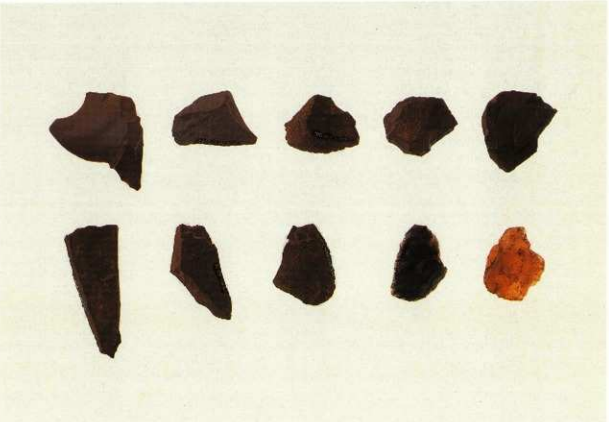
遺物出土状況



古峯A遺跡第1号石器集中地点　出土遺物（石核）



出土遺物（削器・掻器）



古峯Ａ遺跡第１号石器集中地点　出土遺物（剥片）

序

北関東自動車道は，北関東３県の主要都市と常陸那珂港，さらには，日本海側と太平洋側を結ぶ高速道路です。また，東京から放射状に延びる３本の高速道路を横断的に結ぶことにより，均衡のとれた交通体系の整備を図り，北関東地域の総合的な発展を推進する基盤施設であります。

北関東自動車道（友部～水戸）建設予定地内には，埋蔵文化財の包蔵地が10か所確認されました。

財団法人茨城県教育財団は，日本道路公団から埋蔵文化財の発掘調査事業について委託を受け，平成７年10月から平成10年３月にかけて，これらの遺跡の調査を実施してまいりました。その内，矢倉遺跡，後口原遺跡，大作遺跡，大畑遺跡，寺山遺跡，東平遺跡，坂ノ上塚群については，すでに『北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』として報告したところであります。

本書は，平成９年４月から平成10年３月にかけて調査した古峯Ａ遺跡，古峯Ｂ遺跡及び高土台塚群の調査成果を収録したものであります。本書が，研究の資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である日本道路公団からいただきました多大な御協力に対し，心から御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，友部町教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力をいただきましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成12年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，日本道路公団東京建設局の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成９年度に発掘調査を実施した，茨城県西茨城郡友部町大字南小泉に所在する古峯（ふるみね）Ａ遺跡及び古峯（ふるみね）Ｂ遺跡，同町大字平町に所在する高土台（こうどだい）塚群の発掘調査報告書である。

2　古峯Ａ遺跡及び古峯Ｂ遺跡，高土台塚群の発掘調査期間及び整理期間は，以下の通りである。

調　査　　平成９年４月１日～平成10年３月31日

整　理　　平成11年10月１日～平成12年３月31日

3　古峯Ａ遺跡及び古峯Ｂ遺跡，高土台塚群の発掘調査は，調査第１課長沼田文夫の指揮のもと，調査第４班長荻野谷悟，主任調査員樫村宣行，主任調査員平松孝志が担当した。

4　古峯Ａ遺跡及び古峯Ｂ遺跡，高土台塚群の整理及び本書の執筆・編集は，整理課長川井正一，首席調査員荻野谷悟の指揮のもと，主任調査員平松孝志が担当した。

5　古峯Ａ遺跡及び古峯Ｂ遺跡から出土した石器の実測については，株式会社大成エンジニアリングに委託し，墨書土器の一部については国立歴史民俗博物館の平川南教授，古墳時代の土師器については北茨城市立中妻小学校の樫村宣行教諭に御指導を戴いた。

6　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，古峯Ａ遺跡はＸ軸＝＋36760m，Ｙ軸＝＋40960m，古峯Ｂ遺跡はＸ軸＝＋36600m，Ｙ軸＝＋41200m，高土台塚群はＸ軸＝＋37360m，Ｙ軸＝＋40120mの交点をそれぞれ基準点（Ａ１a1）とした。大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…，西から東へ１，２，３…とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へａ，ｂ，ｃ…ｊ，西から東へ１，２，３…０とし，大調査区の名称を冠し，「Ａ１a1区」「Ｂ２b2区」のように呼称した。

2　遺構・遺物・土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－SI　掘立柱建物跡－SB　柵列－SA　土坑－SK　溝跡－SD
　　道路跡－SF　不明遺構－SX　ピット－P

遺物　土器・陶器－P　土製品－DP　石製品－Q　金属製品・古銭－M　拓本記録土器－TP

土層　撹乱－K　鹿沼パミス－KP　ロームブロック－RB　粘土ブロック－CB

3　遺構・遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

粘土・廠覆土　焼土・火床面　柱痕　黒色処理 黒色塗彩　繊維土器

●　土器　■　石製品・石製品　▲　土製品　△　金属製品　★拓本記録土器　☆　瓦

―・―・―　硬化面

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については，次のとおりである。

(1)　遺構全体図の縮尺は200分の１，住居跡や土坑，掘立柱建物跡は60分の１，ピット群は100分の１に縮尺し掲載した。

(2)　遺物は原則として３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては，個々にスケールで表示した。

6　遺構の主軸方向は，竈を持つ住居跡の場合は竈の中心と入口を結んだ軸線を主軸とし，その他の遺構については長軸（径）方向を主軸とみなした。主軸方向は主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　Ｎ－10°－Ｅ，Ｎ－10°－Ｗ）。

7　遺物観察表の記載方法は次の通りである。

(1)　土器の計測値は，Ａ－口径　Ｂ－器高　Ｃ－底径　Ｄ－高台径　Ｅ－高台高　Ｆ－つまみ径　Ｇ－つまみ高とし，単位はcmである。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

(2)　遺物観察表の備考の欄は，土器の残存率，実測番号（Ｐなど），出土位置，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

抄　録

ふりがな	きたかんとうじどうしゃどう(ともべーみと)けんせつこうじちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書
副書名	古峯A遺跡　古峯B遺跡　高土台塚群
巻次	Ⅳ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第168集
著者名	平松孝志
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL 029－225－6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL 029－225－6587
発行年月日	2000（平成12）年3月21日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
古峯A遺跡	茨城県西茨城郡友部町 大字南小泉字古峯1,135番地ほか	08321 -84	36度 18分 47秒	140度 19分 5秒	39m	19970401 ～ 19980331	5,637㎡	北関東自動車道建設工事に伴う事前調査
古峯B遺跡	茨城県西茨城郡友部町 大字南小泉字古峯145番地ほか	08321 -85	36度 20分 3秒	140度 17分 23秒	29m	19970401 ～ 19980331	3,099㎡	
高土台塚群	茨城県西茨城郡友部町 大字平町字高土台673番地の3ほか	08321 -83	36度 19分 58秒	140度 17分 23秒	51m	19970401 ～ 19980331	400㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古峯A遺跡	生産遺跡	旧石器	石器集中地点　1か所	石器(敲石,台石,磨石,石核,剥片,掻器,楔器,ナイフ形石器,楔形石器)	旧石器時代の石器集中地点は，出土遺物から石器製作の場と考えられる。遺物は，姶良Tn火山灰を含む層の下層から出土している。
	集落跡	平安	竪穴住居跡　3軒	土師器(坏,高台付坏,高台付皿,鉢,甕),須恵器(高台付坏,壺,甕),鉄製品(刀子,鑿,紡錘車),石製品(砥石)	
	その他	中世	溝跡　4条 道路跡　1条	土師質土器片,瓦質土器片,陶器片,磁器片,古銭(熙寧元寶)	
		時期不明	土坑　57基 溝跡　4条 道路跡　2条	縄文土器片,弥生土器片,土師器片,土師質土器片,陶器片,石器(石鏃,凹石)	
古峯B遺跡	その他	旧石器	石器集中地点　2か所	石器(掻器,彫刻刀形石器,剥片)	縄文時代の竪穴住居跡は，平面が上段と下段の二段掘り込み状を呈しており，有段式竪穴遺構と考えられる。
	集落跡	縄文（中期）	竪穴住居跡　1軒	縄文土器片（阿玉台1a式） 石器（石鏃，掻器）	
		古墳（後期）	竪穴住居跡　5軒	土師器(坏,椀,壺,甕,甑),須恵器(坏,鉢,提瓶),鉄製品(小札),土製品(管状土錘),石製品(支脚)	
		平安	竪穴住居跡　1軒 掘立柱建物跡　1棟	須恵器（坏，高台付坏） 鉄製品（刀子，鑿）	
	墓域	中世	土坑　79基	土師質土器（内耳土器，小皿，火鉢），陶器（灰釉丸皿），古銭（開元通寶，元符通寶），金属製品（角釘），石製品（石臼）	
	その他	中世	掘列　1か所 掘立柱建物跡　4棟 溝跡　4条 不明遺構　2基	縄文土器片，土師器片，土師質土器片，陶器片，磁器片	
		時期不明	掘立柱建物跡　1棟 土坑　130基 溝跡　4条 道路跡　1条 ピット群　1か所		
高土台塚群	塚群	近世	塚　1基	土師質土器片，古銭(寛永通寶)	

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
挿図目次，表目次，写真図版目次，付図目次
第1章　調査経緯……1
　第1節　調査に至る経緯……1
　第2節　調査経過……1
第2章　位置と環境……3
　第1節　地理的環境……3
　第2節　歴史的環境……3
第3章　古峯A遺跡……7
　第1節　遺跡の概要……7
　第2節　基本層序の検討……7
　第3節　遺構と遺物……10
　　1　竪穴住居跡……10
　　2　土坑……20
　　3　溝跡……24
　　4　道路跡……29
　　5　石器集中地点……33
　　6　遺構外出土遺物……47
　第4節　まとめ……47
第4章　古峯B遺跡……50
　第1節　遺跡の概要……50
　第2節　基本層序の検討……50
　第3節　遺構と遺物……51
　　1　竪穴住居跡……51
　　2　掘立柱建物跡……84
　　3　構列……91
　　4　地下式壙……92
　　5　土坑……95
　　6　溝跡……112
　　7　道路跡……124
　　8　石器集中地点……124

9　ピット群……128
10　不明遺構……130
11　遺構外出土遺物……134
第4節　まとめ……139
第5章　高土台塚群……142
第1節　遺跡の概要……142
第2節　遺構と遺物……143
1　塚……143
2　遺構外出土遺物……147
第3節　まとめ……148
写真図版

挿図目次

第1図　古峯A遺跡・古峯B遺跡・高土台塚群周辺遺跡位置図……6
古峯A遺跡
第2図　基本土層図……7
第3図　古峯A遺跡・古峯B遺跡調査区設定図……9
第4図　第1号住居跡実測図……10
第5図　第1号住居跡出土遺物実測図……11
第6図　第2号住居跡実測図……14
第7図　第2号住居跡出土遺物実測図(1)……15
第8図　第2号住居跡出土遺物実測図(2)……16
第9図　第3号住居跡実測図……19
第10図　第3号住居跡出土遺物実測図……19
第11図　第12号土坑実測図……20
第12図　第21号土坑実測図……21
第13図　第31号土坑実測図……21
第14図　第36号土坑実測図……22
第15図　第1号溝跡実測図……24
第16図　第2号溝跡・出土遺物実測図……25
第17図　第3号溝跡実測図……25
第18図　第4・5号溝跡実測図……26
第19図　第6号溝跡・出土遺物実測図……27
第20図　第7号溝跡実測図……28
第21図　第8号溝跡・出土遺物実測図……28
第22図　第1号道路跡・出土遺物実測図……30
第23図　第2・3号道路跡実測図……32
第24図　第1号石器集中地点実測図……34
第25図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(1)……35
第26図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(2)……36
第27図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(3)……37
第28図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(4)……38
第29図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(5)……39
第30図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(6)……40
第31図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(7)……41
第32図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(8)……42
第33図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(9)……43
第34図　遺構外出土遺物実測図……46
古峯B遺跡
第35図　基本土層図……50

第 36 図　第１号住居跡実測図……52
第 37 図　第１号住居跡出土遺物実測図 (1) ……53
第 38 図　第１号住居跡出土遺物実測図 (2) ……54
第 39 図　第２号住居跡実測図……57
第 40 図　第２号住居跡出土遺物実測図 (1) ……58
第 41 図　第２号住居跡出土遺物実測図 (2) ……59
第 42 図　第２号住居跡出土遺物実測図 (3) ……60
第 43 図　第２号住居跡出土遺物実測図 (4) ……61
第 44 図　第３号住居跡出土遺物実測図……65
第 45 図　第３号住居跡実測図……66
第 46 図　第４号住居跡実測図……68
第 47 図　第４号住居跡出土遺物実測図 (1) ……69
第 48 図　第４号住居跡出土遺物実測図 (2) ……70
第 49 図　第５号住居跡実測図……73
第 50 図　第５号住居跡出土遺物実測図 (1) ……74
第 51 図　第５号住居跡出土遺物実測図 (2) ……75
第 52 図　第６号住居跡実測図……77
第 53 図　第６号住居跡出土遺物実測図 (1) ……78
第 54 図　第６号住居跡出土遺物実測図 (2) ……79
第 55 図　第７号住居跡実測図……82
第 56 図　第７号住居跡出土遺物実測図……83
第 57 図　第１号掘立柱建物跡実測図……84
第 58 図　第２号掘立柱建物跡・出土遺物実測図
……85
第 59 図　第３号掘立柱建物跡実測図……86
第 60 図　第４号掘立柱建物跡・出土遺物実測図
……88
第 61 図　第５号掘立柱建物跡実測図……89
第 62 図　第６号掘立柱建物跡実測図……90
第 63 図　第１号柵列跡実測図……91
第 64 図　第１号地下式壙・出土遺物実測図……93
第 65 図　第２号地下式壙実測図……94
第 66 図　第18号土坑実測図……95
第 67 図　第51号土坑実測図……95
第 68 図　第57号土坑実測図……96
第 69 図　第60号土坑・出土遺物実測図……96
第 70 図　第64号土坑・出土遺物実測図……97
第 71 図　第75号土坑・出土遺物実測図……98
第 72 図　第87号土坑・出土遺物実測図……99
第 73 図　第89号土坑・出土遺物実測図 ……100
第 74 図　第93号土坑実測図 ……101
第 75 図　第94号土坑実測図 ……101
第 76 図　第97号土坑・出土遺物実測図 ……102
第 77 図　第117号土坑・出土遺物実測図……103
第 78 図　第144号土坑・出土遺物実測図……104
第 79 図　第152号土坑・出土遺物実測図……105
第 80 図　第155号土坑・出土遺物実測図……106
第 81 図　第162号土坑実測図……107
第 82 図　第204号土坑・出土遺物実測図……107
第 83 図　第１号溝跡実測図 ……113
第 84 図　第１号溝跡出土遺物実測図 (1)……114
第 85 図　第１号溝跡出土遺物実測図 (2)……115
第 86 図　第１号溝跡出土遺物実測図 (3)……116
第 87 図　第１号溝跡出土遺物実測図 (4)……117
第 88 図　第２・３号溝跡実測図 ……121
第 89 図　第４号溝跡・出土遺物実測図 ……122
第 90 図　第５号溝跡・出土遺物実測図 ……123
第 91 図　第１号道路跡実測図 ……124
第 92 図　第１号石器集中地点実測図 ……125
第 93 図　第１号石器集中地点出土遺物実測図
……126
第 94 図　第２号石器集中地点実測図 ……127
第 95 図　第２号石器集中地点出土遺物実測図
……128
第 96 図　第１号ピット群出土遺物実測図 ……128
第 97 図　第１号ピット群実測図 ……129
第 98 図　第１号不明遺構・出土遺物実測図 …131
第 99 図　第２号不明遺構実測図 ……133
第 100 図　遺構外出土遺物実測図 (1)……134
第 101 図　遺構外出土遺物実測図 (2)……135
第 102 図　遺構外出土遺物実測図 (3)……136
第 103 図　有段式竪穴遺構形態分類図 ……141
第 104 図　調査区域南部土坑分布図 ……141

高土台塚群

第 105 図　高土台塚群調査区設定図 ……142
第 106 図　第１号塚実測図 (1)……143

第107図　第1号塚実測図 (2)……144
第108図　第1号塚実測図 (3)……145
第109図　第1号塚出土遺物実測図 ……146
第110図　遺構外出土遺物実測図 ……147

表　目　次

表1　古峯A遺跡・古峯B遺跡・高土台塚群周辺遺跡一覧表……5
表2　古峯A遺跡住居跡一覧表……20
表3　古峯A遺跡土坑一覧表……23
表4　古峯A遺跡溝跡一覧表……29
表5　古峯A遺跡道路跡一覧表……33
表6　第1号石器集中地点出土遺物……33
表7　古峯B遺跡住居跡一覧表……83
表8　古峯B遺跡掘立柱建物跡一覧表……90
表9　古峯B遺跡地下式壙一覧表……94
表10　古峯B遺跡土坑一覧表 ……108
表11　古峯B遺跡溝跡一覧表 ……123
表12　第1号ピット群出土遺物 ……130

写真図版目次

古峯A遺跡

PL1　遠景・全景
PL2　試掘終了風景・基本土層断面
PL3　北部完掘状況・南部完掘状況
PL4　第1号住居跡完掘・遺物出土状況
PL5　第2号住居跡完掘・遺物出土状況
PL6　第3号住居跡完掘・遺物出土状況
PL7　第12・21・31・36号土坑完掘状況，第1～6号溝跡完掘状況
PL8　第7・8号溝跡完掘状況，第1～3号道路跡完掘状況，第1号石器集中地点遺物出土状況・敲石出土状況・土層断面

古峯B遺跡

PL9　全景・遺構確認状況
PL10　調査終了風景（北部）・（南部）
PL11　第1号住居跡完掘・遺物出土状況
PL12　第2号住居跡完掘・遺物出土状況
PL13　第3号住居跡完掘・遺物出土状況
PL14　第4号住居跡完掘・遺物出土状況
PL15　第5号住居跡完掘・遺物出土状況
PL16　第6号住居跡完掘・遺物出土状況
PL17　第7号住居跡完掘・遺物出土状況
PL18　第1・4～6号掘立柱建物跡完掘状況，第2・3号掘立柱建物跡確認状況，第1号柵列完掘状況，第1号地下式壙完掘状況
PL19　第2号地下式壙完掘状況，第1号溝跡完掘・遺物出土状況，第2～5号溝跡完掘状況，第1号道路跡完掘状況
PL20　第1号不明遺構遺物出土状況，第2号不明遺構完掘状況，第18・51・60・64・87号土坑完掘状況，第75号土坑遺物出土状況
PL21　第89・97・117・144・152・155・162号土坑完掘状況，第93・94号土坑確認状況
PL22　土坑群完掘状況（南部）・（中央部・南部）
PL23　第1号ピット群完掘状況，中央部・南部完掘状況

高土台塚群

PL24　調査前風景，調査終了風景，石碑確認状況
PL25　第1号塚土層断面（A－A′）・（A′－A）・（B－B′）・（B′－B），模固め石出土状況，古銭出土状況，石碑確認状況（表面）・（裏面）

古峯A遺跡

ＰＬ26　第１～３号住居跡・第１号道路跡出土遺物

ＰＬ27　第１号石器集中地点出土遺物 (1)

ＰＬ28　第１号石器集中地点出土遺物 (2)

古峯B遺跡

ＰＬ29　第１・２号住居跡出土遺物

ＰＬ30　第３～６号住居跡出土遺物

ＰＬ31　第７号住居跡・第１号地下式壙・土坑出土遺物

古峯B遺跡・高土台塚群

ＰＬ32　住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・塚出土遺物

古峯B遺跡

ＰＬ33　第１号住居跡出土遺物，遺構外出土遺物

古峯A遺跡・古峯B遺跡・高土台塚群

ＰＬ34　出土遺物（石器，鉄製品，古銭）

付　図　目　次

付図１　古峯A遺跡遺構全体図

付図２　古峯B遺跡遺構全体図

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

茨城県中央部と近畿都県を結ぶ主要幹線道路は，現在，国道6号線と常磐自動車道である。建設省と日本道路公団は，近年の物流の増加や常陸那珂港開港に伴い，首都圏の均衡ある高速交通ネットワークを形成するため，北関東3県を結ぶ北関東自動車道の建設事業を進めている。

工事に先立ち，平成6年2月10日，日本道路公団東京第一建設局水戸工事事務所は，茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は，平成7年10月31日から南小泉地区の試掘調査を実施し，同年11月22日に工事予定地内に古峯A遺跡，古峯B遺跡が所在する旨を日本道路公団東京第一建設局水戸工事事務所に回答した。また，平成8年2月28日から，平町地区の試掘調査を実施し，同年4月19日に工事予定地内に高土台塚群が所在する旨を回答した。日本道路公団東京第一建設局水戸工事事務所は，平成9年2月20日，茨城県教育委員会にその取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は，日本道路公団東京第一建設局水戸工事事務所と遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果，現状保存が困難であることと判断されたため，平成9年3月17日に，日本道路公団東京第一建設局水戸工事事務所に対し，古峯A遺跡，古峯B遺跡，高土台塚群を記録保存とする旨の回答を行い，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

日本道路公団東京第一建設局と茨城県教育財団は，平成9年4月1日，埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，これらの遺跡の発掘調査を実施することとなった。なお，日本道路公団東京第一建設局は，平成10年8月1日をもって，組織改変に伴い，日本道路公団東京建設局となった。

第2節　調査経過

古峯A遺跡の発掘調査は平成9年9月12日から12月19日まで，古峯B遺跡の発掘調査は平成9年11月12日から平成10年3月18日まで，高土台塚群の発掘調査は平成10年1月21日から2月4日まで実施した。以下，古峯A遺跡，古峯B遺跡，高土台塚群の調査の経過について月ごとに略述する。

9　月　12日に東平遺跡及び坂ノ上塚群の遺構調査と並行して，古峯A遺跡の試掘調査を開始した。

10　月　8日に古峯A遺跡の試掘調査が終了し，13日から部分的に人力による表土除去を開始した。20日から1期分（調査区域北部）の重機による表土除去と，これに伴う遺構確認作業を開始した。22日に表土除去は終了した。土坑37基，溝跡2条，道路跡2条を確認し，ひきつづき遺構調査を実施した。

11　月　12日から古峯B遺跡の試掘調査を開始し，14日に終了した。18日から古峯A遺跡2期分（調査区域南部）の重機による表土除去とこれに伴う遺構確認作業を開始し，20日に表土除去は終了した。旧石器時代の石器集中地点1か所，竪穴住居跡3軒，土坑17基，溝跡7条を確認した。27日までに，土坑40基，溝跡3条，道路跡2条の調査を終了した。

12　月　3日から石器集中地点の調査に着手した。10日から古峯B遺跡の重機による表土除去と，これに伴う遺構確認作業を開始した。15日に表土除去は終了した。旧石器時代の石器集中地点1か所，竪穴住居跡7軒，土坑206基，溝跡5条，道路跡1条を確認した。16日に古峯A遺跡及び高土台塚群

の航空写真撮影を行った。19日に古峯A遺跡の石器集中地点を含めた遺構調査が完了した。

1　月　6日から古峯B遺跡の遺構調査に着手した。21日からは，並行して高土台塚群の試掘調査を実施した。30日から高土台塚群の第1号塚の調査を開始した。

2　月　4日までに高土台塚群の調査は完了した。23日から古峯B遺跡石器集中地点の調査を開始した。

3　月　4日に古峯B遺跡の航空写真撮影を行った。18日には石器集中地点を含めた遺構調査が終了し，古峯B遺跡の現地でのすべての調査が完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

古峯A遺跡は茨城県西茨城郡友部町大字南小泉字古峯1135番地ほかに，古峯B遺跡は大字南小泉字古峯145番地ほかに，高土台塚群は大字平町字高土台673番地の3ほかに，それぞれ所在している。

友部町は茨城県のほぼ中央部に位置し，東部は東茨城郡内原町，同茨城町に，南部は涸沼川を隔てて西茨城郡岩間町に，西部は笠間市に隣接している。町域は，東西約11km，南北約13km，面積は約59㎢である。町の北部を国道50号線，西部を国道355号線が走っており，JR常磐線と水戸線が友部駅で分岐している。また，常磐自動車道が町の南端部を通過している。北関東自動車道は，これとジャンクションで結ばれ，北関東圏における東西交通の幹線として機能することを期待され，建設が進められている。

友部町の地形は，山地及び丘陵地，台地，沖積低地の三つの地域に分けられる。北部・西部は鶏足山塊から南西へ延びる丘陵地（友部丘陵）で，標高50～90m で広い平坦面を残している。丘陵を構成する層は友部層と呼ばれている更新世の海成砂礫層で，上層には関東ローム層をのせている。中央部から南東部の台地は，東茨城台地の一部をなしている。基盤となる第三紀層は見和層上層部と呼ばれ，砂・礫・粘土層によって構成されており，上層には関東ローム層をのせている。南西部の山地は金比羅山を中心に構成され，山地東側は涸沼川によって開析されている。中央部の台地北側には，北部丘陵を水源とする涸沼前川が北西から南東に流れ，流域には水田が拓かれている。南西部の山地と友部丘陵とのあいだには，涸沼川が東へ流れ，その沖積低地は水田となっている。

古峯A遺跡は涸沼川右岸の標高38～46m の丘陵端部，古峯B遺跡は同28～29m の東茨城台地縁辺部に立地し，現況はともに畑地，雑種地である。高土台塚群は涸沼川左岸の，南西部山地を東側に下った標高49～51m の丘陵地に立地し，現況は山林である。

第2節 歴史的環境

友部町は，地形の9割がゆるやかな丘陵地と平地で構成されており，涸沼川，涸沼前川など中小河川にも恵まれている。こうしたすばらしい自然環境のもとに，町域には古代からの多くの遺跡が確認されている。ここでは，古峯A遺跡，古峯B遺跡，高土台塚群周辺の主な遺跡について時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は，石山神（いしやまがん）遺跡〈38〉があり，ナイフ形石器や尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は，町内で42か所が確認されている。遺跡は，涸沼川流域をはじめ涸沼前川，枝折川の沿岸及び周辺の小河川の洪積台地に多く分布している。早・前期の遺跡は，沈線文土器（三戸式など）や羽状縄文，菱形状縄文土器（黒浜式）が出土している前出の石山神遺跡がある。中期の遺跡には，阿玉台式土器，加曽利ＥⅡ式土器が出土している柏井（かしわい）遺跡〈4〉，仁古田（にこだ）遺跡〈14〉がある。住吉（すみよし）遺跡〈17〉からは，加曽利ＥⅠ式，阿玉台式，勝坂式等の土器片が採集されている。長兎路（ながとろ）遺跡〈12〉，下宿（しもじゅく）遺跡〈9〉も中期の遺跡として確認されている。後期の遺跡には，堀之内式土器片が採集されている善九郎（ぜんくろう）遺跡〈13〉がある。上郷（かみごう）遺跡〈35〉からは，安行Ⅱ式土器が出土している。中期から後期へかけての遺跡として確認されているものとして，坂場（さかば）遺跡〈27〉，下加賀田（しもかがた）遺跡〈36〉，南小泉（みなみこいずみ）遺跡〈15〉，内田（うちだ）遺跡〈6〉，宛余寺裏（かんぜんじうら）遺跡〈37〉，花咲（はなさき）遺跡〈33〉，橫爪（ほうづめ）遺跡〈7〉がある。晩期の遺跡では，安行Ⅲａ式土器片が採集されている前述の柏井遺跡がある。

弥生時代の遺跡は，山之内金山遺跡〈8），麓分附遺跡〈16），完全寺裏遺跡の3遺跡があり，その他町内では，8地区（仁古田，湯崎，大古山，橋爪，大田町，鴻巣，小原，上市原）で弥生土器片の出土が確認されている。土器片は弥生時代後期後半の十王台式のものが中心である。

古墳時代の遺跡では，26の古墳または古墳群が確認されている。これまでに発掘調査が行われたのは，高寺2号墳・4号墳〈18），諏訪山古墳〈24），慈救堂古墳〈5）である。高寺2号墳は，直径18m，高さ5.6mの円墳で，埋葬施設は花崗岩の割石を用いた片袖式の横穴式石室である。高寺4号墳は，円墳であるが，墳丘の規模などは不明である。諏訪山古墳は，直径20m，高さ3.2mの上円下方墳とされている。埋葬施設は粘土槨で鉄剣一振が出土している。慈救堂古墳では，箱式石棺が確認されている。仁古田の釈迦堂，南小泉の善九郎，大古山の本内など町域の各所から，この時代の土器片が発見されており，この時代の集落跡が存在する可能性がある。寺山遺跡南側の涸沼川を挟んだ対岸は，岩間町土師地区である。土師器などの製作にかかわったとされる，土師部一族が居住した地と考えられている。この地域の台地上にも遺跡が点在する。土師遺跡〈42），鳥屋敷遺跡〈43）は古墳・奈良・平安時代の複合遺跡である。

奈良・平安時代の友部地方は，茨城と那珂の両郡にまたがっていた。この時代の遺跡には，端上遺跡〈26），五万堀遺跡〈32），大古山遺跡〈10），大古山本内遺跡〈29），北平遺跡〈28），がある。笠間市との境界近くに位置する端上遺跡で，須恵器窯跡が発見されている。この窯跡の北側の台地斜面には，笠間市大淵窯跡群〈45）が4地点にわたって確認されている。8世紀後半から，9世紀初頭の時期にかけて操業されたと思われる須恵器の窯跡である。端上遺跡を含めて，この一帯には須恵器生産が行われた一大窯跡群が想定される。五万堀遺跡では，東海道と推定される大規模な道路跡が確認されている。

中世以降の遺跡は，城館跡として長兎路城跡〈20），湯崎住吉城跡〈19），住吉城跡〈21），宍戸城跡〈22），古館〈23）などがある。平安時代末期，涸沼川流域一帯は桓武系常陸平氏が支配権をもっていた。建久4年（1193）に下野武士八田知家がこの地へ進出してきた。やがて八田氏流の家周が常陸国守護職に補任され，常陸武家の総指揮官となり常陸宍戸氏が成立する。しかし，戦国時代末期に佐竹氏の南進策の中で，宍戸領の佐竹領化が進み，宍戸氏は佐竹氏配下の将となっていく。これらの城館は，こうした武士の拠点となったものである。この時代の寺跡には，光照院寺跡〈11），新善光寺跡〈34）がある。万部塚〈30），千部塚〈31），東原製鉄跡〈25），岩間町の土師十三塚遺跡〈44）もこの時期の遺跡である。

近世の友部地方は，佐竹氏の秋田移封のあとに，秋田氏が宍戸城に拠って5万石を領した。秋田氏が去ったあと幕府の直轄地に編入されるが，天和2年（1682）からは，徳川頼房の七男頼雄が松平氏を名乗り1万石の宍戸藩主となった。これ以降の友部地方は，宍戸藩領のほかに笠間藩領，旗本領，天領の村々が入り組んで存在していた。当時の江戸街道として，宍戸城から涸沼川を跨いで南西方向にのびる古道がある。坂ノ上塚群は，涸沼川を過ぎ下加賀田へ入った街道筋の丘陵地に立地している。今回調査した高土台塚群は，涸沼川左岸の丘陵地に立地している。いずれも宍戸の集落の西側から南側の丘陵地に所在しており，この地区が当時の信仰と関係していた可能性もある。

宍戸の地では江戸時代から陶器が生産され，宍戸焼として現在も操業している。宍戸焼のおこりは，江戸時代後期，宍戸の山口勘兵衛が平町小人町に窯を築き，ハケ目の土瓶などを作ったこととされる。山口の窯は，明治の中頃に磯部秋次郎が譲り受け，磯部窯として現在に至っている。寺山遺跡では，明治期の陶器窯跡を確認しており，宍戸焼や笠間焼との関連も考えられる。

※本文中の〈　〉内の番号は表1・第1図中の該当番号と同じである。

参考文献

・友部町町史編さん委員会　『友部町史』　1990年３月

・友部町教育委員会　「友部町埋蔵文化財一覧表」　1998年３月

・茨城県　『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』　1979年３月

・茨城県　『茨城県史料　考古資料編　弥生時代』　1991年３月

・茨城県　『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　1991年３月

・茨城県　『茨城県史料　考古資料編　奈良・平安時代』　1995年３月

・茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』　1990年３月

・茨城県教育委員会　『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書　Ⅵ～Ⅷ』　1993年３月～1997年３月

表１　古峯Ａ遺跡，古峯Ｂ遺跡，高土台塚群周辺遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降	図中番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降
①	古峯Ａ遺跡		○				○	○	24	諏訪山古墳	4590				○		
②	古峯Ｂ遺跡		○	○		○	○	○	25	東原製鉄跡	4595						○
③	高土台塚群							○	26	端上遺跡	4596		○			○	
4	柏井遺跡	359		○					27	坂場遺跡	4598		○				
5	慈救堂古墳	360				○			28	北平遺跡	4599		○			○	
6	内田遺跡	368		○					29	大古山本内遺跡	4601		○			○	
7	橋爪遺跡	372		○					30	万部塚	4602						○
8	山之内金山遺跡	374		○	○				31	千部塚	4603						○
9	下宿遺跡	375		○					32	五万堀遺跡	4605		○			○	
10	大古山遺跡	376		○		○	○		33	花咲遺跡	4606		○				
11	光照院寺跡	377						○	34	新善光寺跡	4610						○
12	長兎路遺跡	379		○					35	上郷遺跡			○				○
13	善九郎遺跡	381		○					36	下加賀田遺跡			○				○
14	仁古田遺跡	382		○					37	完全寺裏遺跡			○	○			
15	南小泉遺跡	2672		○					38	石山神遺跡		○	○				
16	随分附遺跡	2673		○	○				39	寺山遺跡		○	○		○	○	○
17	住吉遺跡	3160		○					40	東平遺跡			○	○	○	○	○
18	高寺古墳群	3651				○			41	坂ノ上塚群					○		○
19	湯崎住吉城跡	3652						○	42	土師遺跡	2674		○		○	○	
20	長兎路城跡	4122						○	43	島屋敷遺跡	3165		○		○	○	
21	住吉城跡	4589						○	44	土師十三塚遺跡	385						○
22	宍戸城跡	4121						○	45	大淵窯跡群	4144					○	
23	古館	4123						○									

第1図　古峯A遺跡・古峯B遺跡・高土台塚群周辺遺跡位置図（1：50,000「水戸」「石岡」）

第3章　古峯A遺跡

第1節　遺跡の概要

古峯A遺跡は，友部町の北西部，涸沼川右岸の標高38～46mほどの丘陵地の南東方向に延びた緩斜面に所在している。調査区域は，幅約140m，長さ約84m，面積5,637㎡であり，現況は畑地，雑種地である。

今回の調査によって，竪穴住居跡3軒（平安時代），土坑57基（時期不明），溝跡8条（中世4条，時期不明4条），道路跡3条（中世1条，時期不明2条），石器集中地点1か所（旧石器時代）を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に5箱出土した。平安時代の住居跡からは土師器・須恵器・金属製品・石製品が出土している。中世の溝跡や道路跡からは土師質土器片・瓦質土器片・陶磁器片・古銭が出土している。遺構外からは，石器・縄文土器片・弥生土器片が出土している。

第2節　基本層序の検討

調査区域の北西部（A2j6区）にテストピットを掘り，基本土層の観察を行った。（第2図）

第1層は，14～30cmの厚さの耕作土層で，黒褐色をしている。黒色粒子を極多量，ローム粒子を中量含んでいる。粘性・締まりともに弱い。

第2層は，6～18cmの厚さの，ロームへの漸移層で，にぶい黄褐色をしている。ローム粒子を極多量，黒色粒子中量，ローム小ブロックを少量含んでいる。締まり弱い。

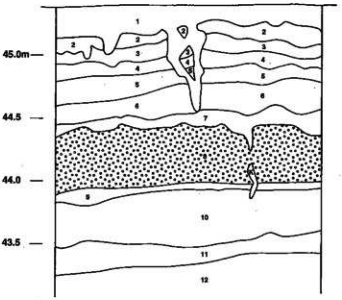
第3層は，4～14cmの厚さで，明黄褐色をしたローム層である。ハードロームではあるがソフト化が進んでいる。火山ガラス粒子を極微量含んでおり，始良Tnテラフ（AT）を含む層である。下総Ⅵ層に対応すると考えられる。

第4層は，6～16cmの厚さで，黄褐色をしたローム層である。ハードロームではあるがソフト化が進んでいる。粘性は強く，締まりは弱い。下総Ⅶ層に対応し，第二黒色帯上部と考えられる。

第5層は，8～20cmの厚さで，褐色をしたハードローム層である。若干，ソフト化している。粘性が強い。下総Ⅸ層に対応し，第二黒色帯下部と考えられる。

第6層は，10～30cmの厚さで，褐色をしたハードローム層である。若干，ソフト化している。粘性が強い。下総Ⅸ層に対応し，第二黒色帯下部と考えられる。

第7層は，4～20cmの厚さで，褐色をしたハードローム層である。KP小ブロックを中



第2図　基本土層図

量，KP粒子を少量，KP大ブロック・中ブロックを微量含んでいる。粘性は強く，締まりは極めて強い。下総X層に対応すると考えられる。この層までが立川ローム層に当たると考えられる。

第8層は，38～50cmの厚さで，上部は黄色，下部は明黄褐色をした鹿沼パミスの純粋層である。粘性は極めて弱く，締まりは極めて強い。下総XI層に対応すると考えられる。

第9層は，6～14cmの厚さで，にぶい黄褐色をした粘土層である。ローム粒子を極多量，黒色スコリア小ブロック・褐色スコリア小ブロックを少量，白色パミス粒子を微量含んでいる。粘性，締まりともに強い。上部の8層と，下部の10層との境界には鉄分の集積が認められる。

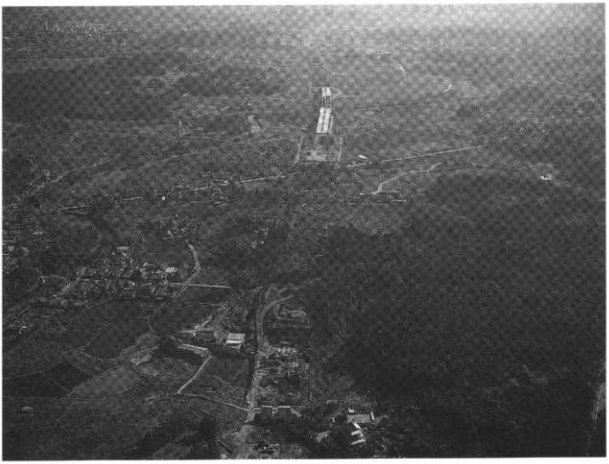
第10層は，28～44cmの厚さで，にぶい黄褐色をした粘土層である。ローム粒子を極多量，黒色スコリア小ブロック・褐色スコリア小ブロックを中量，白色パミス粒子を微量含んでいる。粘性，締まりともに強い。

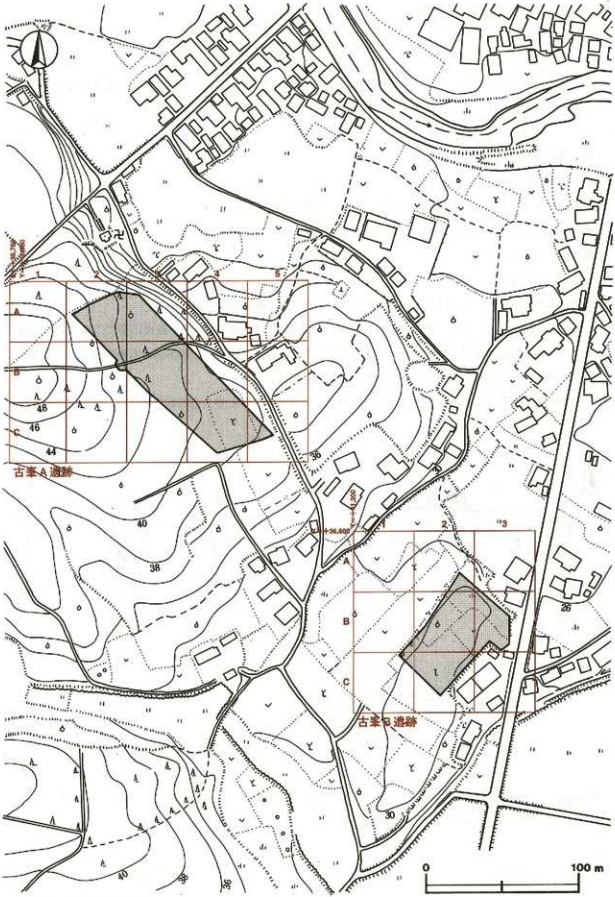
第11層は，10～24cmの厚さで，暗褐色をした粘土層である。ローム粒子を極多量，黒色スコリア小ブロック・白色パミス粒子を微量含んでいる。粘性，締まりともに強い。

第12層は，褐色をした粘土層である。黄褐色粒子を極多量，黒色スコリア小ブロックを微量，黒色スコリア中ブロック・白色パミス粒子を極微量含んでいる。粘性，締まりともに強い。

9～12層は，鹿沼パミス層の下層なので武蔵野ローム層との対比は不可能である。スコリアが多く含まれる特徴は，近隣地域においては下末吉ローム層に対応する常総粘土層直上の層のみである。9層上下の鉄分の集積は不整合と考えられ，層の累積が複雑な様相を呈している可能性がある。

住居跡などの遺構は，第2層上面で確認した。





第3図　古峯A遺跡・古峯B遺跡調査区設定図

第３節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

今回の調査で，平安時代の竪穴住居跡３軒（第１～３号住居跡）が確認された。以下，遺構番号順にそれぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記載する。

第１号住居跡（第４・５図）

位置　調査区域の南部，Ｃ４b4 区。

重複関係　第53号土坑に南部を掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形　長軸3.54m，短軸3.00m の隅丸長方形である。

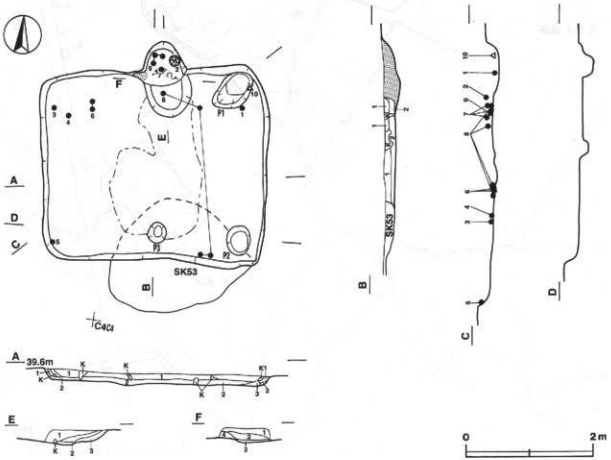
主軸方向　Ｎ－10°－Ｗ

壁　壁高は22～32cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，中央部に浅いくぼみがある。中央部が踏み固められている。

ピット　３か所（Ｐ１～Ｐ３）。Ｐ１・Ｐ２は，長径44～74cm，短径34～44cmの不整楕円形で，深さ18～20cmである。いずれも位置と規模から主柱穴と考えられる。Ｐ３は，長径32cm，短径28cmの不整楕円形で，深さ12cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部を壁外に45cmほど掘り込み，砂質粘土で構築しているが，遺存状態は悪い。西袖部がわずかな



第４図　第１号住居跡実測図

がら残存している。確認できた範囲の規模は長さ120cm，幅85cmである。中央部の底面に焼土ブロックが残存している。煙道は，中央部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

覆土層解説

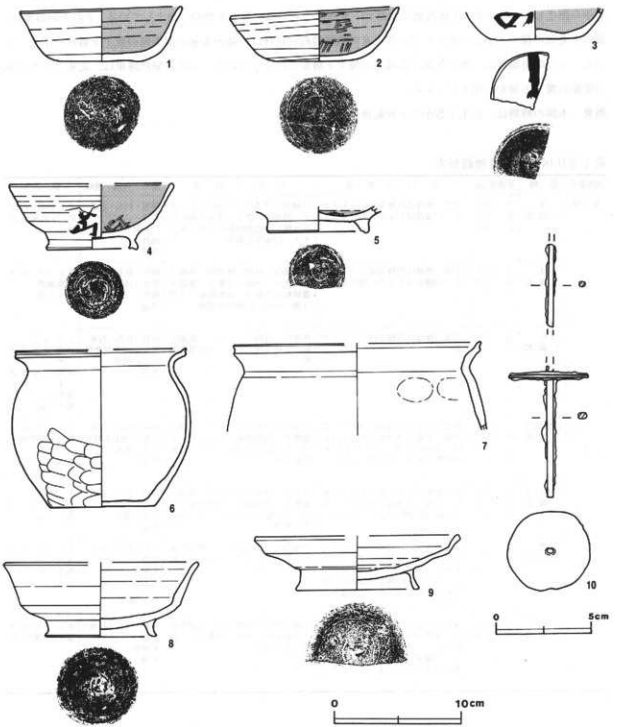
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量，焼土小ブロック・炭化粒子極微量

2　極暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック微量，粘土粒子極微量

3　極暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック微量，ローム粒子極微量

4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量

覆土　3層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。



第5図　第1号住居跡出土遺物実測図

土層解説
1 黒　　色 黒色粒子多量，ローム粒子・焼土粒子極微量
2 黒 褐 色 黒色粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，焼土粒子極微量
3 褐　　色 ローム小ブロック・粒子中量

遺物　土師器片85点，須恵器片１点，鉄製品１点，少量の炭化材が出土している。土師器片は，北東・北西コーナー部の覆土下層から多く出土している。第５図１の土師器坏は，P１の東側床面直上から出土している。２の土師器坏は，竈の北部の東袖側の覆土上層から出土している。３の土師器坏と４の土師器高台付坏は，北西コーナー部の西壁寄りの覆土下層から出土している。５の土師器高台付坏は，南西コーナー部の壁際の覆土上層から出土している。６の土師器甕は北西コーナー部の北壁側の覆土下層から出土している。７の土師器甕は，竈の中央部の覆土下層から出土している。８の須恵器高台付坏は，竈の東袖の南東側の覆土下層から出土している。９の須恵器盤は，竈の北部の西袖側の覆土下層から出土している。10の鉄製紡錘車は，北東コーナー部の壁脇の覆土下層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から９世紀後半と考えられる。

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第５図 1	坏 土 師 器	A 12.6 B 4.3 C 6.3	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア・白色針状物質 褐色 普通	P１ 100% PL26 P１の東側床面直上
2	坏 土 師 器	A 13.2 B 4.2 C 6.3	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面，体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 褐色 普通	P２ 95% PL26 竈東袖側 覆土上層
3	坏 土 師 器	B (2.4) C 7.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 にぶい褐色 普通	P３ 15% 体部外面墨書「中」 底部外面墨書「丿」 北西コーナー部 覆土下層
4	高台付坏 土 師 器	A [12.8] B 5.2 D 7.1 E 1.4	体部中位から口縁部にかけて一部欠損。平底にほぼ直立する高台が付く。体部は内彎して立ち上がり，直線的に延びて口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。体部内面磨き。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台貼り付け後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 にぶい褐色 普通	P４ 70% PL26 体部外面墨書「『□山』」 北西コーナー部 覆土下層
5	高台付坏 土 師 器	B (1.6) D 7.8 E 1.0	高台部から体部下位にかけての破片。平底にほぼ直立する高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部内面磨き。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台貼り付け後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P５ 20% 南西コーナー部 覆土上層
6	甕 土 師 器	A [13.4] B 12.3 C 8.2	体部上位から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。胴部は「く」の字状に外反している。口縁部外面中位に稜をもち，端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P６ 70% PL26 北西コーナー部 覆土下層
7	甕 土 師 器	A [19.3] B (6.9)	体部上位から口縁部にかけて破片。体部は内彎気味立ち上がる。頸部は「く」の字状に外傾している。口縁部外面中位に稜をもち，端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。指頭圧痕を残す。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P７ 5% PL26 竈中央部覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第5図8	高台付坏 須恵器	A [15.0] B 5.9 D 8.5 E 1.3	体部から口縁部にかけて破損。平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部下位で屈曲し，口縁部は外反する。体部下位に稜をもつ。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・長石・白色針状物質・黒色粒子 黄灰色 普通	P8 60% PL26 竈東袖覆土下層
9	蓋 須恵器	A [16.0] B 4.3 D [9.4] E 1.7	高台から口縁部にかけて破損。平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部上位で屈曲し，口縁部は外反する。体部上位に稜をもつ。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・長石・石英・礫 黄灰色 普通	P9 50% PL26 竈西袖覆土下層

図版番号	器種	計測値			備考
		軸幅径(cm)	軸幅厚さ(cm)	重量(g)	
第5図10	鉄製紡錘車	4.4	0.4	(19.1)	軸の一部欠損　M1　北東コーナー部覆土下層　PL34

第2号住居跡（第6～8図）

位置　調査区域の南部，C4f9区。

規模と平面形　長軸3.72m，短軸3.30mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－26°－W

壁溝　南東コーナー部の南壁際を除いて，壁下を巡っている。上幅14～24cm，下幅6～16cm，深さ8～15cmで，断面形はU字状ないしV字状である。

壁　壁高は44～52cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。

ピット　6か所（P1～P6）。P3～P6は，長径24～42cm，短径20～30cmの円形及び不整楕円形で，深さ20～34cmである。P3は北東コーナー部寄りの北壁の外側，P4は南東コーナー部寄りの南壁の外側，P5は南西コーナー部寄りの南壁の外側，P6は第1竈西袖寄りの北壁外側に位置し，いずれも位置と規模から壁外柱穴と考えられる。P1は，長径42cm，短径34cmの不整楕円形で，深さ36cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。P2は，北西コーナー部に位置し，長径38cm，短径34cmの楕円形で，深さ14cmである。性格は不明である。

貯蔵穴　3か所に付設されている。貯蔵穴1は，北東コーナー部に付設されている長径90cm，短径70cmの不整楕円形で，深さ14cmである。貯蔵穴2は，南東コーナー部に付設されている。長軸90cm，短軸80cmの長方形で，深さ20cmである。貯蔵穴3は，南西コーナー部に付設されている。長径110cm，短径76cmの楕円形で，深さ20cmである。

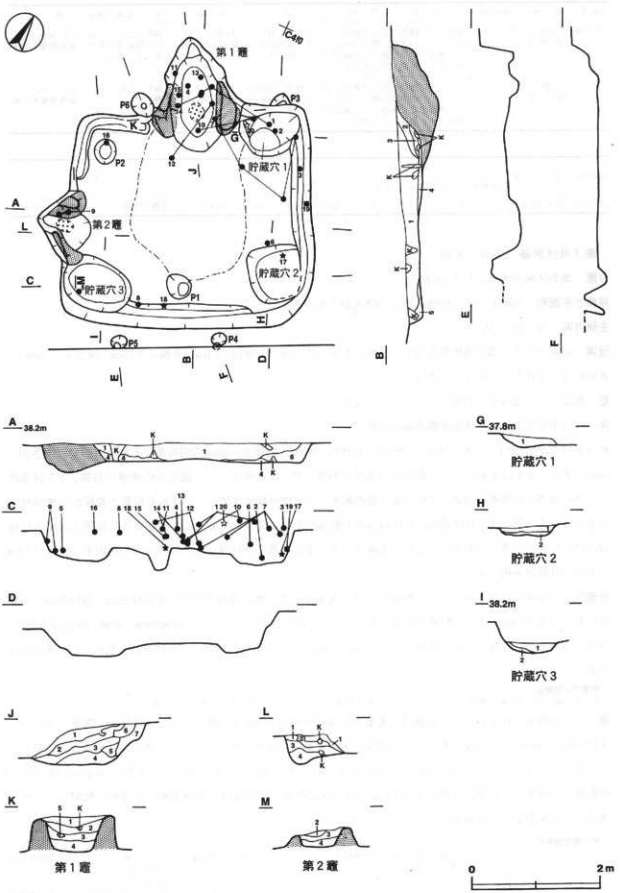
貯蔵穴土層解説

1　黒褐色　焼土粒子微量，ローム小ブロック・粒子極微量　　2　暗褐色　ローム粒子少量

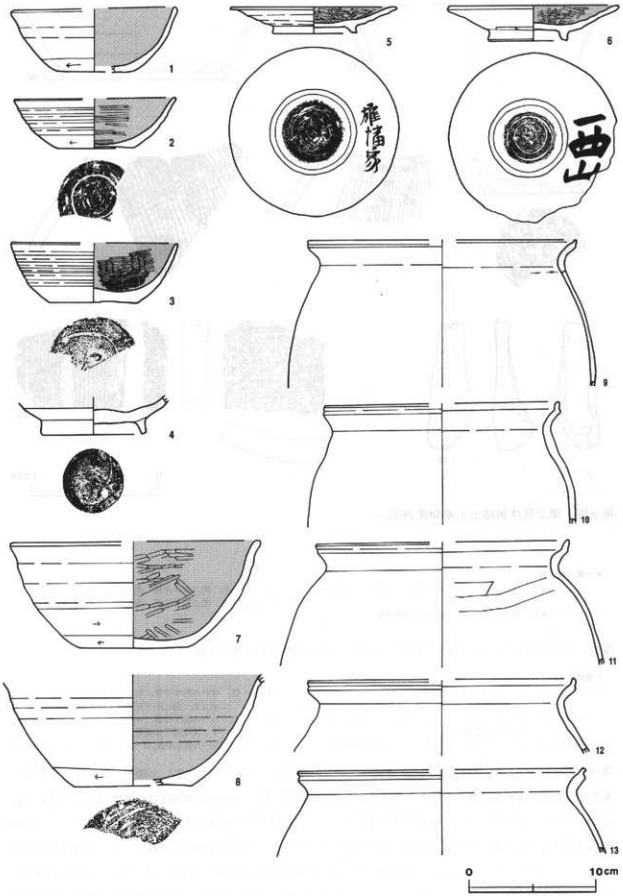
竈　2か所構築されている。第1竈は，北壁中央部を壁外に105cmほど掘り込み，砂質粘土で構築している。規模は長さ180cm，幅145cmである。火床部は，床面を掘りくぼめて使用している。煙道は，火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。第2竈は，西壁の中央部からやや南西コーナー部寄りを壁外に45cmほど掘り込み，砂質粘土で構築している。規模は長さ85cm，幅115cmである。火床部は，床面を掘りくぼめて使用している。煙道は，火床面から急な傾斜で立ち上がっている。

第1竈土層解説

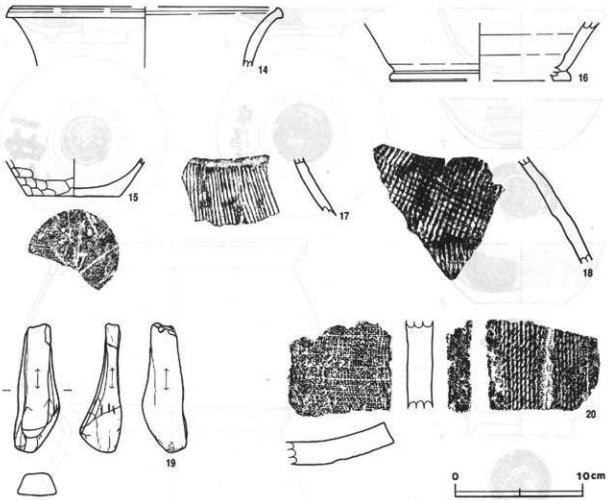
1　黒色　ローム粒子・粘土粒子微量，焼土粒子極微量
2　赤灰色　粘土粒子少量，焼土粒子微量，焼土中ブロック極微量
3　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子少量，焼土中ブロック微量
4　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物微量，焼土中ブロック極微量
5　暗赤灰色　粘土粒子中量，焼土粒子少量
6　赤黒色　粘土粒子少量，焼土粒子微量，ローム粒子極微量
7　暗赤灰色　ローム粒子微量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子極微量



第6図　第2号住居跡実測図



第７図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)



第8図　第2号住居跡出土遺物実測図(2)

第2竈土層解説

1　黒　　色　ローム粒子・粘土粒子微量，焼土粒子・炭化物極微量
2　オリーブ褐色　粘土粒子多量，ローム粒子極微量
3　赤　黒　色　焼土粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
4　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，焼土小ブロック微量

覆土　6層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土小ブロック微量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極微量
2　黒　　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・粒子極微量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子極微量
5　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
6　極 暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子極微量

遺物　土師器片567点，須恵器片30点，陶器片2点，石製品1点が出土している。土師器片は，中央部の第1竈寄りの東部の東壁側の覆土下層から多く出土している。第7図1・2の土師器坏は，北東コーナー部の床面直上から出土している。3の土師器坏は，北東コーナー部の東壁寄りの覆土上層から出土している。4の土師器高台付坏は，第1竈の中央部の覆土上層から出土している。5の土師器皿は，南西コーナー部の覆土下層から出土している。6の土師器皿は，南東コーナー部の東壁側の覆土下層から出土している。7の土師器椀は，第1竈の東袖脇の覆土下層から出土している。8の土師器椀は，南西コーナー部の南壁寄りの覆土上層から出土している。9の土師器甕は，第2竈の北袖脇の覆土下層から出土している。10の土師器甕は，第1竈の焚き

口部の覆土下層から出土している。11の土師器甕は，第１竈の北部西袖側の覆土上層から出土している。12の土師器甕は，第１竈の東袖脇の覆土下層から出土している。13の土師器甕は，第１竈の中央部の覆土下層から出土している。15の土師器甕は，第１竈の西袖側の覆土下層から出土している。14の須恵器甕は，第１竈の中央部の覆土下層から出土している。16の灰釉陶器壺は，北西コーナー部の覆土上層から出土している。19の砥石は，東壁の中央部の壁際の覆土下層から出土している。17の須恵器甕は，南東コーナー部の覆土下層から出土している。18の須恵器甕は，南壁中央部の脇の覆土下層から出土している。20の平瓦は，第１竈の東側の覆土上層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から９世紀後半と考えられる。２か所構築されている竈は，両方とも袖部が残存しているので，同時期に併用されていたものと考えられる。

第２号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第７図 1	坏 土師器	A [12.8] B 5.2 C 6.3	底部から体部中位にかけて一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P10 70% PL26 北東コーナー部 床面直上
2	坏 土師器	A [12.5] B 3.9 C [6.0]	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。端部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部内面磨き。体部下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 にぶい黄褐色 普通	P11 60% PL26 北東コーナー部 床面直上
3	坏 土師器	A [13.0] B 4.7 C [7.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部内面磨き。体部下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P12 40% PL26 北東コーナー部 覆土上層
4	高台付坏 土師器	B (3.0) D 8.2 E 1.2	高台から体部下位にかけての破片。平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台取り付け後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 にぶい褐色 普通	P13 20% 第１竈中央部覆土上層
5	高台付皿 土師器	A 12.8 B 2.0 D 6.5 E 0.5	平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は大きく開いて，口縁部に至る。端部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部内面磨き。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 にぶい黄橙色 普通	P14 100% PL26 体部外面墨書 「部稽家」 南西コーナー部 覆土下層
6	高台付瓶 土師器	A 13.1 B 2.8 D 6.1 E 0.8	口縁部一部欠損。平底に直線的に開く高台が付く。体部は大きく開いて，口縁部に至る。端部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部内面磨き。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 にぶい橙色 普通	P15 90% PL26 体部外面墨書 「西山」 南東コーナー部 覆土下層
7	鉢 土師器	A [19.3] B 8.5 C 8.5	底部から口縁部にかけて一部欠損。体部は内傾して立ち上がり，口縁部に至る。端部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部内面磨き。底部回転ヘラ切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 にぶい黄橙色 普通	P16 60% PL26 底部から体部にかけて一部二次焼成 第１竈東袖脇 覆土下層
8	椀 土師器	B 8.8 C [8.4]	底部から体部中位にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P17 30% 南西コーナー部 覆土上層
9	甕 土師器	A [21.0] B (11.7)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。口縁部外面中位に稜をもつ。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・礫 明褐色 普通	P18 20% 第２竈北袖脇 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 10	甕 土師器	A [18.6] B (9.7)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。口縁部外面中位に稜をもつ。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P19 10% PL26 第1竈焚き口部覆土下層
11	甕 土師器	A [19.7] B (9.7)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。口縁部外面中位に稜をもつ。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面横位のナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P20 10% PL26 第1竈西袖側覆土上層
12	甕 土師器	A [21.0] B (6.0)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。口縁部外面中位に稜をもつ。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P21 10% 第1竈東袖脇覆土下層
13	甕 土師器	A [22.8] B (6.7)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。口縁部外面中位に稜をもつ。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P22 5% 第1竈中央部覆土下層
第8図 14	甕 須恵器	A [20.8] B (4.7)	口縁部の破片。口縁部は外反する。端部は下方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 黄灰色 普通	P24 10% PL26 第1竈中央部覆土下層
15	甕 土師器	B (3.0) C 7.2	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色　普通	P23 5% 第1竈西袖側覆土下層
16	壺 灰釉陶器	B (4.6) D [14.0] E 0.8	高台部から体部下位にかけての破片。輪高台。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。削り出し輪高台。体部外面・高台外面施釉。	砂粒・長石・石英 黄褐色 普通	P25 10% 北西コーナー部覆土上層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第8図 17	甕 須恵器	厚さ 0.8	体部片。外面に平行の叩き目を残す。	TP1 南東コーナー部覆土下層
18	甕 須恵器	厚さ 1.0	体部片。外面に平行の叩き目を，内面に指頭圧痕を残す。	TP2 南壁中央脇覆土下層

図版番号	種別	計測値				石材	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第8図19	砥石	10.1	3.6	3.3	94.7	凝灰岩	Q52　東壁中央部覆土下層　PL34

図版番号	種別	計測値				器形・手法の特徴	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第8図20	平瓦	(7.4)	(8.8)	1.9	(183.0)	凸面縄目叩き，凹面布目痕	T1　竈袖補強材　灰色　第1竈東側覆土上層

第3号住居跡（第9・10図）

位置　調査区域の南部，C 4 a 4 区。

重複関係　第48号土坑に東部を掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形　北部が根切り溝に掘り込まれ，東部は第48号土坑に掘り込まれて残存していないため，正確な規模や平面形は不明であるが，南北軸（2.29）m，東西軸2.14m で不整長方形と推定される。

主軸方向　N－80°－E

壁　壁高は6～11cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。北東部が踏み固められている。

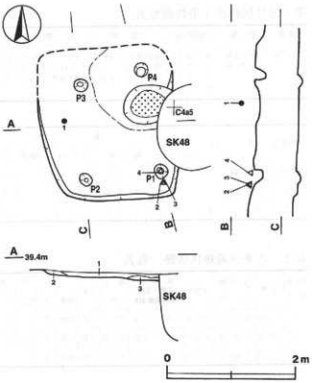
ピット　4か所（P1～P4）。P1～P4は，長径22cm，短径18～20cmの不整円形及び不整楕円形で，深さ6～18cmである。いずれも位置と規模から主柱穴と考えられる。

竈　遺存状態は極めて悪い。北東コーナー部寄りの東壁脇に焼土が残存するくぼみが確認されているので，この位置を火床面とする東竈が構築されていたことが推定される。確認できた範囲の規模は，長さ80cm，幅50cmである。袖部及び中央部から煙道部にかけては，第48号土坑との重複により，残存していない。

覆土　3層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

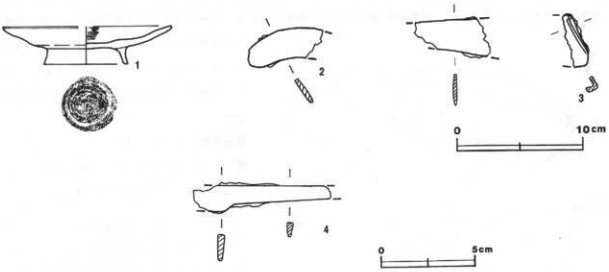
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　極暗褐色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
3　黒　　色　ローム粒子微量，ローム中・小ブロック極微量



第9図　第3号住居跡実測図

遺物　土師器片21点，鉄製品3点が出土している。土師器片は，大部分が南東コーナー部の覆土下層から出土している。第10図1の土師器高台付皿は，P2とP3の間の中央部西壁寄りの覆土上層から出土している。2と3の鉄鎌，4の刀子は，南東コーナー部の覆土下層から出土している。

所見　床面から確認されている4か所のピットは，その位置と平面形から主柱穴と考えているが，掘り込みが浅いという深さの点で，不確実な要素を残している。また，推定している北壁と南壁の規模と相違についても，不明な点を残している。本跡の時期は，出土土器から9世紀後半と考えられる。



第10図　第3号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	高台付皿 土師器	A [13.1] B 3.0 D 6.6 E 1.3	高台から口縁部にかけて一部欠損。平底に「八」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に大きく開く。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 明赤褐色 普通	P 26 60% PL26 中央部西壁寄り 覆土上層

図版番号	種別	計測値				備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第10図 2	鏃	(5.8)	2.3	0.4	(9.4)	鋒寄りの刃部残存 M 2 南東コーナー部覆土下層 PL34
3	鏃	—	4.1	0.2	(20.1)	刃部残存 M 3 南東コーナー部覆土下層
4	刀子	(7.2)	1.4	0.4	(6.5)	関から茎にかけて残存 M 4 南東コーナー部覆土下層 PL34

表２　古墳Ａ遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)(壁平均距離×壁距離)	壁高(cm)	床面	内部施設					覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
							炉跡	主柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口			
1	C 4 b4	N-10°-W	隅丸長方形	3.54 × 3.00	22～32	平坦	外縁	2	－	－	1	壁 自然	土師器（坏・高台付坏・甕），須恵器（蓋），鉄製品（鎌），鉄滓	本跡→SK53
2	C 4 f9	N-25°-W	隅丸長方形	3.72 × 3.30	44～52	平坦	外縁	4	3	－	1	壁 自然	土師器（坏・高台付坏・高台付皿・鉢・甕・鍋・高杯・器台・蓋），須恵器（蓋），武蔵型甕（蓋），武蔵焼器（蓋），紡錘車，砥石，平瓦	
3	C 4 a4	N-80°-E	不整長方形	(2.29) × 2.14	6～11	平坦	垂直	4	－	－	－	〔壁〕 自然	土師器（高台付皿），鉄鏃，刀子	本跡→SK46

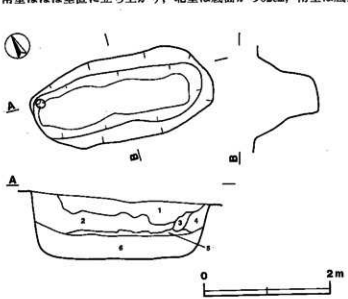
2　土坑

今回の調査で，土坑57基を確認した。ここでは，形状などから陥し穴と考えられる４基について記載する。

第12号土坑（第11図）

位置　調査区域の北部，Ｂ３ａ１区。緩斜面に位置する。

規模と形状　長径2.88m，短径1.33mの楕円形で，深さ102cmである。底面は，長径2.40m，短径0.60mの楕円形で，ほぼ平坦であるが，北西コーナー部には，径約14cmの円形で深さ12cmのくぼみが確認されている。北・南壁はほぼ垂直に立ち上がり，北壁は底面から62cm，南壁は底面から56cmの高さより上が外傾する。東・西壁はほぼ垂直に立ち上がる。くぼみのある北西コーナー部はオーバーハングして立ち上がり，底面から80cmの高さより上はわずかに外傾する。



第11図　第２号土坑実測図

長径方向　Ｎ－67°－Ｗ

覆土　６層からなり，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量，焼土小ブロック極微量，締まり強
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，締まり極めて強
3　黒　褐　色　ローム粒子微量，粘性・締まり強
4　暗　褐　色　ローム粒子・黒色小ブロック微量，締まり強
5　褐　　色　黒色粒子少量，ローム中・小ブロック微量，粘性強
6　暗　褐　色　ローム小ブロック・粒子中量，ローム中ブロック少量，KP粒子微量，粘性・締まり強

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため，不明である。

第21号土坑（第12図）

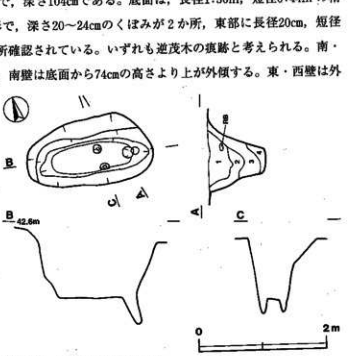
位置　調査区域の北部，Ｂ３ａ３区。緩斜面に位置する。

規模と形状　長径2.02m，短径1.10mの楕円形で，深さ104cmである。底面は，長径1.36m，短径0.44mの楕円形で，平坦である。中央部に径約12cmの円形で，深さ20～24cmのくぼみが２か所，東部に長径20cm，短径16cmの不整楕円形で，深さ44cmのくぼみが１か所確認されている。いずれも逆茂木の痕跡と考えられる。南・北壁は垂直に立ち上がり，北壁は底面から50cm，南壁は底面から74cmの高さより上が外傾する。東・西壁は外傾して立ち上がり，東壁は底面から39cm，西壁は底面から32cmの高さより上が外傾する。

長径方向　N－85°－E

覆土　４層からなり，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量，締まり強
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・スコリア粒子微量，粘性強
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，粘性強
4　暗 褐 色　ローム小ブロック・KP粒子微量，黒色粒子極微量，粘性強



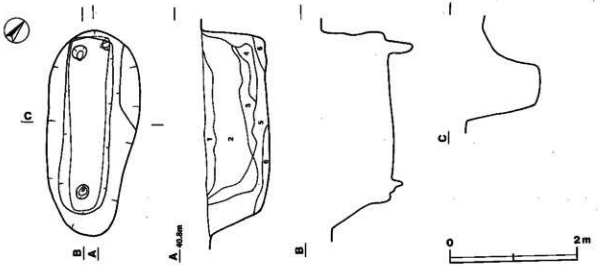
第12図　第21号土坑実測図

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため，不明である。

第31号土坑（第13図）

位置　調査区域の北部，Ａ３ｉ６区。緩斜面に位置する。

規模と形状　長径3.16m，短径1.45mの長楕円形で，深さ108cmである。底面は，長径2.96m，短径0.62mの



第13図　第31号土坑実測図

楕円形で，平坦である。北部に，径20cmの円形で，深さ38～40cmのくぼみが２か所，南部に長径24cm，短径16cmの楕円形で，深さ18cmのくぼみが１か所確認されている。いずれも逆茂木の痕跡と考えられる。北・西壁は垂直に，南・東壁は外傾して立ち上がる。

長径方向　N－34°－W

覆土　６層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子極微量，締まり強
2　黒　　色　ローム小ブロック・粒子微量，締まり極強
3　黒 褐 色　ローム粒子微量，ローム小ブロック・スコリア粒子極微量，粘性強
4　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム粒子極微量，粘性・締まり強
5　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，スコリア粒子極微量，粘性強
6　極暗褐色　KP粒子少量，ローム粒子極微量，粘性極強

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため，不明である。

第36号土坑（第14図）

位置　調査区域の北部，Ａ３ｄ１区。緩斜面に位置する。

重複関係　第２号溝跡と第２号道路跡に掘り込まれており，本跡の方が古い。

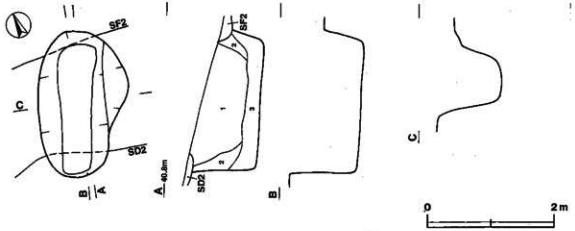
規模と形状　長径2.30m，短径1.40mの不整楕円形で，深さ102cmである。底面は，長径2.04m，短径0.60mの楕円形で，平坦である。南壁は垂直に，北・東・西壁は外傾して立ち上がる。

長径方向　N－28°－E

覆土　３層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　黒色粒子中量，ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量
2　黒 褐 色　ローム小ブロック・粒子少量
3　暗 褐 色　KP粒子少量，ローム小ブロック微量，締まり強



第14図　第36号土坑実測図

表3　古峯A遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新) その他
1	A 2 e5	N－67°－W	楕円形	1.45 × 0.88	12	緩斜	平坦	自然		
2	A 2 f5	N－10°－W	楕円形	1.00 × 0.79	37	緩斜	皿状	自然		
3	A 2 f5	—	円形	1.31 × 1.26	52	緩斜	皿状	自然		
4	A 2 g4	N－25°－W	不定形	[1.38] × 1.60	28	緩斜	皿状	自然	土師器片（坏、甕）	
5	A 2 h5	N－30°－E	不定形	2.67 × 1.68	62	緩斜	皿状	自然		焼土
6	A 2 h5	N－71°－E	不定形	2.17 × 1.44	46	緩斜	皿状	自然		二段掘り込み状
7	A 2 h7	N－39°－E	不整楕円形	2.28 × 1.51	33	緩斜	平坦	自然		
8	A 2 e8	N－46°－W	楕円形	1.31 × 1.06	24	緩斜	平坦	自然		
9	A 2 d8	N－83°－E	楕円形	1.22 × 0.94	34	緩斜	皿状	人為		
10	A 2 d6	N－30°－W	楕円形	1.40 × 1.11	42	緩斜	平坦	自然		
11	A 2 g8	N－66°－W	楕円形	3.30 × 2.15	71	緩斜	凹凸	人為	弥生土器片	十王台式
12	B 3 a1	N－67°－W	楕円形	2.88 × 1.33	102	外傾	平坦	自然		陥し穴
13	A 2 i0	N－28°－W	楕円形	1.53 × 0.92	21	緩斜	平坦	人為		
14	A 3 i1	N－67°－E	隅丸長方形	1.31 × 0.87	32	緩斜	凹凸	人為		
15	A 2 d6	—	円形	1.38 × 1.28	75	緩斜	平坦	自然		
16	A 2 i7	N－42°－E	楕円形	0.86 × 0.54	10	緩斜	皿状	自然		
17	B 2 a9	N－42°－W	不整楕円形	1.71 × 1.03	35	緩斜	皿状	自然	弥生土器片	十王台式
18	B 2 a0	N－42°－W	楕円形	0.90 × 0.56	18	緩斜	皿状	自然		
19	A 3 i3	N－78°－E	不整楕円形	1.25 × 0.93	14	緩斜	皿状	自然		二段掘り込み状
20	A 3 j3	N－13°－W	楕円形	1.47 × 0.91	31	緩斜	皿状	自然		
21	B 3 a3	N－85°－W	楕円形	2.02 × 1.10	104	外傾	平坦	自然		陥し穴
22	A 3 j4	N－49°－W	楕円形	1.07 × 0.94	23	緩斜	平坦	自然		
23	B 2 b9	N－47°－W	不整楕円形	1.91 × 1.71	15	緩斜	平坦	自然	弥生土器片	十王台式
24	A 3 f2	N－63°－E	不定形	0.80 × 0.75	69	外傾	平坦	自然		SK34→SF 1
25	A 3 h5	N－40°－W	楕円形	0.56 × 0.48	20	緩斜	皿状	自然		
26	A 3 j5	N－82°－W	楕円形	0.93 × 0.74	23	緩斜	皿状	自然		
27	A 3 h1	N－42°－W	不定形	1.68 × 1.00	27	緩斜	皿状	自然		
28	A 3 h6	N－4°－E	楕円形	0.68 × 0.62	24	緩斜	皿状	自然		
29	A 3 h6	N－47°－W	楕円形	0.86 × 0.69	17	緩斜	皿状	自然		
30	A 3 i7	N－10°－E	楕円形	1.10 × 0.57	15	緩斜	皿状	自然		
31	A 3 i6	N－34°－W	長楕円形	3.16 × 1.45	108	外傾	平坦	自然		陥し穴
32	A 3 f2	—	円形	1.15 × 1.13	40	緩斜	皿状	自然		
33	A 3 e2	—	円形	0.80 × 0.70	26	緩斜	皿状	自然		
34	A 2 c9	N－30°－W	不整楕円形	1.41 × 1.10	66	緩斜	平坦	自然		
35	A 2 d0	N－36°－E	不定形	2.10 × 1.28	52	緩斜	平坦	自然		SK35→SD 2
36	A 3 d1	N－28°－E	不整楕円形	2.30 × 1.40	102	外傾	平坦	自然		SK36→SD 2 陥し穴 SK36→SF 2
37	A 3 c1	N－56°－W	不定形	2.03 ×(1.49)	82	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	
38	B 3 h8	—	円形	1.22 × 1.16	140	垂直	平坦	自然	土師器片（器台脚部）	
39	B 3 e7	N－12°－W	不定形	1.64 × 1.11	27	緩斜	皿状	人為		
41	B 4 d2	—	円形	0.79 × 0.73	21	緩斜	皿状	人為	瓶器片	
42	B 4 e3	N－65°－E	隅丸長方形	1.62 × 1.10	55	緩斜	平坦	自然	土師器片（甕）、土師質土器片（小皿）	
43	B 3 h7	N－58°－E	不整楕円形	1.23 × 1.07	34	緩斜	皿状	自然		
44	B 4 h2	N－81°－E	不定形	(1.38 × 1.06)	34	緩斜	平坦	人為		
45	B 4 f3	N－57°－E	不定形	1.88 × 0.99	12	緩斜	平坦	自然		SK51と重複（新旧不明）
46	B 4 f4	N－10°－W	隅丸長方形	1.97 × 0.98	46	緩斜	平坦	自然	土師器片（坏）	

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新) その他
47	C 4 d5	N－75°－E	不整楕円形	2.92 × 1.58	64	緩斜	凹凸	人為		
48	C 5 a5	N－52°－E	楕円形	1.51 × 1.37	135	垂直	皿状	人為	土師器（坏，甕）	
49	C 4 a5	—	円形	1.30 × 1.20	121	垂直	平坦	人為		
50	C 4 a5	N－0°	楕円形	1.68 × 1.52	124	垂直	平坦	人為	陶器片	
51	B 4 f3	N－24°－E	不定形	0.80 ×(0.53)	36	緩斜	平坦	自然		SK45と重複（新旧不明）
53	C 4 b4	N－70°－E	不定形	2.30 ×[1.80]	9	緩斜	平坦	自然	須恵器片（坏）	
54	C 4 d9	N－45°－E	不定形	2.81 × 1.03	24	緩斜	皿状	自然		SI 1 →SK53
55	C 5 c1	—	円形	0.98 × 0.96	29	緩斜	皿状	自然		
56	C 5 c2	N－57°－E	楕円形	1.43 × 1.09	23	緩斜	皿状	自然		
57	C 4 c7	N－58°－W	不整楕円形	0.89 × 0.72	44	緩斜	皿状	人為		
58	B 4 d0	N－6°－E	不定形	1.43 ×(0.87)	20	緩斜	平坦	自然		SK58→SD 4
59	B 3 h8	N－53°－E	不定形	1.56 × 1.24	20	緩斜	凹凸	人為		

3　溝跡

今回の調査で，溝跡８条を確認した。以下，遺構番号順にそれぞれの遺構の特徴と出土遺物等について記載する。

第１号溝跡（第15図・付図１）

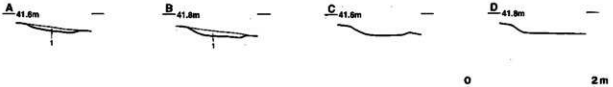
位置　調査区域の北部，Ａ３h5 ～Ｂ３a6 区。

規模と形状　北端部のＡ３h5 区から南方向（Ｎ－165°－Ｅ）の調査区域外（Ｂ３a5 区）まで直線的に延びている。調査できた範囲の長さは11.20m である。上幅0.58～1.10m，下幅0.36～0.82m，深さは10～14cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は弧状である。

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため不明である。性格は不明である。



第15図　第１号溝跡実測図

第２号溝跡（第16図・付図１）

位置　調査区域の北部，Ａ２c8 ～Ａ３e4 区。

重複関係　第35・36号土坑を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。

規模と形状　北部のＡ２c8 区から東方向（Ｎ－95°－Ｅ）のＡ３d2 区まで直線的に延び，Ａ３d2 区から南

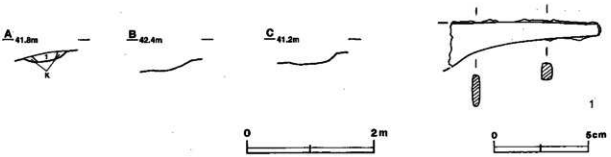
東方向（N－130°－E）へ折れ，調査区域外（A 3 e4 区）へ延びている。調査できた範囲の長さは23.20mである。上幅0.56～［2.00］m，下幅0.24～［1.60］m，深さは12～18cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は弧状である。

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量

遺物　土師質土器細片４点，鉄製品１点が出土している。第16図１の刀子は，中央部の覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から中世と考えられる。性格は不明である。



第16図　第２号溝跡・出土遺物実測図

第２号溝跡出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
第16図１	刀　子	（7.8）	2.4	0.5	（14.8）	茎残存　M５　中央部覆土中

第３号溝跡（第17図・付図１）

位置　調査区域の中央部，B 3 d7 ～B 3 d9 区。

規模と形状　調査区域外B 3 d7 区から北東方向（N－70°－E）に約６m延び，東寄りに折れ（N－80°－E）B 3 d9 区まで約４mほぼ直線的に延びている。調査できた範囲の長さは9.84m である。上幅0.60～0.88m，下幅0.36～0.52m，深さは10～20cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は弧状である。東部の底面の中央部にピット１か所が確認されている。

覆土　２層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

第17図　第３号溝実測図

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量　　2　黒　褐　色　ローム粒子少量

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため不明である。性格は不明である。

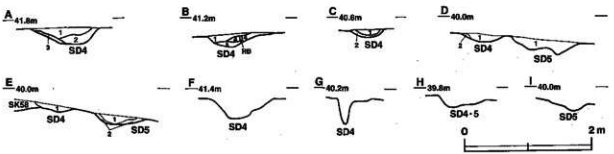
第４号溝跡（第18図・付図１）

位置　調査区域の中央部，Ｂ３g4～Ｂ３c0区。

重複関係　Ｂ３d0区で第58号土坑を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。

規模と形状　調査区域外Ｂ３g4区から東方向（Ｎ－97°－Ｅ）に約28m延び，北方向へＬ字状に折れ（Ｎ－20°－Ｗ），Ｂ３c0区まで約14mほぼ直線的に延びている。調査できた範囲の長さは42.2mである。上幅0.36～1.48m，下幅0.12～0.36m，深さは20～44cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は弧状である。Ｂ３g8区に２か所，Ｂ３g0区に２か所，Ｂ４e1区に１か所，Ｂ３g5区に１か所，底面の中央部または北・南寄りにピットが確認されている。Ｂ３g5区からＢ３g8区にかけて，壁の北側，一部南側が二段掘り込み状を呈している。

覆土　５層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。



第18図　第４・５号溝跡実測図

土層解説
1　黒　　色　黒色粒子中量，ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・黒色粒子中量，ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量，黒色粒子少量
4　黒　　色　黒色粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
5　黒　褐　色　黒色粒子中量，ローム中ブロック・粒子少量

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため不明である。性格は不明である。

第５号溝跡（第18図・付図１）

位置　調査区域の中央部，Ｂ３b0～Ｂ４e1区。

規模と形状　Ｂ４e1区から北西方向（Ｎ－20°－Ｗ）のＢ３b0区まで直線的に延びている。長さは13.2mである。上幅0.40～1.00m，下幅0.20～0.52m，深さは20～22cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は弧状である。Ｂ４e1区の東寄りの壁部にピット１か所が確認されている。そのピットの南側に，長径72cm，短径72cmの不整楕円形の硬化面が確認されている。

覆土　２層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　ローム小ブロック・ローム粒子・黒色粒子少量　　2　暗　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため不明である。性格は不明である。

第6号溝跡（第19図・付図1）

位置　調査区域の中央部，B 3 h8 ～B 4 g5 区。

重複関係　B 4 g5 区で比較的新しいと考えられる根切り溝に掘り込まれており，本跡の方が古い。

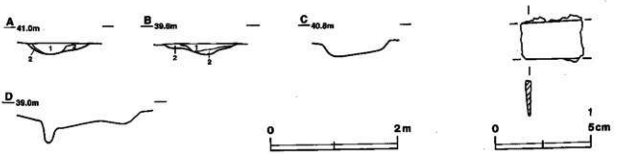
規模と形状　B 3 h8 区から北東方向（N－80°－E）のB 4 g5 区の根切り溝との重複部分まで直線的に延びている。確認できた範囲の長さは28.2m である。上幅0.80～2.00m，下幅0.20～0.88m，深さは10～52cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は弧状である。B 4 h2 区とB 4 g4 区にかけて壁の北側が二段掘り込み状を呈しており，B 4 g3 区にピット1か所が確認されている。

覆土　2層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量　　2　褐　色　ローム粒子・黒色粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　陶器細片1点，瓦質土器細片3点，磁器細片1点，鉄製品1点が出土している。第19図1の刀子は，中央部の覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世以降と考えられる。性格は不明である。



第19図　第6号溝跡・出土遺物実測図

第6号溝跡出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値				備　考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第19図1	刀　子	(3.2)	2.0	0.3	(6.9)	刃部の一部残存　M 6　中央部覆土中

第7号溝跡（第20図・付図1）

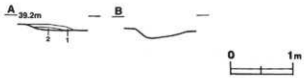
位置　調査区域の南部，C 4 b6 ～B 4 j5 区。

重複関係　B 4 j5 区で比較的新しいと考えられる根切り溝に掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と形状　C 4 b6 区から北西方向（N－15°－W）に約4.5m 延び，やや西寄り（N－30°－W）に折れ，B 4 j5 区の根切り溝との重複部分まで直線的に延びている。確認できた範囲の長さは7.5m である。上幅0.76～0.90m，下幅0.34～0.62m，深さは10～16cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は弧状である。

覆土　2層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　極暗褐色　ローム粒子微量



第20図　第７号溝跡実測図

遺物　土師質土器細片３点，陶器細片３点が出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世以降と考えられる。性格は不明である。

第８号溝跡（第21図・付図１）

位置　調査区域の南部，Ｃ４ｇ5 ～Ｂ４ｊ0 区。

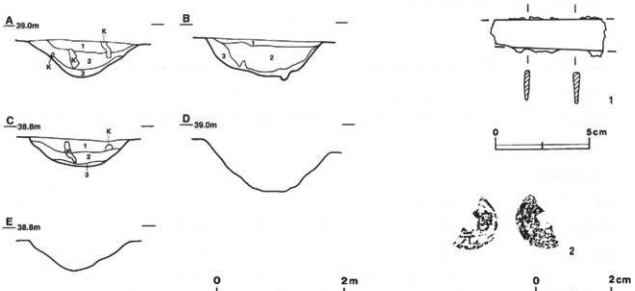
規模と形状　調査区域外Ｃ４ｇ5 区から北東方向（Ｎ－30°－Ｅ）に約36m 延び，東方（Ｎ－40°－Ｅ）に折れ，Ｂ４ｊ0 区の調査区域外までほぼ直線的に延びている。調査できた範囲の長さは66.0m である。上幅1.28～2.12m，下幅0.24～0.56m，深さは44～86cmである。底面は平坦で，壁面は外傾して立ち上がる。断面形はＶ字状である。東部・中央部・西部の底面及び壁面に25か所のピットが確認されている。

覆土　３層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子極微量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，ローム中ブロック極微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム大・中・小ブロック微量

遺物　土師質土器細片１点，瓦質土器細片１点，陶器細片１点，磁器細片１点，鉄製品１点，古銭１点が出土している。第21図１の刀子は，東部の覆土中から出土している。２の古銭「熙寧元寶」は，覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世以降と考えられる。性格は不明である。



第21図　第８号溝跡・出土遺物実測図

第８号溝跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第21図１	刀子	(6.1)	1.7	0.3	(4.3)	刃部の一部残存　Ｍ７　東部覆土中

図版番号	銭銘	計測値 径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	初鋳年代	備考
第21図２	熙寧元寶	2.4	—	0.1	(1.3)	元豊元年(1068年)	北宋銭　Ｍ８　覆土中　PL34

表４　古峯Ａ遺跡溝跡一覧表

溝番号	位置	方向	断面	規模 確認長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
1	Ａ３h5～Ｂ３a6	N-165°-E	弧状	11.2	0.58～1.10	0.35～0.82	10～14	緩傾	平坦	自然		
2	Ａ２c8～Ａ３e4	N-95°-E N-130°-E	弧状	23.2	0.56～[2.00]	0.24～[1.60]	12～18	緩傾	平坦	自然	土師質土器片，鉄製品	
3	Ｂ３d7～Ｂ３d9	N-70°-E N-80°-E	弧状	9.84	0.60～0.88	0.35～0.52	10～20	緩傾	平坦	自然		
4	Ｂ３g4～Ｂ３c0	N-97°-E N-20°-W	弧状	42.2	0.36～1.48	0.12～0.36	20～44	緩傾	平坦	自然		SK58→本跡
5	Ｂ３b0～Ｂ４e1	N-20°-W	弧状	13.2	0.40～1.00	0.20～0.52	20～22	緩傾	平坦	自然		
6	Ｂ３h8～Ｂ４g5	N-40°-E	弧状	28.2	0.80～2.00	0.20～0.88	20～52	緩傾	平坦	自然	陶器片，瓦質土器片，磁器片，鉄製品	本跡→現切り溝
7	Ｃ４h6～Ｂ４j5	N-15°-W N-30°-W	弧状	7.5	0.76～0.90	0.34～0.62	10～16	緩傾	平坦	自然	土師質土器片，陶器片	
8	Ｃ４g5～Ｂ４j0	N-30°-E N-40°-E	Ｖ字	66.0	1.22～2.12	0.24～0.56	44～66	外傾	平坦	自然	土師質土器片，瓦質土器片，陶器片，鉄製品，古銭	

４　道路跡

今回の調査で，道路跡３条を確認した。以下，その特徴について記載する。

第１号道路跡（第22図）

位置　調査区域の北部，Ａ２j5～Ａ３e4区。

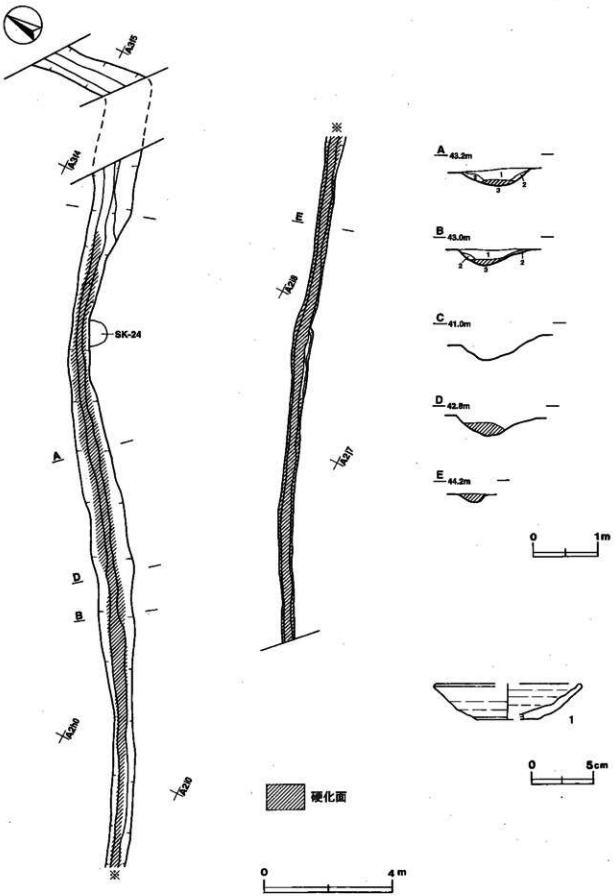
重複関係　第24号土坑を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。

規模と形状　浅い溝状遺構の覆土下層と底面に硬化面が認められたため，道路跡として扱った。北部の西端部の調査区域外（Ａ２j5区）から北東方向のＡ３f4区までほぼ直線的に延び，調査区域外の幅２ｍほどの土手を挟んで，北方向のＡ３e4区の調査区域外へ延びている。調査できた範囲で長さ42.50m，幅0.36～1.20mである。断面形は弧状である。東部（Ａ３e4区・Ａ３f4区）を除いて，覆土下層から底面にかけて黒色土の硬化した面が確認されている。西端部（Ａ２j5区）と東端部（Ａ３e4区）との比高は5.38mである。

主軸方向　Ｎ－60～65°－Ｗ（Ａ２j5～Ａ３f4区）Ｎ－0°（Ａ３e4区）

覆土　３層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。締まりが極めて強い極暗褐色土の第３層が，路面として使用されたと考えられる。

Ａ－Ａ′土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量
3　極暗褐色　ローム小ブロック・粒子微量，締まり強



第22図　第１号道路跡・出土遺物実測図

B－B′土層解説
1 黒 褐 色 ローム小ブロック・粒子微量
2 黒 褐 色 ローム小ブロック・粒子少量
3 極暗褐色 ローム小ブロック・粒子微量，粘性弱，締まり極強

遺物 土師質土器細片3点，陶器細片1点，磁器細片1点が出土している。第22図1の土師質土器小皿は，東部の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は，出土土器から中世以降と考えられる。

第1号道路跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第22図 1	小 皿 土師質土器	A [11.5] B 2.8 C [4.8]	底部から口縁部にかけての破片。底部はわずかに突出している。体部は大きく開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P27 40% PL26 東部覆土中

第2号道路跡（第23図）

位置 調査区域の北部，A2c6～A3c2区。

重複関係 第36・37号土坑を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。

規模と形状 浅い溝状遺構の底面直上に硬化した層が認められたことから，道路跡として扱った。北端部の調査区域外（A2c6区）から北東方向の調査区域外（A3c2区）までほぼ直線的に延びている。調査できた範囲で長さ21.00m，幅0.20～0.50mである。断面形は弧状あるいは逆台形である。覆土は，一部を除いて底面から硬化した黒色土の単一層である。西端部（A2c6区）と東端部（A3c2区）との比高は3.0mである。A2c7・A2c8区では，残存状態の良い遺構面の北側に，長さ4.20m，幅0.36～0.44mの，A3c2区ではその南側に，長さ2.80m，幅0.40～0.68mの同様の黒色土の硬化面が確認されている。A2c9・A2c0区では，その北側の調査区域外際に長さ（5.80）m，幅（0.40～0.56）mのくぼみが確認されている。このくぼみの西側から，西端部の調査区域外の脇までのA2c7・A2c8区では，底面に確認面よりやや狭い幅の溝が平行に延びている。

主軸方向 N－85°－E

覆土 2層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。黒色土の第2層が路面として使用されたと考えられる。

土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子少量，締まり強
2 黒 色 ローム粒子極微量，締まり極強

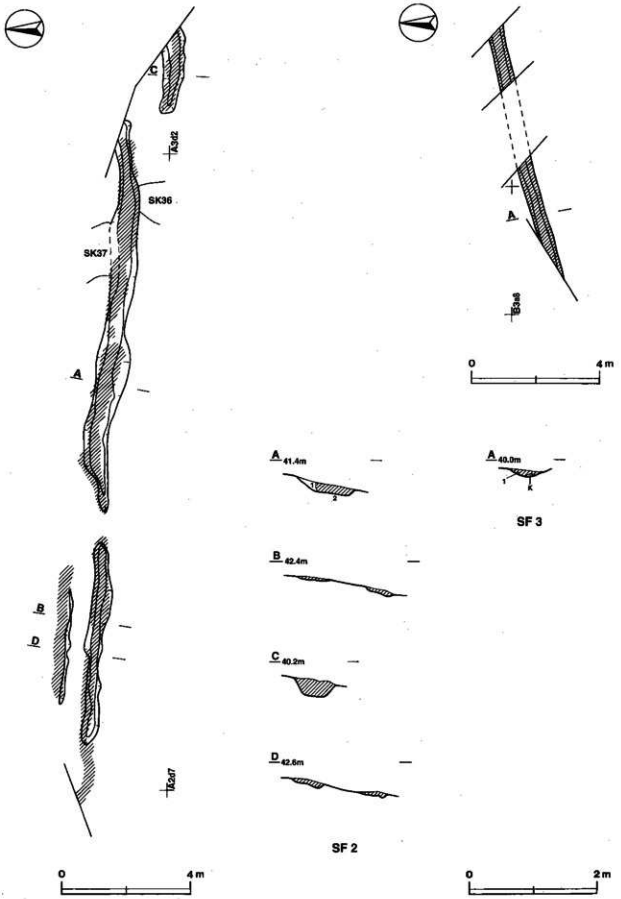
所見 本跡の時期は，遺物が出土していないため不明である。A2c7・A2c8区で確認された2条の溝は，当時通行したであろう荷車等の轍痕の可能性が考えられる。

第3号道路跡（第23図）

位置 調査区域の中央部，B3a8～A3j0区。

規模と形状 中央部東部の調査区域外（B3a8区）から東方向の調査区域外（A3j0区）までほぼ直線的に延びている。調査できた範囲で長さ8.20m，幅0.44～0.50mである。断面形は弧状である。覆土は，底面からの硬化した黒色土の単一層である。西端部（B3a8区）と東端部（A3j0区）との比高は0.78mである。

主軸方向 N－78°－E



第23図　第２・３号道路跡実測図

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。黒褐色土の第１層が路面として使用されたと考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子極微量，締まり極強

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため不明である。

表５　古峯Ａ遺跡道路跡一覧表

道路跡番号	位置	方向	断面	規模			底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
				確認長(m)	上幅(m)	深さ(cm)				
1	A 2 j5～A 3 e4	N-60～65°-W N-0°	弧状	42.5	0.36～1.20	12～36	平坦	自然	土師質土器片，陶器片，磁器片	SK24→本跡
2	A 2 c6～A 3 c2	N-85°-E	弧状，皿合形	21.0	0.20～0.50	6～30	平坦	自然		SK36・37→本跡
3	B 3 a8～A 3 j0	N-78°-E	弧状	8.2	0.44～0.50	18	平坦	自然		

5　石器集中地点

発掘調査当初の遺構確認の際，南部の遺構確認面から石器３点が確認した。そこで，石器の出土している地点を中心として文化層の有無を確認するため，ローム層の掘り下げを行った。その結果，石器集中地点１か所を確認した。以下，その特徴について記載する。

第１号石器集中地点（第24～33図）

位置　調査区域の南部，Ｂ４ｊ8区・Ｂ４ｊ9区・Ｃ４ａ8区・Ｃ４ａ9区・Ｃ４ｂ8区・Ｃ４ｂ9区・Ｃ４ｂ0区・Ｃ４ｃ8区・Ｃ４ｃ9区・Ｃ４ｃ0区。

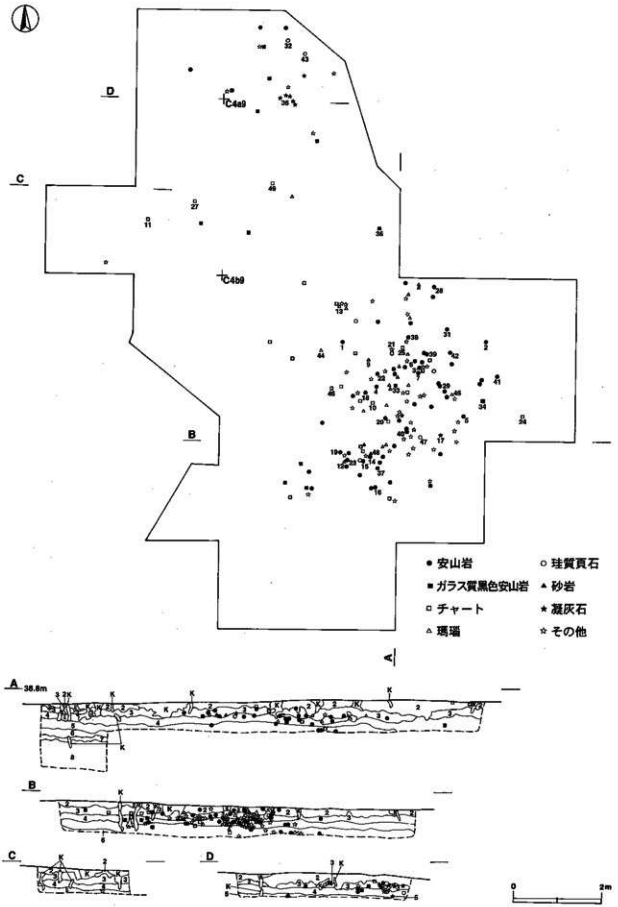
出土状況　南北14m，東西12mの範囲内に存在する。遺物は，中央部から南東部にかけて多く出土しており，標高38.5～37.8mの範囲である。当遺跡の基本層序第２層から第５層に相当する。

遺物　台石１点，凹石１点，敲石４点，磨石２点，石核32点，掻器８点，削器８点，ナイフ形石器３点，台形様石器１点，楔形石器２点，剥片70点，礫62点が出土している。石材は，安山岩，ガラス質黒色安山岩，チャート，瑪瑙，珪質頁岩，砂岩である。

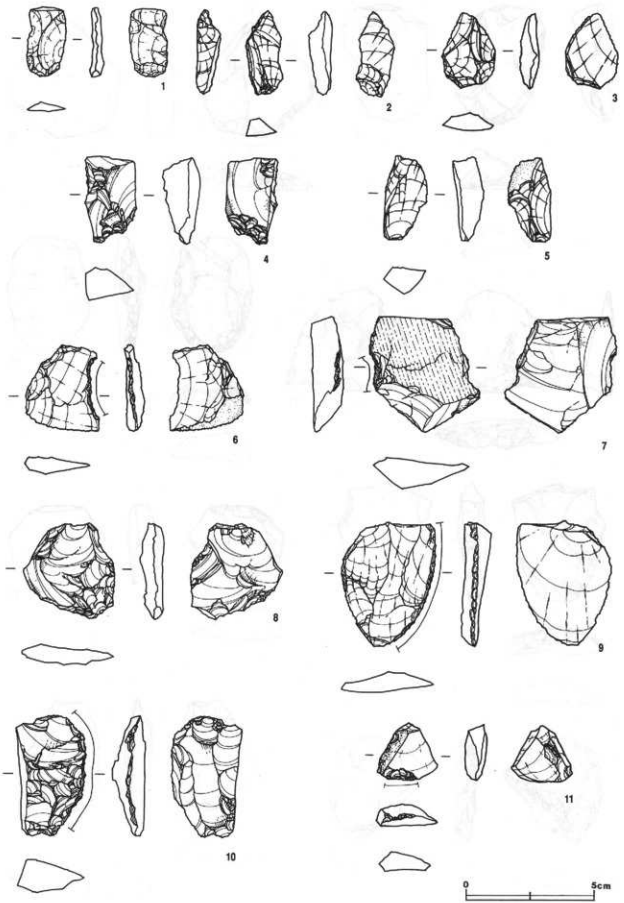
所見　出土遺物として，多量の石核や剥片と，礫塊石器の敲石や台石，磨石等が確認されており，出土層位が姶良Tnテフラ（AT）が含まれる３・４層に集中していることから，旧石器時代の石器製作跡と考えられる。

表６　第１号石器集中地点出土遺物

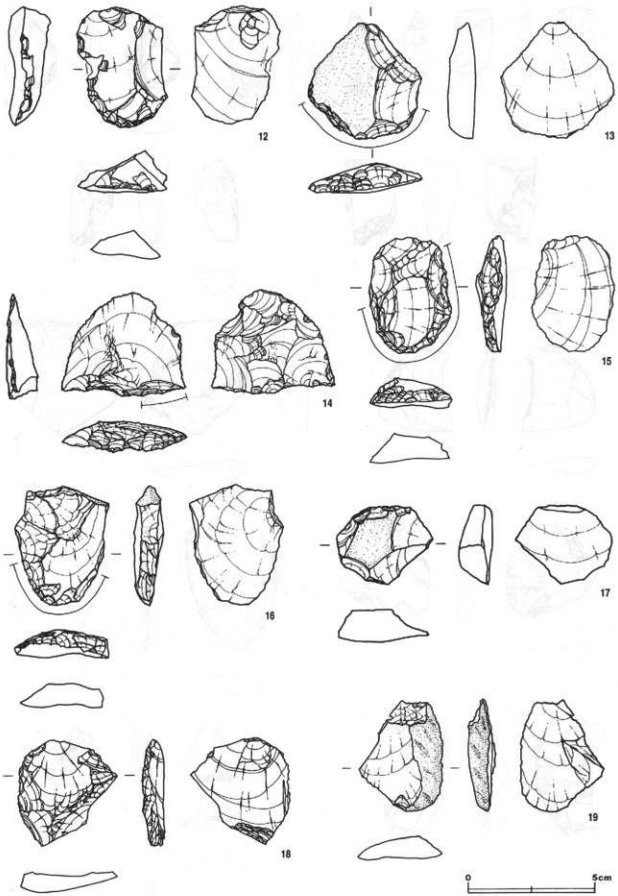
石材＼器種	ナイフ形石器	楔形石器	掻器	削器	剥片	石核	台石	敲石	磨石	合計
安山岩	3		1	1		2				7
ガラス質黒色安山岩		1	2	1	7	6				17
チャート			1	3	2	4				10
瑪瑙					2	3				5
珪質頁岩		1	1		1					3
砂岩							1	4	1	6
凝灰岩			1					1		2
ホルンフェルス					1					1
合計	3	2	6	5	13	15	1	5	1	51



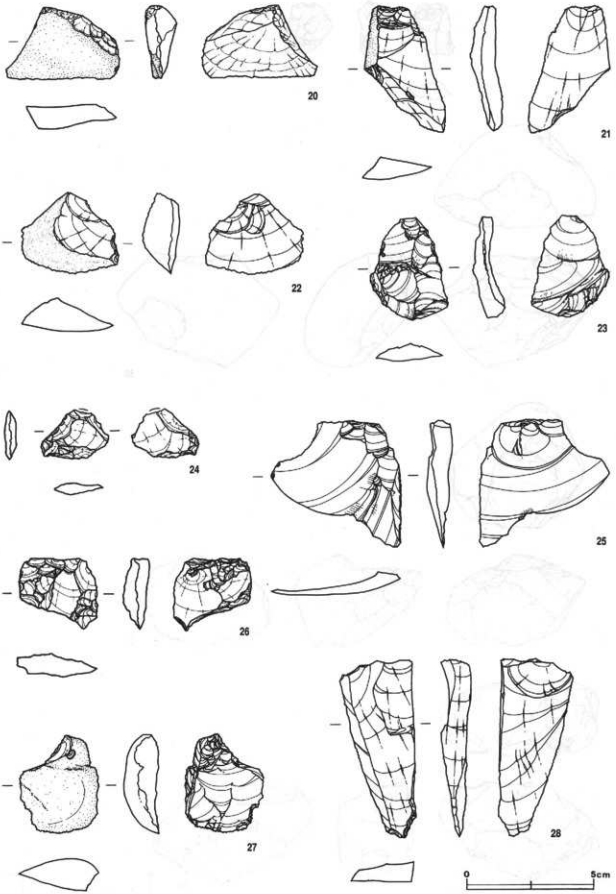
第24図　第１号石器集中地点実測図



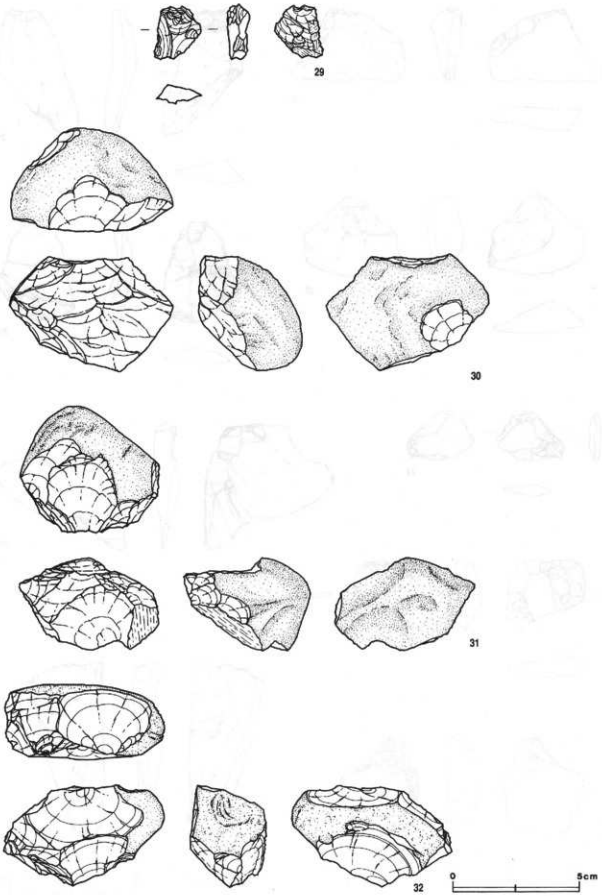
第25図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(1)



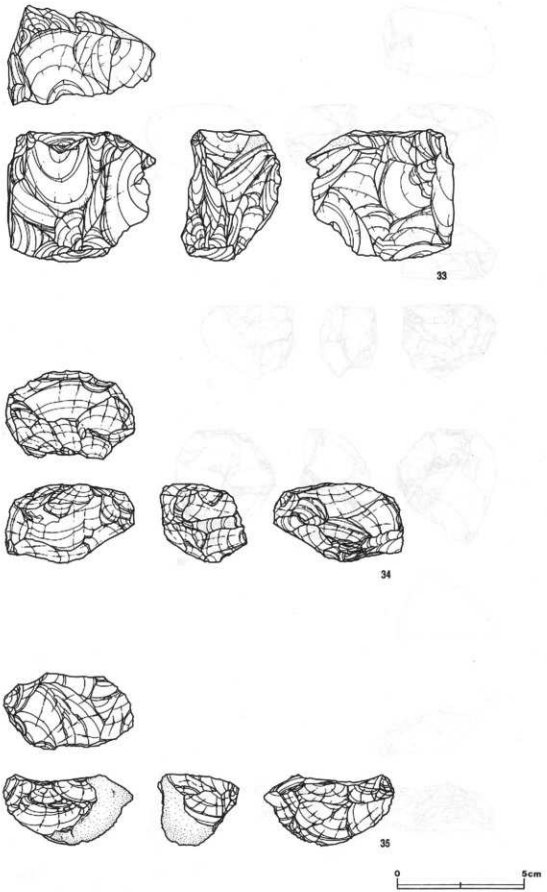
第26図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(2)



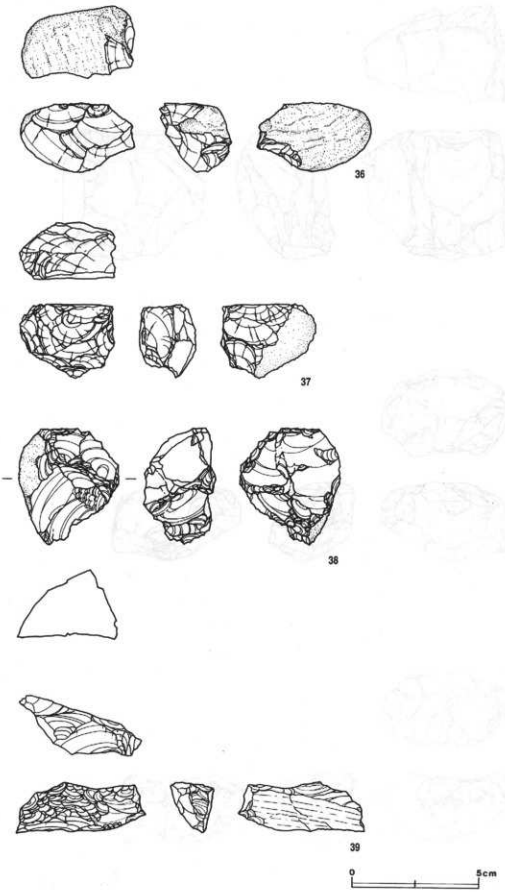
第27図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(3)



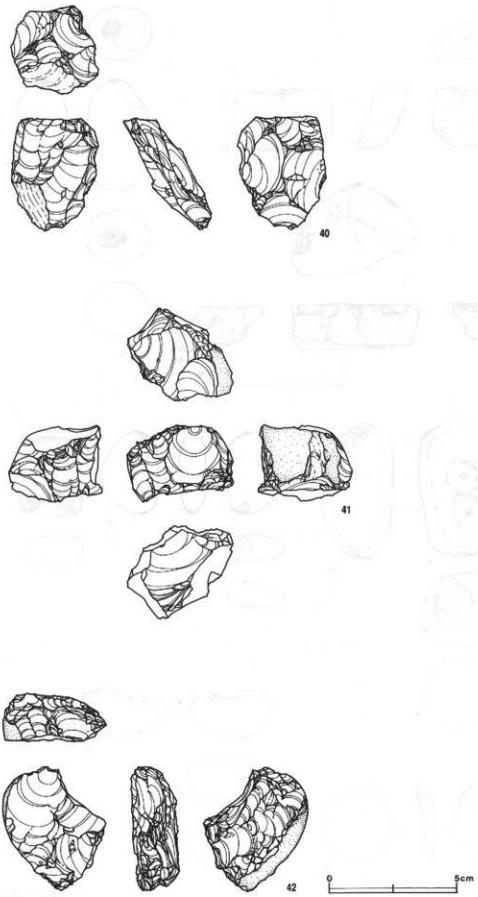
第28図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(4)



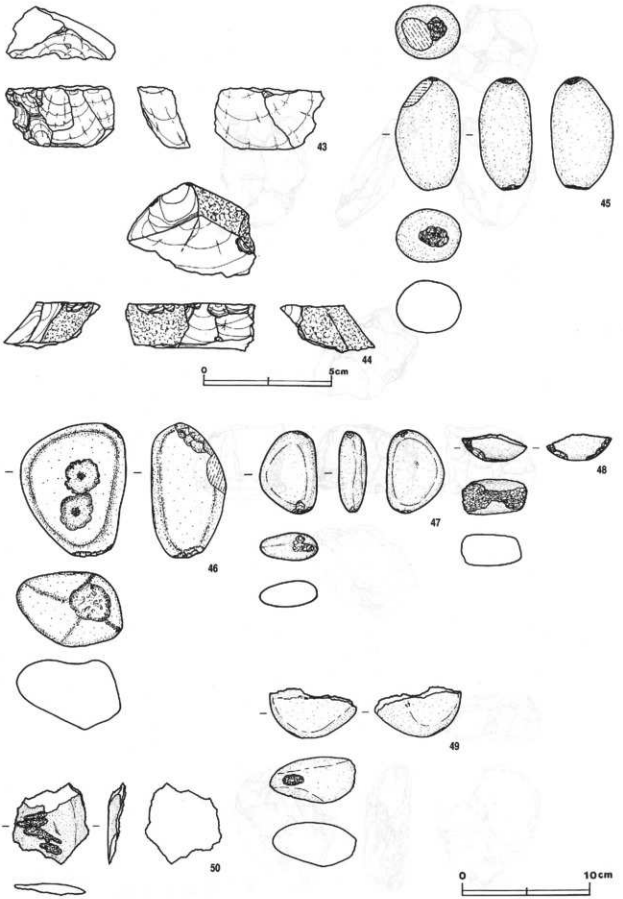
第29図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(5)



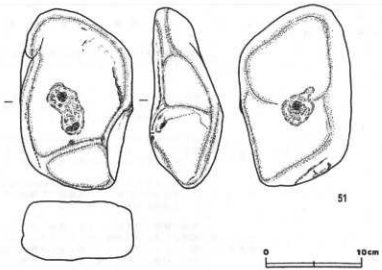
第30図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(6)



第31図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(7)



第32図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(8)



第33図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(9)

第１号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材	剥離と調整の特徴	備　考
第25図 1	ナイフ形石器	2.8	1.5	0.5	2.1	ガラス質黒色安山岩	縦長の剥片を素材としている。打面は複剥離面で，主要剥離面側へやや湾曲している。左側縁下部に剥離痕が認められるが，意図的なものかどうかは不明である。	Q38 PL27 5層
2	ナイフ形石器	3.4	1.5	0.9	3.5	ガラス質黒色安山岩	縦長剥片を素材とし，左側縁上部にブランティングを施している。礫面に覆われる打面を基部側に残置し，右側縁が刃部になるものである。	Q39 PL27 5層
3	ナイフ形石器	3.0	2.1	0.8	4.4	ガラス質黒色安山岩	安山縦長の剥片を素材としている。打面部を折損している。	Q40 PL27 3層
4	楔形石器	3.4	2.1	1.5	8.7	珪質頁岩	分厚い剥片を素材とし，打面部の主要剥離面側及び末端部の背面・主要剥離面に，剥離が認められる。	Q47 PL27 3層
5	楔形石器	3.4	1.7	1.3	6.0	ガラス質黒色安山岩	剥片を素材としている。上部から１回，下部から１回の剥離が認められる。上部には礫面を残している。	Q48 PL27 3層
6	削　器	3.4	2.9	0.8	6.0	ガラス質黒色安山岩	横長剥片を素材としている。素材剥片は，表面に礫面を残している。打面方向が折損しており，その折れ面にノッチ状に刃部が作出されている。	Q22 PL27 3層
7	削　器	4.6	4.4	1.3	22.5	チャート	左側縁上半部に，ノッチ状の刃部が作出されている。背面は節理面に広く覆われている。主要剥離面側に認められる横方向の剥離面は，節理面と考えられる。刃角は62度である。	Q26 PL27 K
8	削　器	3.8	3.6	1.0	10.7	チャート	背面の剥離面は主要剥離面と同方向で，右側縁下半部には逆方向の細かな剥離も認められる。主要剥離面には，異なる方向の剥離面も観察される。	Q25 PL27 K
9	削　器	4.9	3.7	1.2	15.5	安山岩	幅広の剥片を素材として，右側縁全体にわたって刃部が作出されている。左側縁上半部にも剥離が認められ，刃部が作出されている。素材剥片の打面は単剥離面で，背面には主要剥離面と同方向の剥離面が認められる。	Q41 PL27 2層
10	削　器	4.8	2.8	1.3	15.8	チャート	もとは厚さの薄くなった縦長剥片石核であったことが推定される。その後右側縁に，連続する剥離を加えて刃部を作出している。左側面は節理面であるが，これを打面として，左側縁下部の表面側にも加工が施されている。	Q49 PL27 3層
11	掻　器	2.2	2.4	0.8	3.6	珪質頁岩	三角形の剥片を素材として，主要剥離面の末端部に刃部を作出している。刃角は60度である。素材の剥片は打面部を欠損し，主要剥離面の左側縁に礫面を残している。	Q43 PL27 3層
第26図 12	掻　器	4.7	3.5	1.6	20.0	凝灰岩	縦長剥片を素材として，末端部に弧状の刃部を作出している。末端の刃角は70度である。刃部は，左側縁部では中程まで作出されている。左側縁中央のくぼみは，調査時の欠損であると考えられる。刃部は使痕が摩滅しており，使用の痕跡がうかがわれる。	Q17 PL27 3層

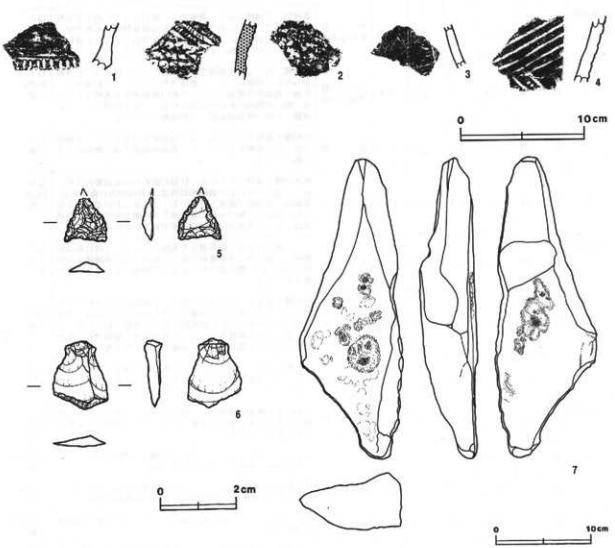
図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	剥離と調整の特徴	備考
第26図 13	掻器	4.6	4.5	1.1	24.0	ガラス質黒色安山岩	横長剥片を素材として，末端部に弧状の刃部が作出されている。末端の刃角は，90度前後でかなり急角度な刃部である。	Q19 PL27 3層
14	掻器	4.1	4.9	1.3	17.9	チャート	幅広の剥片を素材として，背面側から打面部を除去するかたちで，刃部を作出している。刃角は約50度である。末端部には，微細な剥離が散見に認められる。	Q24 PL27 2層
15	掻器	4.6	3.2	1.2	17.6	ガラス質黒色安山岩	横長剥片を素材として，素材剥片の打面部及び右側縁から末端部にかけて，弧状の刃部が作出されている。末端の刃角は，60度前後であり，やや浅い角度の刃部である。	Q18 PL27 3層
16	掻器	4.7	3.7	1.2	18.0	安山岩	横長剥片を素材として，その末端に弧状の刃部を作出している。素材剥片の打面は，単剥離面で左側縁は礫面を残している。末端部の刃角は，68度である。	Q23 PL27 4層
17	剥片	3.1	3.8	1.4	15.5	ガラス質黒色安山岩	背面に礫面を残す剥片である。背面に認められる剥離面は，周囲から求心状に剥離されたものと考えられる。打面部は欠損しており，折面付近に小形の先行剥離面が認められることから，打面はそれほど遠くはないものと考えられる。	Q14 PL27 3層
18	剥片	3.6	4.2	1.0	12.6	ガラス質黒色安山岩	背面には，周囲から求心状の剥離が施されており，左右両側縁には，背面を打面とする剥離面が認められる。これらの特徴から，打面再生剥片の可能性が高い。	Q16 PL27 3層
19	剥片	4.4	3.3	1.1	11.0	ガラス質黒色安山岩	背面には礫面を残し，また主要剥離面と同方向の剥離面をもつ。打面は折損している。	Q20 PL27 3層
第27図 20	剥片	2.9	4.5	1.3	11.1	ホルンフェルス	横長剥片で，左半部を折損している。打面は単剥離面である。背面は礫面に広く覆われている。打面部付近に，小形のほぼ同じ大きさの剥離が連続して認められるが，これらは先行剥離であると考えられる。	Q21 PL27 3層
21	剥片	5.0	3.2	1.3	11.6	ガラス質黒色安山岩	縦長の剥片である。打面は単剥離面で，背面には主要剥離面と同方向の剥離面と礫面を残す。また，背面下半部には，主要剥離面とは反対方向の剥離面も観察される。	Q28 PL27 3層
22	剥片	3.2	3.8	1.5	14.2	ガラス質黒色安山岩	横長の剥片である。背面には大きく礫面を残し，主要剥離面と同方向の横長の小形の剥離が認められる。打面は単剥離面である。	Q29 4層
23	剥片	4.1	3.1	1.3	8.2	チャート	縦長の剥片である。節理面を打面としている。末端部は，石状の背面を取り込んで分岐くなっている。背面は，主要剥離面とは逆方向の剥離面も認められる。剥離された石核が，両設の打面を有していたことが理解される。	Q30 PL27 3層
24	剥片	1.9	2.7	0.4	2.2	ガラス質黒色安山岩	微細な剥離痕を有する剥片。左側縁の末端部付近に，微細な剥離が不連続に認められる。打面部は折損している。	Q42 PL27 5層
25	剥片	5.0	5.1	1.1	11.7	珪質頁岩	打面は，複剥離面で調整打面である。背面には，主要剥離面と同方向の剥離面が認められる。	Q32 PL28 3層
26	剥片	2.8	3.1	1.0	7.0	瑪瑙	横長剥片である。打面は単剥離面であり，背面には，主要剥離面と同方向の，小形の剥片が剥離された痕跡が認められる。左側縁には礫面が残存している。主要剥離面に認められる小剥離は，調整時に生じたものであり，二次加工ではない。末端部は，背面からの力で折損している。	Q45 PL28 4層
27	剥片	3.9	3.1	1.4	15.4	瑪瑙	背面は広く礫面におおわれている。打面は礫面である。主要剥離面側へ湾曲しており，石核は小形の円礫であったと考えられる。	Q44 PL28 4層
28	剥片	7.0	3.0	1.2	18.7	ガラス質黒色安山岩	縦長の剥片である。打面は広い単剥離面であり，打面部付近が最大幅となり先細りしている。断面形態は，台形をなしている。背面に認められる剥離面は，すべて主要剥離面と同方向である。	Q31 PL28 3層
第28図 29	剥片	2.1	1.9	0.9	2.8	チャート	図面では，打面側が下におかれている。打面部は節理によって折損している。背面には，主要剥離面とは異なる方向からの剥離が認められる。	Q46 3層
30	石核	4.5	6.4	4.1	100.7	安山岩	半割礫を素材とする。2回の剥離によって作出された打面から，4枚の横長の剥片と2枚の小形の剥片が剥離されている。他に，左側面の底部付近に，1回の剥離によって作出された打面から，2枚の横長剥片が剥離されている。	Q1 PL28 3層
31	石核	3.7	5.5	5.0	81.2	ガラス質黒色安山岩	素材は背面に礫面を残す。分厚いしの字状剥片の末端部で，その主要剥離面から3枚の剥片が剥離されている。打面には，作業剥側から長狭な剥離が施されている他は，調整は施されていない。	Q2 PL28 4層

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	剥離と調整の特徴	備考
第28図 32	石核	4.0	6.3	3.0	81.1	ガラス質黒色安山岩	小形の礫を素材としている。まず底面を打面として，正面図下半部に剥離が行われている。その後，打面を90度転位して，作業面打面，底面に認められる広い剥離が施されている。	Q 3 PL28 3 層
第29図 33	石核	5.1	4.0	5.8	121.8	チャート	はじめに右側面に認められる広い剥離が行われ，その後，前後関係は不明だが，裏面と表面の右半部に認められる剥離が行われている。次に，表面下半部に認められる剥離が行われて，最後に左側面から横長の剥離が行われている。	Q 4 3 層
34	石核	3.1	5.1	3.5	55.2	安山岩	小形礫を素材としている。90度打面転位を繰り返した石核である。はじめに，裏面に認められる剥離が行われ，その後，裏面を打面として右側面に認められる剥離が行われている。次に，打面を正面に転位させ打面部に認められる剥離が行われ，最後に，その面を打面として正面図に認められる剥離が行われている。	Q 5 PL28 2 層
35	石核	2.8	5.1	3.2	44.1	ガラス質黒色安山岩	小形礫，もしくは半割礫を素材としている。打面部は，3方向からの広い剥離によって形成されている。その打面から裏面，右側面及び正面を作業面として，寸詰まりの小形の剥片が剥離されている。右側面から底面にかけて，礫面が残されている。	Q 6 PL28 3 層
第30図 36	石核	3.1	4.5	2.4	34.9	ガラス質黒色安山岩	素材は，半割礫である。礫面から，横長の小形の剥片が2枚剥離されている。この2回の剥離とは前後関係は不明だが，右側面を打面として，3回の剥離が施されている。右側面の打面は，2回の剥離によって作出されている。	Q 7 4 層
37	石核	2.9	3.7	2.2	29.8	ガラス質黒色安山岩	小形礫，もしくは半割礫を素材としている。打面は，右方向からの広い剥離面によって形成されている。この打面から，正面と裏面を作業面として，小形の横長剥片が剥離されている。他に右側面に折面が認められる。これを打面として，正面側に小形の横長剥片が，2枚剥離されている。	Q 8 PL28 3 層
38	石核	4.9	4.2	4.2	45.2	瑪瑙	小形礫を素材としている。主に右側面を打面として，正面図に見られる剥離を行っている。裏面や底面には，礫面を大きく残している。	Q 9 3 層
39	石核	2.0	5.1	1.7	12.4	チャート	板状の礫を素材としている。打面に認められる剥離のうち，右下に認められる広い剥離面以外は，素材時の古い面である。裏面は，節理面で構成されている。作業面においては，左から右に向かって順に小形の横長剥片が剥離されている。右側面は，主に下方向から微細な剥離が施されている。	Q10 PL28 3 層
第31図 40	石核	4.5	3.4	3.5	26.1	チャート	上下の両設打面から縦長剥片を剥離している。上設打面は節理面，下設打面は半割離面である。裏面には，両側縁から中央に向かって剥離が施され，正面の右側縁にも小さな剥離が施されている。	Q11 PL28 K
41	石核	3.0	4.2	3.7	40.0	瑪瑙	小形礫を素材としている。打面は上下両面に設定されているが，主に上設打面からの剥離されたものと考えられる。上設打面は2方向からの広い剥離面によって作出されている。正面に認められる剥離面からは，石核の高さに規制されて小形であるが，やや縦長の剥片が剥離されたものと考えられる。	Q12 PL28 3 層
42	石核	4.9	4.1	1.9	35.0	瑪瑙	小形礫を素材としている。主に右側面を打面として，正面図に見られる剥離を行っている。裏面や底面には，礫面を大きく残している。	Q13 4 層
第32図 43	石核	2.5	4.3	2.1	15.0	ガラス質黒色安山岩	打面は半割離面で構成され，極めて分厚く三角形をなし，背面には小形の縦長剥片が剥離されている。左側縁に，3枚の小形の剥離が認められる。	Q15 PL28 3 層
44	石核	1.9	5.1	3.8	29.1	チャート	分厚い直方体を素材とし，打面は半割離面で構成されている。正面左側縁と裏面に，礫面を大きく残す。	Q27 PL28 2 層
45	敲石	8.9	4.9	4.2	261.1	砂岩	楕円礫を素材としている。上下両端部に敲痕が認められる。上端部の敲痕には衝撃による剥離のためか，節理面が現れている。	Q36 PL28 4 層
46	敲石	10.6	8.2	5.9	625.0	砂岩	表面に深く2か所の敲打痕が認められる。上下両端にも敲痕が認められる。	Q51 PL28 3 層
47	敲石	6.5	5.5	2.2	88.7	砂岩	上下両端に敲痕が認められる。下端部においては，衝撃に起因すると思われる小剥離も認められる。全面にわたって赤化しており，被熱していると考えられる。	Q34 PL28 4 層
48	敲石	5.1	2.1	2.8	31.9	砂岩	残存している縁辺には，すべての範囲にわたって敲痕が認められる。とりわけ右側縁部が顕著であり，この敲石の主な機能部であった可能性が高い。被熱しており，表裏の礫面及び断面が赤化しているが，敲痕部分は赤化していないことから，これら敲痕は，礫が破損し被熱した後に形成された可能性が高い。	Q33 4 層
49	敲石	6.7	4.2	3.6	99.1	凝灰岩	下半部を欠損している。上端部にわずかに敲痕が認められる。全面にわたって赤化しており，被熱していると考えられる。	Q35 2 層

図版番号	種別	計測値				石材	剥離と調整の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第32図 50	磨石	6.4	5.9	1.3	29.7	砂岩	表面に深く溝状に4列にわたって敲打痕が認められる。衝撃で剥離された剥片であるが，右側縁上半部に認められるつぶれ痕と併せて考えると，敲石の一部の可能性が高い。	Q37 3層
第33図 51	台石	18.7	11.6	7.5	2086.1	砂岩	表面と背面の両方に，深く2か所の敲打痕が認められる。両面を作業面として使用した台石である。	Q50 PL28 3層

6　遺構外出土遺物

今回の調査で，遺構に伴わない縄文時代から中世までの土器や石器が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。(第34図)



第34図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第34図 1	深鉢 縄文土器	厚さ 1.4	胴部片。隆帯が巡り，その上に半截竹管状工具による刺突文が施されている。	TP 4 表土中
2	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	胴部片。羽節縄文が施されている。	TP 5 表土中
3	壺 弥生土器	厚さ 0.7	頸部片。櫛歯状工具（6本）による横区画が施されている。	TP 6 表土中
4	壺 弥生土器	厚さ 0.9	胴部片。附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。羽状構成である。	TP 7 表土中

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
第34図 5	石鏃	(1.7)	1.7	0.4	(1.0)	チャート	Q54 表土中 PL34
6	掻器	2.7	2.1	0.7	2.2	頁岩	Q55 表土中
7	凹石	31.1	10.6	5.9	1681.6	砂岩	Q53 根切り撹乱土中

第4節 まとめ

今回の調査で古峯A遺跡から確認された遺構は，竪穴住居跡3軒（平安時代），土坑57基（時期不明），溝跡8条（中世4条，時期不明4条），道路跡3条（中世1条，時期不明2条），石器集中地点1か所（旧石器時代）である。ここでは，旧石器時代，平安時代，中世の各時期別に遺構と遺物について述べ，まとめとしたい。

1 旧石器時代

この時代の遺構としては，石器集中地点1か所を確認している。石器類177点が出土し，当遺跡の中心をなす遺構である。

第1号石器集中地点は，調査区域の南部，丘陵の南東に傾斜する陵線の中でも，傾斜が緩やかになり，台地状になった部分に立地する。標高は約39mである。出土した石器の石材と石器集中地点との関係について簡単に述べることとする。

出土した石器類を石材で分類すると，安山岩が36点で全体の27.5%を占める。次にチャート，瑪瑙，頁岩，砂岩，凝灰岩の順である。器種別では，剥片が66点で全体の37.3%を占める。次に石核，掻器，敲石，削器，ナイフ形石器，楔形石器，台石，磨石の順である。(点数で最大なものは礫であり，67点確認されている。)

出土層位では，3層87点で50%を占め，順に4層の44点，2層の30点，5層の13点である。

出土点数の多い石核と剥片の，石材別と出土地点の層位別の割合は次の通りである。石核は，安山岩が39.1%，チャートが34.8%，瑪瑙は26.1%であり，2層から9.1%，3層から59.1%，4層から31.8%の割合で出土している。剥片は，安山岩が65.1%，チャートが13.6%，瑪瑙が15.2%，頁岩が6.1%であり，2層から15.4%，3層から1.7%，4層から27.7%，5層から9.2%の割合で出土している。石核・剥片とも，石材として安山岩を多用している。出土層位は，3層からが最も多い。

このように出土した石器類の主体が剥片及び石核であることから，本跡が石器製作跡である可能性が考えられる。本跡の時期については，石器類が3層，すなわちATを含む下総VI層に集中することから，約22,000年前と考えられる。

2　平安時代

この時代の遺構としては，竪穴住居跡３軒を確認している。第１～３号住居跡は，いずれも調査区域の南部で確認されている。道路工事幅を調査区域としているため，集落跡の全体像が確認されたわけではないので，各住居跡の特徴と出土遺物にふれることにより，この時代のまとめとする。

平面形は，第１・２号住居跡は隅丸長方形を呈している。規模は，第２号住居跡の方がやや大きいものの，長軸3.54m と3.72m，短軸3.00m と3.30m であり，ほぼ同規模の遺構である。第３号住居跡は撹乱や土坑との重複により，北部と竈を含む東壁中央部が残存せず，正確な平面形と規模は不明である。柱穴の位置や残存している壁から推定すると，長軸［2.29］m，短軸2.14m の不整方形と考えられる。壁高は，第２号住居跡が59cmであるが，第１号住居跡は20cm，第３号住居跡に至っては11cmと低く，３軒とも異なる。柱穴については，３軒とも様相を異にする。第１号住居跡は，東部の両コーナー部寄りの床面に柱穴が確認されている。第２号住居跡は，北・南壁の外側に柱穴が確認されている。第３号住居跡は，４か所の各コーナー部側に柱穴が確認されている。出入口施設に伴うピットについては，第１・２号住居跡とも南壁中央部寄りに位置するが，第３号住居跡からは確認されていない。貯蔵穴は，第２号住居跡の北東・南東・南西の各コーナー部に付設されている。第１・３号住居跡には付設されていない。竈は，各住居跡で確認されている。しかし，第１・３号住居跡の竈の遺存状態は悪く，特に第３号住居跡は火床面のみの確認となっている。竈の位置は，第１号住居跡と第２号住居跡の第１竈が北壁に構築されている。西壁に構築されているのが，第２号住居跡の第２竈である。東壁に構築されていたと考えられるのが，第３号住居跡である。

出土遺物は，土師器（坏・高台付坏・高台付皿・椀・鉢・甕），須恵器（高台付坏・盤・甕），平瓦，砥石，鉄製品（紡錘車・鎌・刀子）などである。土師器の坏・高台付坏・高台付皿・椀・鉢は，いずれも体部内面に磨きが施され黒色処理がなされており，胎土に白色針状物質が含まれている。第１号住居跡出土の土師器坏・高台付坏と，第２号住居跡出土の土師器高台付皿（２点）には外面に墨書が確認されている。第１号住居跡の坏には，体部に「〒」と底部に「丨」（いずれも破損のため一部のみの残存），高台付坏には，「□山」（口縁部から底部への縦方向。「山」の上部は破損。）と記されている。第２号住居跡の高台付皿２点は，いずれも体部外面（ロクロナデと同じ横方向）に記されている。１点は「雄轉家」，別の１点は「西山」と確認されている。この２点の墨書は，当時の人名・姓名ではなく地名であると考えられる。第１号住居跡出土の高台付坏の「□山」と，第２号住居跡出土の高台付皿の「西山」には，墨書された方向に差異はあるものの，同様な字体で「山」が記されている点は興味深い。

3　中　　世

この時代の遺構として，溝跡４条，道路跡１条を確認している。溝跡は第２・６・７・８号溝跡であり，道路跡は第１号道路跡が該当する。第２号溝跡と第１号道路跡は調査区域の北部に，第６号溝跡は中央部に，第７・８号溝跡は南部に位置する。第６号溝跡と第１号道路跡は，東西の端部が調査区域外に延びており，第２号溝跡は，東端部が調査区域外に延びている。第６号溝跡は東端部で，第７号溝跡は北端部で後世の根切り溝との重複により，その延長部が残存していない。各遺構の延長方向を俯瞰して見ると，調査区域を北東方向に横断するかたちでのびているのが，第８号溝跡（N－30～40°－E）と第１号道路跡（N－50～65°－E）である。南東方向に下降して延びているのが，第２号溝跡（N－95～130°－E）と第６号溝跡（N－80°－E），北西方向に下降して延びているのが，第７号溝跡（N－15°－W）である。

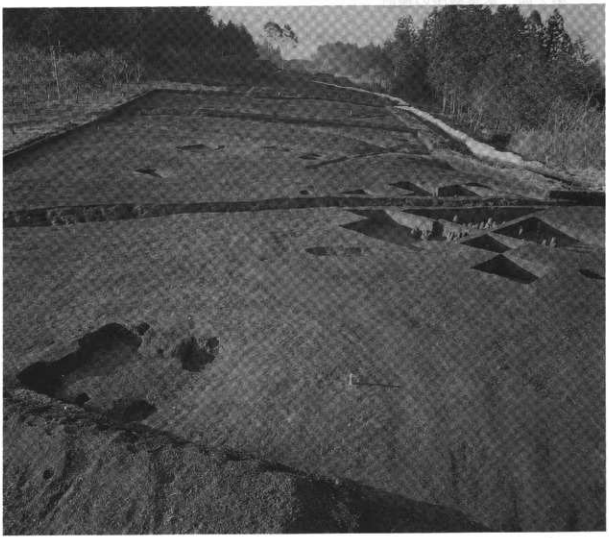
溝跡の規模は，上幅が0.56～0.90m，深さ10～18cmの第２・７号溝跡に対して，上幅0.80～2.12m，深さ20～

86cmの第6・8号溝跡が格段に大きい。壁面の立ち上がり及び断面形は，第8号溝跡の外傾・V字状を除き，第2・6・7号溝跡は緩傾・弧状である。また，第8号溝跡は，底面や壁面に多数のピットを伴っているが，他の溝跡からは確認されていない。ピットの性格については不明である。

当遺跡は，北部で坂ノ上塚群と隣接している。その北西方向の谷を挟んだ丘陵南斜面には，東平遺跡が所在している。また，南部では古峯B遺跡と隣接している。東平遺跡からは平安時代の住居跡が37軒確認されている。古峯B遺跡からは，旧石器時代の石器集中地点が2か所確認されている。これら周辺遺跡との関係が，今後検討されるべき課題である。

参考文献

旧石器時代研究班　「茨城県中央部におけるローム層の層序区分について」『研究ノート』7号
茨城県教育財団　1998年6月



第4章　古峯B遺跡

第1節　遺跡の概要

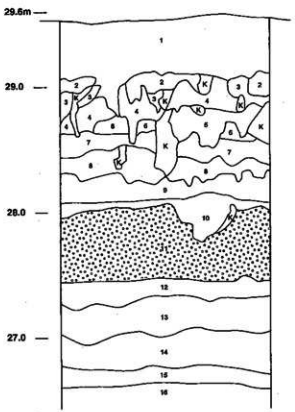
古峯B遺跡は，友部町の北西部，涸沼川右岸の標高28～29mほどの台地上に立地している。調査区域は，幅約33m，長さ約27m，面積3,099㎡であり，現況は畑地・雑種地である。

今回の調査によって，住居跡7軒（縄文時代1軒，古墳時代5軒，平安時代1軒），掘立柱建物跡6棟（平安時代1棟，中世4棟，時期不明1棟），柵列1か所（中世），地下式壙2基（中世），土坑209基（中世79基，時期不明130基），溝跡5条（古墳時代1条，中世4条），道路跡1条（中世），石器集中地点2か所（時期不明2か所），ピット群1か所（時期不明），不明遺構2基（中世）を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に24箱出土した。縄文時代の住居跡からは縄文土器・石器，古墳時代の住居跡からは土師器・須恵器・土製品・金属製品，平安時代の住居跡からは須恵器，中世の溝からは土師質土器が出土している。遺構外からは，土師器・土師質土器・陶器・石器が出土している。

第2節　基本層序の検討

調査区域の東部（B3 j1区）にテストピットを掘り，基本土層の観察を行った。（第35図）



第35図　基本土層図

第1層は，46～74cmの厚さの耕作土層で，黒褐色をしている。黒色粒子を極多量，ローム粒子を微量，赤褐色パミス粒子を極微量含んでいる。赤褐色パミス粒子は，今市軽石層に由来すると考えられる。

第2層は，4～24cmの厚さで，大きくは1層に含まれる層で，黒色をしている。黒色粒子を極多量，ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含んでいる。

第3層は，14～26cmの厚さのロームへの漸移層で，黒褐色をしている。黒色粒子を極多量，ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含んでいる。

第4層は，4～14cmの厚さで，オリーブ褐色をしたソフトローム層である。ローム粒子を主とし，ローム小ブロックを微量含んでいる。

第5層は，8～32cmの厚さで，黄褐色をしたソフトローム層である。ローム粒子を主とし，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを微量含んでいる。

第6層は，6～14cmの厚さで，明黄褐色をしたハードローム最上層である。締まりは極めて強い。火山ガラス粒子を極微量含んでいる。この火山ガラス粒子はATに由来すると考えられ，下総Ⅵ層に対比できる。

第7層は，6～32cmの厚さで，黄褐色をしたハードローム層である。締まりは極めて強い。第二黒色帯上部で，下総Ⅶ層に対比できる。

第8層は，4～30cmの厚さで，褐色をしたハードローム層である。ロームのソフト化が進んでいる。ローム大ブロックとローム中ブロックを主とし，ローム小ブロックとローム粒子を少量含んでおり，締まりは強い。第二黒色帯下部で，下総Ⅸ層に対比できる。

第9層は，8～26cmの厚さで，褐色をしたハードローム層である。粘性は強く，締まりは極めて強い。第二黒色帯で，下総Ⅸ層に対比できる。8層との境界には黒色スコリアが面状に存在する。

第10層は，6～38cmの厚さで，黄褐色をしたハードローム層である。KP小ブロックを中量，KP粒子を少量，KP大・中ブロックを微量含んでいる。粘性は強く，締まりは極めて強い。この層までが立川ローム層に当たると考えられる。

第11層は，30～60cmの厚さで，上部が黄色，下部が明黄褐色をした鹿沼パミスの純粋層である。粘性は極めて弱く，締まりは極めて強い。この層以下が武蔵野ローム層に当たると考えられる。

第12層は，12～22cmの厚さで，褐色をしたハードローム層である。白色スコリア粒子・黒色スコリア粒子・礫を極微量含んでいる。粘性は強く，締まりは極めて強い。

第13層は，22～32cmの厚さで，黄褐色をしたハードローム層である。白色スコリア粒子・礫を極微量含んでいる。粘性は強く，締まりは極めて強い。

第14層は，20～38cmの厚さで，にぶい黄褐色をしたハードローム層である。粘性は強く，締まりは極めて強い。

第15層は，10～18cmの厚さで，黄褐色をしたハードローム層である。粘性は強く，締まりは極めて強い。

第16層は，にぶい黄色をしたハードローム層である。粘性・締まりとも極めて強い。

住居跡などの遺構は，第2層上面で確認した。

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査で，縄文時代の竪穴住居跡1軒（第1号住居跡），古墳時代の竪穴住居跡6軒（第2～6号住居跡），平安時代の竪穴住居跡1軒（第7号住居跡）を確認した。以下，遺構番号順にそれぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記載する。

第1号住居跡（第36～38図）

位置　調査区域の南部，B2h0区。

重複関係　第10号土坑に南東部を掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形　径（4.50）mで円形である。

壁　壁高は64～72cmで，外傾して立ち上がる。西部は攪乱のため確認できない。確認面から22～24cmの深さに，幅20～40cmの平坦な面が巡り，上段・下段の二段掘り込み状を呈している。

床　ほぼ平坦である。

ピット　3か所（P1～P3）。各ピットとも中央部に位置し，P1は，長径20cm，短径18cmの楕円形で，深さ36cmであり，規模と位置から主柱穴と考えられる。P3は径16cmの円形で深さ6cm，P2は長径30cm，短径24cmの楕円形で，深さ6cmである。いずれも性格は不明である。

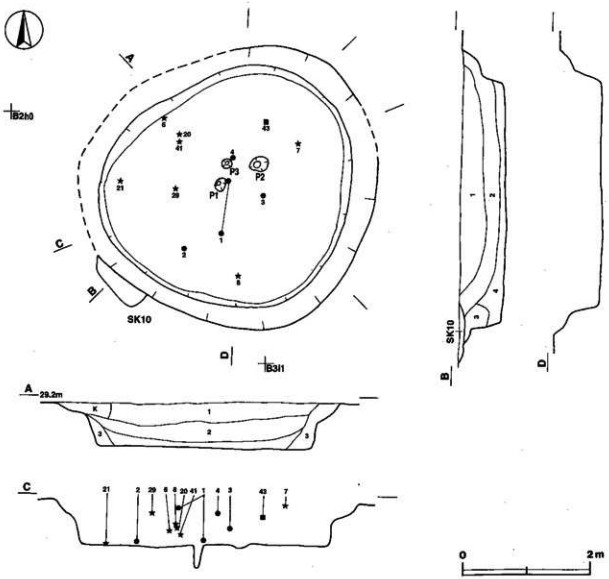
覆土　4層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

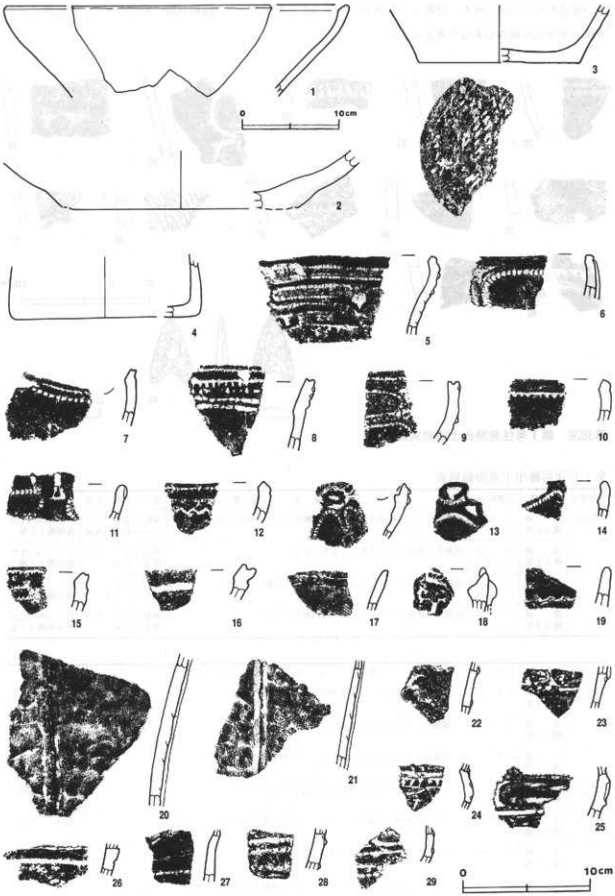
1	黒　褐　色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量	3	黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2	黒　　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量	4	極暗褐色　ローム小ブロック・粒子極微量

遺物　縄文土器片149点，石器（石鏃）1点が出土している。縄文土器片は，中央部の覆土中層から多く出土し，特にP1の南側に集中している。第37図1の縄文土器深鉢は，南部の覆土上層から出土している。2の縄文土器浅鉢は，南部の覆土下層から出土している。3の縄文土器深鉢は，中央部の覆土中層から出土している。4の縄文土器深鉢は，中央部の覆土上層から出土している。43の石鏃は，P2の北側の覆土中層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。円形の平面形，柱穴が1か所で炉を持た

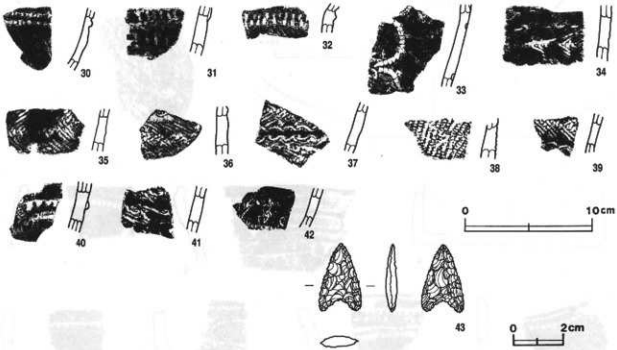


第36図　第1号住居跡実測図



第37図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)

ない構造をしている。壁が二段掘り込み状を呈していることから，この時期以降に確認されている有段式竪穴遺構の祖型の可能性があると考えられる。



第38図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	深鉢 縄文土器	A [35.2] B (9.5)	口縁部片。口唇部は内反りで内面に稜をもち，平坦面を有する。	砂粒・石英・スコリア にぶい褐色・普通	P 1 15% PL29 南部覆土上層
2	浅鉢 縄文土器	B (4.6) C [18.4]	底部片。胴部はやや内彎して立ち上がる。	砂粒・石英・スコリア 黒色・普通	P 2 5% PL29 南部覆土下層
3	深鉢 縄文土器	B (4.7) C [12.6]	底部片。胴部は外傾して立ち上がる。底部に網代痕を残す。	砂粒・石英 黒褐色・普通	P 3 5% PL29 中央部覆土中層
4	深鉢 縄文土器	B (4.9) C [14.6]	底部片。底部からの立ち上がりは内傾している。	砂粒・石英・雲母 褐色・普通	P 4 5% PL29 中央部覆土上層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第37図 5	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。隆帯に沿って，角押文が施されている。	TP 3 PL33
6	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。X字状の隆帯に沿って角押文が施されている。	TP 5 PL33
7	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。角押文が施されている。口唇部端部に刻みが施されている。	TP30 PL33
8	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	口縁部片。交互刺突文と角押文が施されている。	TP 4 PL33
9	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。角押文が施されている。口唇部に刻みが施されている。	TP 6 PL33
10	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。口唇部に三角刺突文が施されている。	TP 7 PL33
11	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	口縁部片。口唇部に隆帯が巡り，その下に角押文が施されている。	TP31

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第37図 12	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。角押文と波状の沈線が施されている。	TP 8 PL33
13	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	口縁部片。角押文が施されている。	TP34 PL33
14	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	口縁部片。波状口縁の波頂部に角押文が施されている。	TP35 PL33
15	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	口縁部片。半截竹管状工具による押引文が施されている。口唇部に刻みが施されている。	TP42
16	深鉢 縄文土器	厚さ 1.2	口縁部片。口唇部に太い沈線が施されている。端部に刻みが施されている。	TP44
17	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	口縁部片。単節縄文が施されている。	TP32
18	深鉢 縄文土器	厚さ 1.5	口縁部片。口唇部に隆帯が貼付されている。	TP37
19	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	口縁部片。結節した単節縄文が施されている。	TP33
20	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。垂下する隆帯が施されている。TP11と接点はもたないが，同一個体と考えられる。	TP10 PL33
21	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	胴部片。垂下する隆帯が施されている。TP10と接点はもたないが，同一個体と考えられる。	TP11 PL33
22	深鉢 縄文土器	厚さ 0.5	口縁部片。角押文が施されている。	TP38
23	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	胴部片。隆帯がX字状に施されている。	TP13 PL33
24	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	口縁部片。ひだ状の輪積み痕が施されている。	TP 9
25	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	胴部片。隆帯がX字状に施されている。	TP14 PL33
26	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	胴部片。隆帯に沿って太い沈線が施されている。	TP43
27	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。角押文が施されている。	TP49
28	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	胴部片。隆帯に沿って角押文が施されている。	TP45
29	深鉢 縄文土器	厚さ 0.5	胴部片。角押文が施されている。	TP50
第38図 30	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	胴部片。角押文が施されている。	TP46
31	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	口縁部片。ひだ状の輪積み痕が施されている。	TP15
32	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。交互刺突文が施されている。	TP16 PL33
33	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	胴部片。角押文が施されている。	TP12 PL33
34	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。結節させた無節縄文が施されている。	TP 1
35	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。結節させた無節縄文が施されている。	TP 2 PL33
36	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。羽状縄文が施されている。	TP48
37	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。結節させた原体で施文されている。	TP47 PL33
38	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	胴部片。単節縄文が施されている。	TP17
39	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	胴部片。単節縄文が施されている。	TP36

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第38図40	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	胴部片。隆帯に沿って三角刺突文が施されている。	TP41
41	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。撚り戻した原体によって施文されている。	TP39
42	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	胴部片。撚り戻した原体によって施文されている。	TP40

図版番号	種別	計測値				石材	備考	
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第38図43	石錐	2.7	1.7	0.5	1.4	チャート	Q1 北側覆土中層	PL34

第2号住居跡（第39～43図）

位置　調査区域の南部，B2h6区。

規模と平面形　長軸5.23m，短軸5.06mの方形である。

主軸方向　N－41°－E

壁　壁高は22～40cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝　竈の西側の北壁と南東コーナー部，南西コーナー部の西壁を除いて，壁の下を巡っている。上幅6～20cm，下幅3～12cm前後，深さ4～7cmで，断面形はU字形である。

床　平坦である。中央部が踏み固められている。

ピット　7か所(P1～P7)。P1～P4は，長径20～40cm，短径15～38cmの円形及び楕円形で，深さ14～45cmである。いずれも位置と規模から柱穴と考えられる。P5は，長径68cm，短径46cmの楕円形で，深さ26cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は，竈西袖側の北壁際に位置し，長径48cm，短径38cmの楕円形で，深さ28cmである。P7は，南東コーナー部寄りに位置し，長径28cm，短径22cmの楕円形で，深さ22cmである。いずれも性格は不明である。

貯蔵穴　北西コーナー部に付設されている。長径80cm，短径60cmの楕円形で，深さ22cmである。

貯蔵穴土層解説

1 黒色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化物微量
2 暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

竈　北壁中央部を壁外に44cmほど掘り込み，砂質粘土で構築している。規模は長さ90cm，幅86cmである。煙道は，中央部の底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。中央部の覆土1層から2層で土師器甕が，2層と3層の間で土製支脚が確認されている。

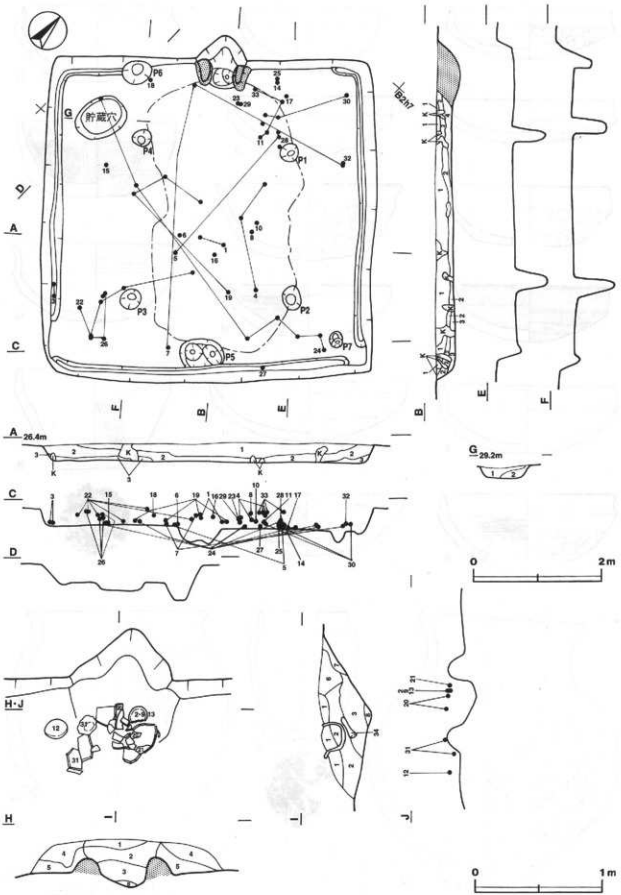
竈土層解説

1 暗赤褐色　焼土小ブロック・粒子微量，焼土小ブロック極微量
2 暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土中・小ブロック微量
3 暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量，焼土小ブロック極微量
4 暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化物・山砂微量
5 暗褐色　ローム中ブロック・炭化粒子・山砂少量，焼土粒子・炭化物微量
6 極暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物・山砂少量，ローム中ブロック微量
7 暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
8 褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物極微量

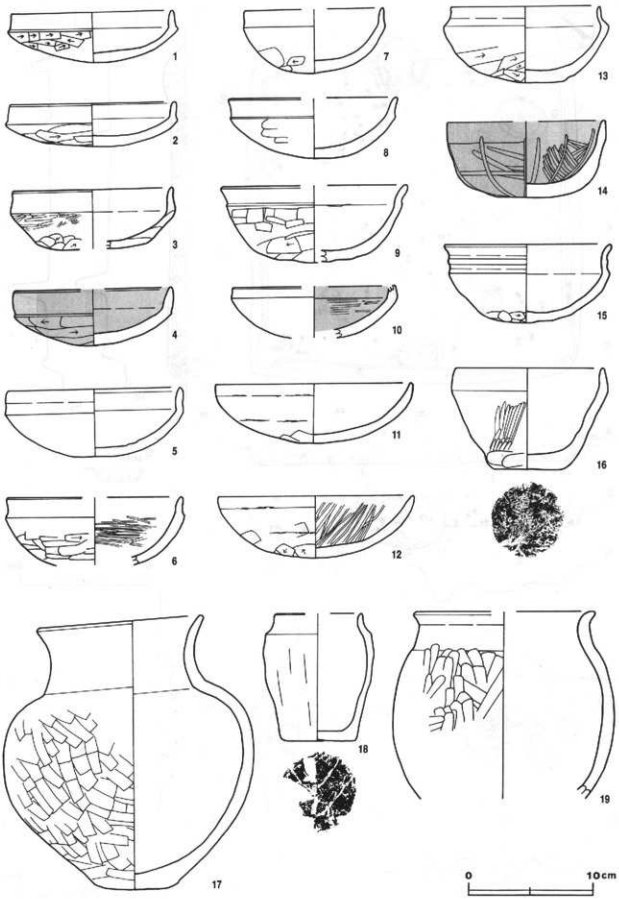
覆土　4層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

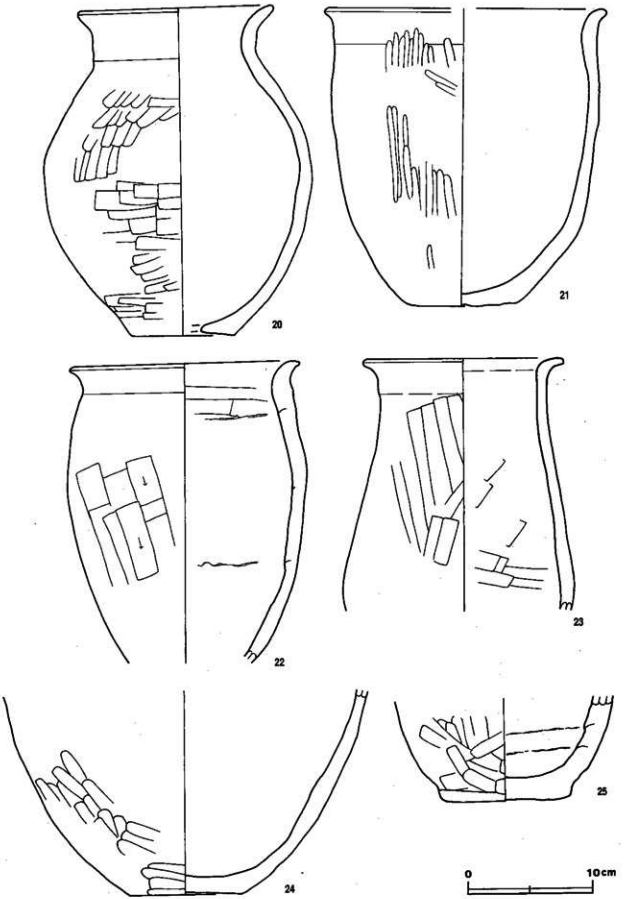
1 黒色　ローム粒子・炭化粒子微量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子極微量
2 黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量，ローム小ブロック・炭化粒子極微量
3 暗褐色　炭化粒子微量，焼土粒子・炭化物極微量
4 極暗赤褐色　ローム粒子・砂質粘土少量，焼土粒子・炭化粒子微量，焼土小ブロック・炭化物極微量



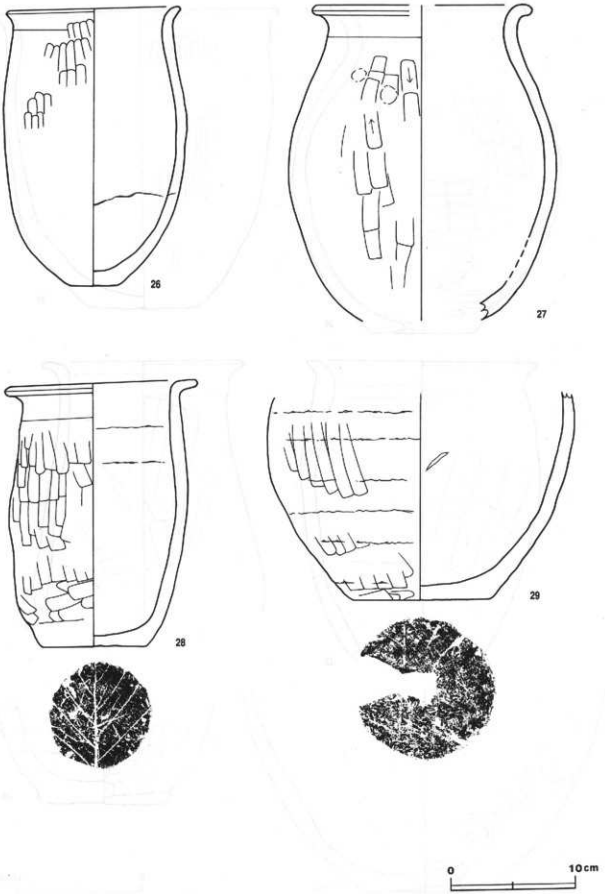
第39図　第２号住居跡実測図



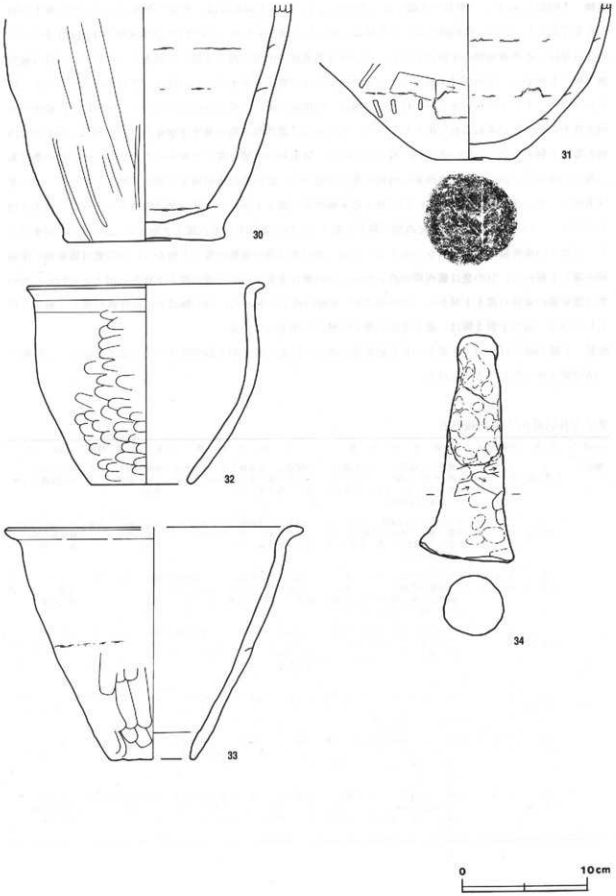
第40図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)



第41図　第２号住居跡出土遺物実測図(2)



第42図　第２号住居跡出土遺物実測図(3)



第43図　第２号住居跡出土遺物実測図(4)

遺物　土師器片981点，土製品（支脚）１点が出土している。土師器片は，北東・南西コーナー部の覆土下層から多く出土している。第40図に示した土器はいずれも土師器である。５の坏は，P１北側の床面直上から，12の坏は逆位で竈西袖南側の床面直上から，２の坏は竈東袖の内側の覆土下層から出土している。11の坏は竈東側の覆土下層から，３の坏は南西コーナー部の西壁寄りの覆土下層から，13の坏は，２の坏の下から正位で出土している。１・４・６・８・10の坏と16の椀は，中央部の覆土下層から出土している。９の坏は，竈内の東袖寄りから13の坏に重ねられて出土している。７の坏は，竈西袖南側の覆土下層から，15の椀は，P４の南西側の覆土下層から出土している。14の椀と17の壺は，竈東袖の東側の覆土下層から出土している。20の甕は竈の覆土下層から，18の甕は，竈西袖の西側の覆土中層から，21の甕は竈の覆土下層から出土している。22の甕は南西コーナー部の覆土下層から，23の甕は竈東袖南側の覆土下層から，26の甕は南西コーナー部の覆土下層から出土している。28の甕はP１北西側の覆土下層から，19の甕は中央部の覆土下層から，27の甕は，南東コーナー部寄りの南壁脇の覆土下層から出土している。29の甕は竈の南側の覆土下層から，30の甕は竈東袖の南東側の覆土下層から，31の甕は竈西袖の直上から，24の甕は南東コーナー部の覆土下層から出土している。25の甕は竈東袖の東側の覆土下層から，32の甑はP１東側の覆土下層から，33の甑はP１北西側の覆土中層から出土している。34の土製支脚は，竈中央部の覆土中層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から６世紀後半と考えられる。多くの土器が出土していることから，一時期に一括投棄されたものと考えられる。

第２号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	坏 土師器	A 12.6 B 3.9	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に突出した稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英にぶい褐色 普通	P13 40% 中央部覆土下層
2	坏 土師器	A 13.0 B 3.4	体部上位から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母にぶい橙色 普通	P７ 80% PL29 竈東袖内側 覆土下層
3	坏 土師器	A 12.4 B 4.6	底部から口縁部にかけて欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや内傾し，端部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，上位はヘラ磨き。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P９ 70% 南西コーナー部 覆土下層
4	坏 土師器	A [12.2] B 4.5	口縁部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に突出した稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。体部内・外面黒色塗彩。	砂粒・長石・石英・雲母 普通	P11 60% 中央部覆土下層
5	坏 土師器	A 13.4 B 5.3	体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 灰黄褐色 普通	P５ 90% PL29 P１北側床面直上
6	坏 土師器	A [13.8] B (5.3)	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ後，磨き。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P16 35% 中央部覆土下層
7	坏 土師器	A [10.7] B 5.0	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面・体部上位内面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，上位ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英にぶい褐色 普通	P15 40% 竈西袖南側 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 8	坏 土師器	A [13.0] B 4.7	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・黒色粒子 にぶい黄橙色 普通	P14 50% 中央部覆土下層
9	坏 土師器	A [14.3] B 6.0	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P12 40% 竈東袖内側 覆土下層
10	坏 土師器	A [12.7] B (4.0)	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ後、ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	P17 20% 中央部覆土下層
11	坏 土師器	A 15.1 B 4.8	体部下位から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後、ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P 8 70% PL29 竈東側 覆土下層
12	坏 土師器	A 15.2 B 4.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ後、縦位の磨き。底部ヘラ削り後、ナデ。	砂粒・長石・石英 外面：にぶい褐色 内面：黒褐色 普通	P 6 85% PL29 竈西袖内側 床面直上
13	坏 土師器	A 11.7 B 6.1	体部上位から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 暗褐色 普通	P10 70% 竈東袖内側 覆土下層
14	椀 土師器	A [12.4] B 6.0	体部上位から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ後、放射状の磨き。底部ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母 普通	P20 80% 竈東袖東側 覆土下層
15	椀 土師器	A 12.9 B 6.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反し中位に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、中位から上位にかけてナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後、ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P18 95% PL29 P4 南西側 覆土下層
16	椀 土師器	A 11.5 B 8.0 C 5.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P19 80% 中央部覆土下層
17	椀 土師器	A 12.8 B 21.6 C 6.5	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径がある。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。底部ヘラ削り後、ナデ。	砂粒・長石・石英・礫 にぶい黄褐色 普通	P22 90% PL29 竈東袖東側 覆土下層
18	甕 土師器	A [6.7] B 10.0 C 5.7	体部上位から口縁部にかけて欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾し上位は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後、ナデ。靡状圧痕を残す。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P23 60% PL29 竈西袖内側 覆土中層
19	甕 土師器	A [14.2] B (14.7)	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ後、縦位のナデ。	長石・石英 褐暗褐色 普通	P29 40% 中央部覆土下層
第41図 20	甕 土師器	A 15.0 B 26.0 C 7.9	体部上位から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり中位に最大径をもつ。頸部は直立し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後、ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・礫 黒色 普通	P21 80% PL29 底部焼成後穿孔 竈覆土下層
21	甕 土師器	A [21.4] B 23.5 C 8.5	体部中位から口縁部にかけて一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・礫・スコリア・黒色粒子 褐色 普通	P24 70% PL29 竈覆土下層
22	甕 土師器	A 17.6 B (23.8)	底部から口縁部にかけて一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。内面輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	P25 70% 南西コーナー部 覆土下層
23	甕 土師器	A 18.0 B (29.0)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ヘラ削り後、ナデ。内面輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英・礫 にぶい褐色 普通	P26 50% 竈東袖南側 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 24	甕 土師器	B (16.0) C 8.6	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P34 30% 南東コーナー部 覆土下層
25	甕 土師器	B (8.1) C 10.4	底部から体部下位にかけての破片。平底。底部はやや突出している。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。輪積み痕を残す。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P35 20% 竈東袖東側 覆土下層
第42図 26	甕 土師器	A 18.0 B 29.0 C 4.8	体部上位から口縁部にかけて一部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。内面輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P27 60% 南西コーナー部 覆土下層
27	甕 土師器	A [16.6] B (25.5)	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 黒褐色 普通	P30 50% 南東コーナー部 覆土下層
28	甕 土師器	A 14.5 B 21.1 C 7.9	体部下位から口縁部にかけて一部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面横ナデ。内面に輪積み痕を残す。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P28 80% PL29 P1 北西側 覆土下層
29	甕 土師器	B (16.3) C 10.6	底部から体部中位にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。体部外面に輪積み痕を残す。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・礫 褐色 普通	P31 50% 底部外面ヘラ記号「丨」 竈南側覆土下層
第43図 30	甕 土師器	B (17.5) C [12.0]	底部から体部中位にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。体部内面に輪積み痕を残す。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P32 50% 竈東袖南東側 覆土下層
31	甕 土師器	B (16.0) C 9.4	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。体部内・外面に輪積み痕を残す。体部端部ヘラ削り。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・雲母・礫 赤褐色 普通	P33 30% 竈西袖直上
32	椀 土師器	A 23.8 B 20.7 C [11.6]	体部から口縁部にかけて一部欠損。無底式。体部は内彎して立ち上がる。体部上位で直立し口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P36 90% PL29 P1 東側 覆土下層
33	椀 土師器	A [23.0] B 18.3 C [6.6]	体部から口縁部にかけての破片。無底式。体部は外頸して立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。外面に輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英 黒褐色 普通	P37 50% PL29 P1 北西側 覆土中層

図版番号	種別	計測値			備考	
		長さ(cm)	径 (cm)	重量(g)		
第43図34	土製支脚	18.0	7.4	495.2	DP 1 竈覆土中層	PL32

第３号住居跡（第44・45図）

位置　調査区域の南部，Ｂ２ｆ２区。

重複関係　第17・103号土坑を本跡が掘り込んでおり，本跡の方が新しい。第１号溝に本跡の北部が掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形　北壁と北西コーナー部寄り西壁が第１号溝に掘り込まれ，東壁の中央部は攪乱により残存していないため，正確な規模は不明であるが，一辺［5.00］m の方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－25°－Ｗ

壁　壁高は34～40cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝　南東コーナー部と南西コーナー部の壁下を巡っている。上幅４～12cm，下幅２～６cm，深さ２～６cmで，断面形はＵ字状である。

床　平坦である。

ピット　６か所（Ｐ１～Ｐ６）。Ｐ１～Ｐ４は，長径18～48cm，短径16～32cmの円形及び楕円形で，深さ28～68cmである。いずれも位置と規模から主柱穴と考えられる。Ｐ５は，径18cmの円形で，深さ12cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６は，竈東袖側の東側に位置し，長径26cm，短径20cmの楕円形で，深さ58cmである。性格は不明である。

貯蔵穴　北東コーナー部に付設されている。一辺56cmの方形で，深さ16cmである。

貯蔵穴土層解説

1　極暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・黒色粒子微量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子微量

竈　北部を第１号溝に掘り込まれているため遺存状態は悪く，焚き口部及び煙道の一部が残存している。

竈土層解説

1　極暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム小ブロック・粒子・焼土小ブロック微量

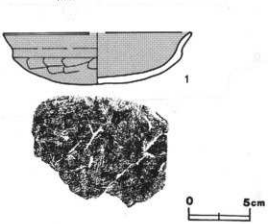
覆土　３層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

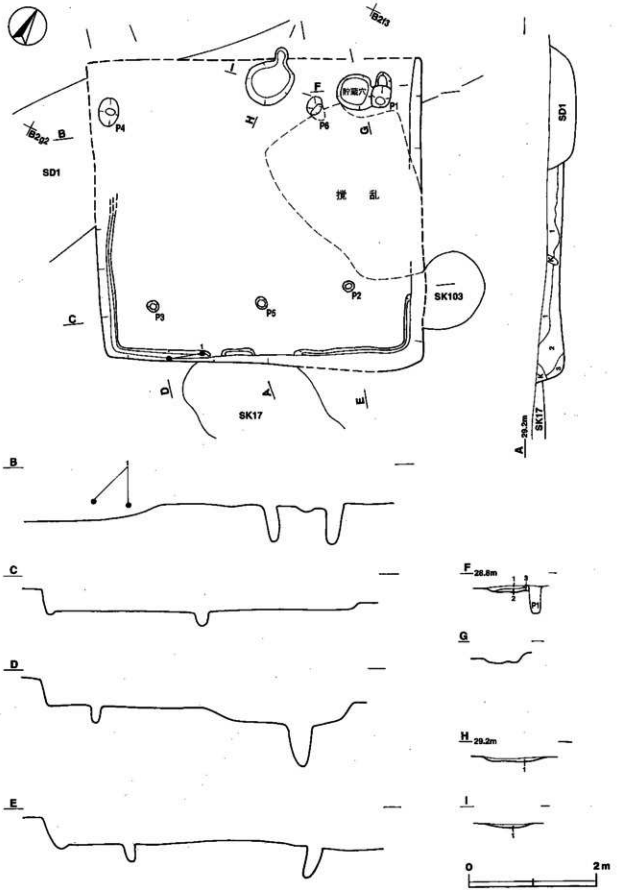
1　黒　色　焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック・焼土粒子極微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子極微量

遺物　土師器片71点が出土している。土師器片は，南西コーナー部の南壁側の覆土下層から多く出土している。第44図１の土師器坏は，南壁中央際覆土下層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から６世紀後半と考えられる。



第44図　第３号住居跡出土遺物実測図



第45図　第３号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	坏 土師器	A [15.0] B 4.0	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部との境に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面すべ。底部ヘラ削り後，ナデ。内・外面黒色漆彩。	砂粒・石英・雲母・スコリア・礫 普通	P38 80% PL30 底部外面ヘラ記号「ン」 南壁中央覆土下層

第4号住居跡（第46～48図）

位置　調査区域の南部，C2a3区。

重複関係　第5号掘立柱建物跡と第111・131・132・134・135・136・169・170号土坑に本跡が掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形　一辺約5.80mの方形である。

主軸方向　N－23°－W

壁　壁高は14～20cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝　他の遺構と重複している北西コーナー部は確認できないが，壁下を全周していると推定される。上幅8～20cm，下幅5～12cm，深さ4～16cmで，断面形は逆台形である。

床　平坦である。中央部が踏み固められている。

ピット　9か所（P1～P9）。P1～P4は，長径38～46cm，短径34～46cmの不整円形及び楕円形で，深さ56～70cmである。いずれも位置と規模から主柱穴と考えられる。P5は，径50cmの円形で，深さ44cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は，P1の東側に位置し，長径50cm，短径40cmの楕円形で，深さ36cmである。P7は，P2の東側に位置し，長径60cm，短径44cmの楕円形で，深さ16cmである。P8は，P3の西側に位置し，径32cmの不整円形で，深さ30cmである。P9は，P4の南西側に位置し，長径40cm，短径34cmの楕円形で，深さ40cmである。いずれも性格は不明である。

貯蔵穴　北東コーナー部の東壁際に付設されている。長径86cm，短径68cmの不整楕円形で，深さ40cmである。

貯蔵穴土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量，ローム小ブロック極微量
2　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子微量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子極微量

竈　北壁中央部に砂質粘土で構築している。袖部がわずかに残存しているだけで遺存状態は悪く，正確な規模は不明である。火床面は浅い皿状をしている。煙道は，火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。中央部の覆土2層下部から3層に土製支脚が正位で確認されている。

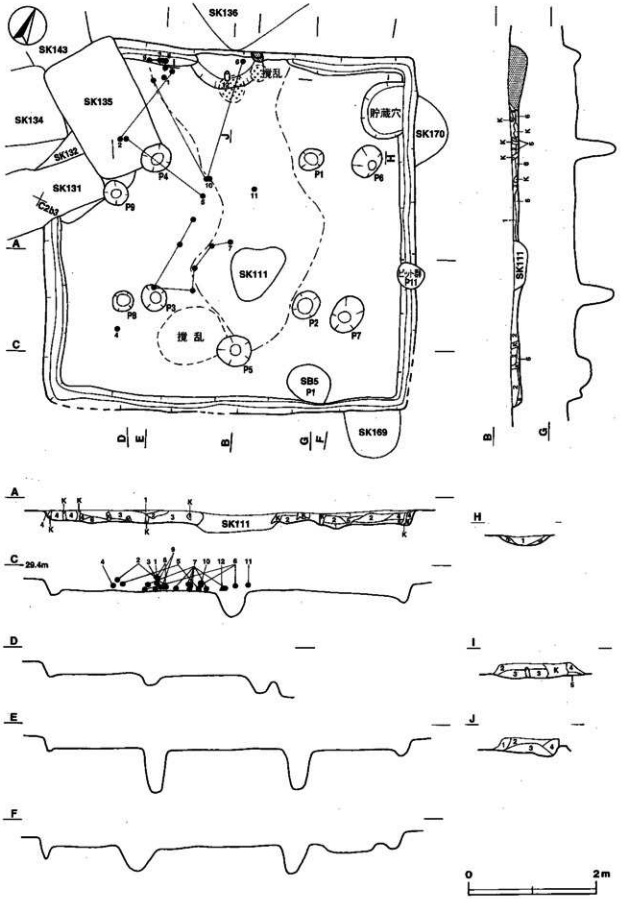
竈土層解説

1　黒　　色　ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量
2　灰　赤　色　焼土粒子・山砂少量，焼土ブロック微量，ローム小ブロック・炭化物・粒子極微量
3　暗赤灰色　焼土粒子少量，ローム小ブロック・粒子・焼土小ブロック微量
4　黒　褐　色　ローム小ブロック・焼土小ブロック微量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子極微量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック・焼土小ブロック極微量

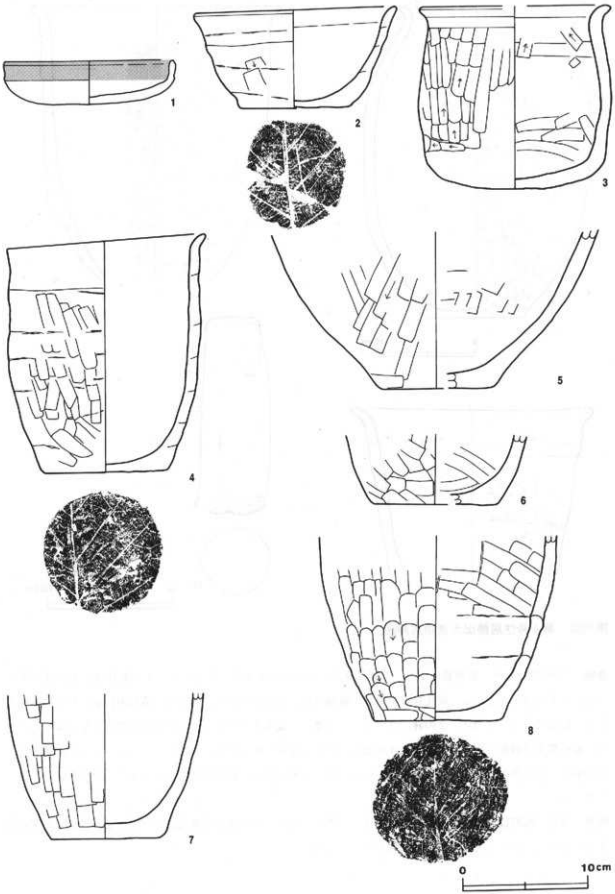
覆土　6層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

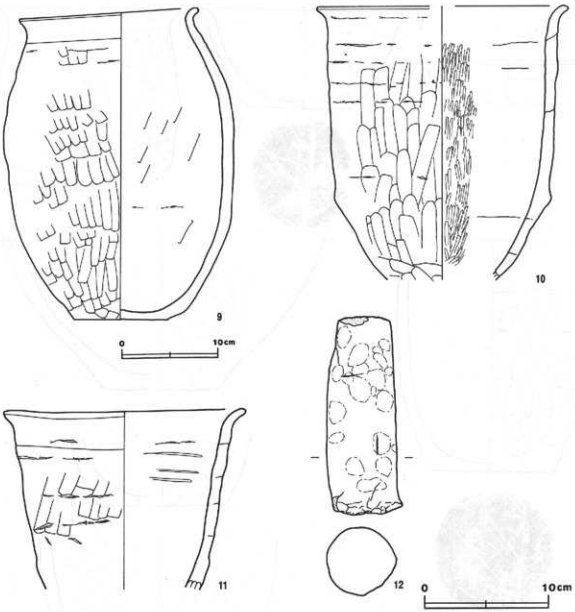
1　黒　褐　色　ローム粒子微量，炭化粒子極微量
2　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子極微量
4　極暗褐色　ローム小ブロック・粒子微量
5　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子極微量
6　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム中・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子極微量



第46図　第４号住居跡実測図



第47図　第４号住居跡出土遺物実測図(1)



第48図　第４号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物　土師器片898点，須恵器片１点，土製品２点，炭化材少量が出土している。土師器片は，中央部の覆土下層から多く出土している。炭化材は中央部の竈側の覆土下層から出土している。第47図に示した土器はいずれも土師器である。１の坏，２の鉢，３・８・９の甕は，竈西袖の西側の覆土上層から出土している。６の甕は，竈の覆土中層から出土している。４の甕は，Ｐ８の南側の覆土下層から出土している。５・７の甕と10・11の甑は，中央部の覆土下層から出土している。12の土製支脚は，竈中央部の火床面北部の覆土下層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から６世紀後半と考えられる。中央部から東部にかけて少量の炭化材が床面直上から出土していることから，焼失家屋と考えられる。

第４号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	坏 土師器	A 13.2 B 3.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。口縁部内・外面黒色処理。	砂粒・長石・石英・明黄褐色 普通	P 39 95% PL30 竈西袖西側覆土1層
2	鉢 土師器	A 15.7 B 7.9 C 8.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。体部外面に輪積み痕を残す。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・雲母 灰黄褐色 不良	P 40 90% PL30 竈西袖西側覆土1層
3	甕 土師器	A [14.8] B 14.5 C 12.0	体部中位から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，最大径は中位にある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・にぶい褐色 普通	P 42 70% PL30 竈西袖西側覆土上層
4	甕 土師器	A 15.6 B 18.7 C 9.7	体部下位から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部はほぼ直立して立ち上がり，最大径は中位にある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。体部外面に輪積み痕を残す。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P 43 90% PL30 P 8 南側覆土下層
5	甕 土師器	B (12.3) C (8.9)	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色　普通	P 46 10% 中央部覆土下層
6	甕 土師器	B (5.5) C (9.5)	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 47 5% 竈覆土中層
7	甕 土師器	B (11.3) C 8.5	底部から体部中位にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P 45 30% 中央部覆土下層
8	甕 土師器	B (14.5) C 11.0	底部から体部中位にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。下位内面に輪積み痕を残す。底部木葉痕。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 48 40% 竈西袖西側覆土上層
第48図 9	甕 土師器	A 18.2 B 32.5 C 9.6	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり，最大径は中位にある。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。下位内面に輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P 49 85% PL30 竈西袖南側覆土上層
10	甕 土師器	A [19.4] B (21.7)	体部から口縁部にかけての破片。無底式。体部は外傾して立ち上がる。下位に突出する稜をもつ。最大径は中位にある。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ後，撫で。体部内・外面に輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P 50 40% PL30 中央部覆土下層
11	甕 土師器	A 18.6 B (14.2)	体部から口縁部にかけての一部欠損。体部は外傾して立ち上がり，最大径は上位にある。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。外面に輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英 明褐色 普通	P 44 60% PL30 中央部覆土下層

図版番号	器種	計測値			備考
		長さ(cm)	径 (cm)	重量(g)	
第48図12	土製支脚	15.5	5.8	563.8	DP 2　竈覆土下層　PL32

第５号住居跡（第49～51図）

位置　調査区域の南部，Ｃ２ｄ４区。

重複関係　第５号掘立柱建物跡と第152・167号土坑，第32・33・36・38・39・42号ピットに本跡が掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形　一辺約5.00ｍの方形である。

主軸方向　Ｎ－23°－Ｗ

壁　壁高は20～24cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝　第32号ピットに掘り込まれている南壁部分は確認できないが，南東・南西の両コーナー部の一部を除いて，壁下をほぼ全周している。上幅８～34cm，下幅４～28cm，深さ４～16cmで，断面形は逆台形，一部Ｕ字状である。

床　わずかに凹凸しており，中央部が踏み固められている。竈の南側の，長軸約90cm，短軸約70cmの不定形の範囲に粘土が堆積している。

ピット　５か所（P1～P5）。P1～P4は，長径46～54cm，短径32～48cmの不整円形及び不整楕円形で，深さ40～60cmである。いずれも位置と規模から主柱穴と考えられる。P5は，径36cmの円形で，深さ52cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁中央部を壁外に40cmほど掘り込み，砂質粘土で構築している。規模は長さ90cm，幅110cmである。火床面は浅い皿状をしている。煙道は，火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1	黒　色	ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量	
2	灰　赤　色	焼土粒子・山砂少量，焼土ブロック微量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子極微量	
3	暗赤灰色	焼土粒子少量，ローム小ブロック・粒子・焼土小ブロック微量	
4	黒　褐　色	ローム小ブロック・焼土小ブロック微量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子極微量	
5	暗　褐　色	ローム粒子少量	
6	暗　褐　色	ローム粒子微量，ローム小ブロック・焼土小ブロック極微量	

覆土　10層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

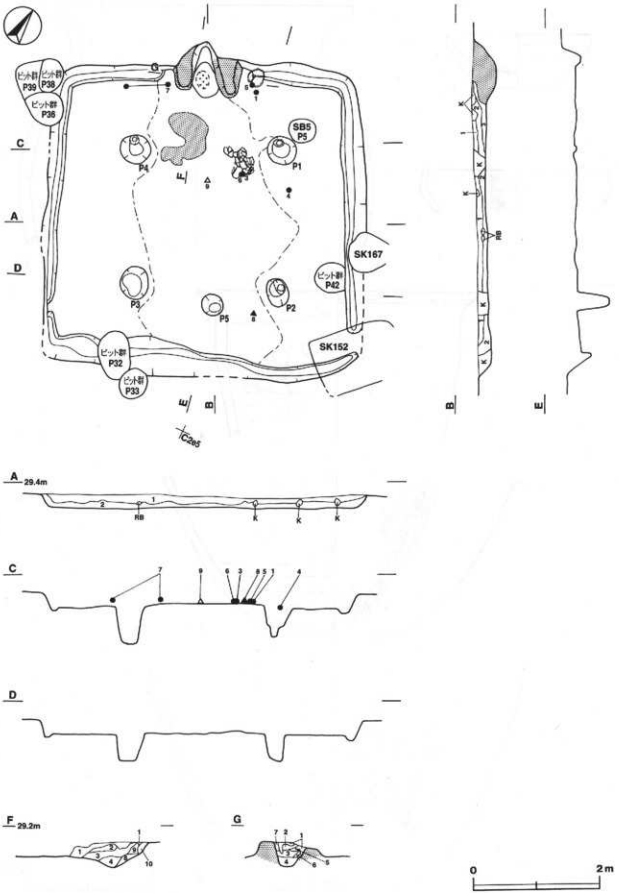
1	極暗赤褐色	焼土粒子少量，焼土小ブロック・粘土粒子微量	
2	暗赤褐色	粘土粒子中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック微量	
3	暗赤灰色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量	
4	暗赤褐色	焼土粒子中量，粘土粒子少量，焼土小ブロック微量	
5	暗赤灰色	粘土粒子中量，焼土小ブロック・粒子少量	
6	赤　黒　色	焼土粒子・粘土粒子少量，焼土小ブロック・黒色粒子微量	
7	暗赤灰色	粘土粒子中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック・黒色粒子微量	
8	暗赤褐色	粘土粒子中量，ローム小ブロック・粒子・焼土粒子・黒色小ブロック微量	
9	暗赤褐色	粘土粒子中帯，焼土粒子少量，ローム小ブロック・黒色小ブロック微量	
10	褐　灰　色	粘土粒子中帯，ローム小ブロック・粒子微量	

遺物　土師器片295点，須恵器片１点，土製品１点，不明鉄製品１点が出土している。土師器片は，中央部から南西コーナー部よりの覆土下層から多く出土している。第50図１の土師器坏と５の土師器甕は，竈東袖の東側の覆土下層から出土している。３と６の土師器甕はP1の南西，４の土師器坏はP1の南側の覆土上層から出土している。７の須恵器提瓶は，竈西袖の西側の覆土下層から出土している。２の土師器坏は，覆土中から出土している。８の土製支脚は，P2の西側の覆土下層から出土している。９の小札は，中央部の覆土下層から出土している。

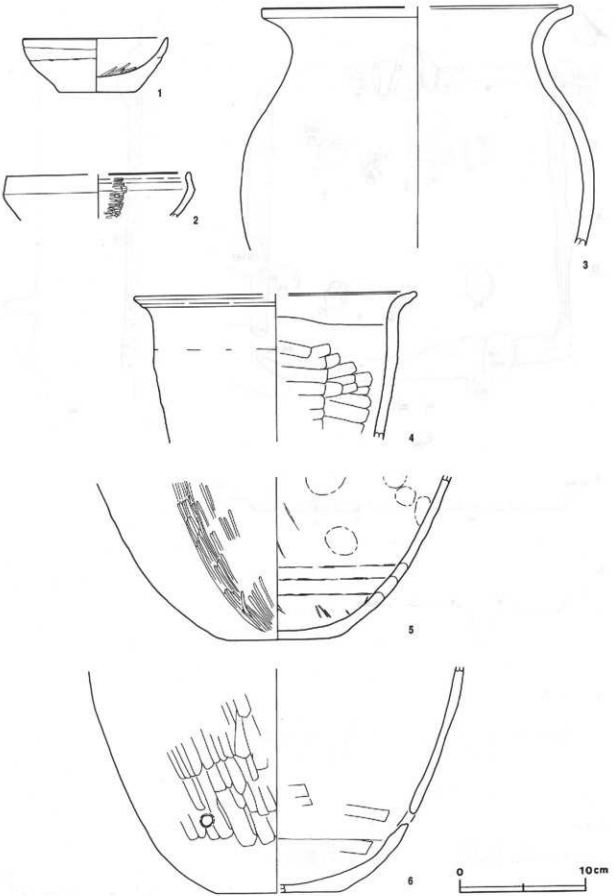
所見　本跡の時期は，出土土器から７世紀前半と考えられる。

第５号住居跡出土遺物観察表

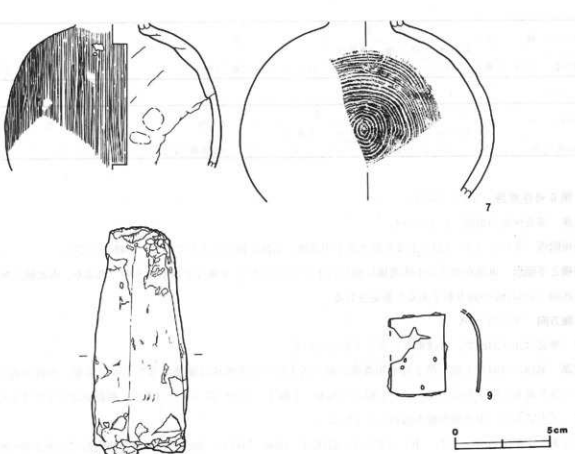
図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第50図 1	坏 土師器	A 11.3 B 4.3 C 6.0	体部中位から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内弯して立ち上がる。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P51 80% PL30 竈東解束側 覆土下層
2	坏 土師器	A [14.4] B (3.5)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内弯して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内面磨き。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P52 5% 覆土中



第49図　第５号住居跡実測図



第50図　第５号住居跡出土遺物実測図(1)



第51図　第５号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 3	甕 土師器	A [23.9] B (19.0)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は強く外反する。口縁部中位外面に稜をもつ。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・黒色粒子 橙色 普通	P53 30% PL30 P1 南西覆土下層
4	甕 土師器	A [22.2] B (11.6)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反する。中位外面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P54 10% P1 南側覆土下層
5	甕 土師器	B (12.7) C　9.5	底部から体部中位にかけての破片。体部は内傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，磨き。内面横位のナデ。内面下位に輪積み痕を，中位に指頭圧痕を残す。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P55 40% 竈東袖東側 覆土下層
6	甕 土師器	B (17.7) C [10.0]	底部から体部中位にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P56 30% PL30 体部下位焼成後穿孔 P1 南西覆土下層
第51図 7	提瓶 須恵器	B (14.0)	体部下位から上位にかけての破片。体部はやや横長な球形を呈し，中位に最大径を有する。	体部内・外面ナデ。外面カキ目。内面に輪積み痕と指頭圧痕を残す。体部成形の最終段階で，粘土円盤を貼り付けて，蓋をした後，ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・黒色粒子 褐灰色 普通	P57 10% PL30 竈西袖西側 覆土下層

図版番号	種　別	計　測　値			備　考
		長さ(cm)	径　(cm)	重量(g)	
第51図8	土製支脚	(18.5)	7.5	(868.4)	DP 8　P 2 西側覆土下層　PL32

図版番号	種　別	計　測　値				備　考
		長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第51図9	小　札	4.3	3.0	0.2	6.5	M 1　中央部覆土下層

第6号住居跡（第52～54図）

位置　調査区域の南部，C 2 c1 区。

重複関係　第187・190・194号土坑と第2号不明遺構に本跡が掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形　東部が第2号不明遺構に掘り込まれているので，正確な平面形は不明であるが，南北軸5.30m，東西軸（4.64)m の長方形であると推定される。

主軸方向　N－34°－W

壁　壁高は26～34cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　第187・194号土坑と第2号不明遺構に掘り込まれている西部は確認できないが，南東・南西の両コーナー部と東壁の壁下を巡っている。上幅10～28cm，下幅4～22cm，深さ6～14cmで，断面形はU字状である。

床　平坦である。中央部が踏み固められている。

ピット　4か所（P 1 ～P 4)。P 1 ～P 3 は，長径34～44cm，短径34～38cmの円形及び楕円形で，深さ60～82cmである。いずれも位置と規模から主柱穴と考えられる。P 4 は，径30cmの円形で，深さ42cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

電　北壁中央部を壁外に40cmほど掘り込み，砂質粘土で構築している。規模は長さ130cm，幅110cmである。火床面は浅い皿状をしている。煙道は，火床面から外傾して立ち上がっている。

電土層解説

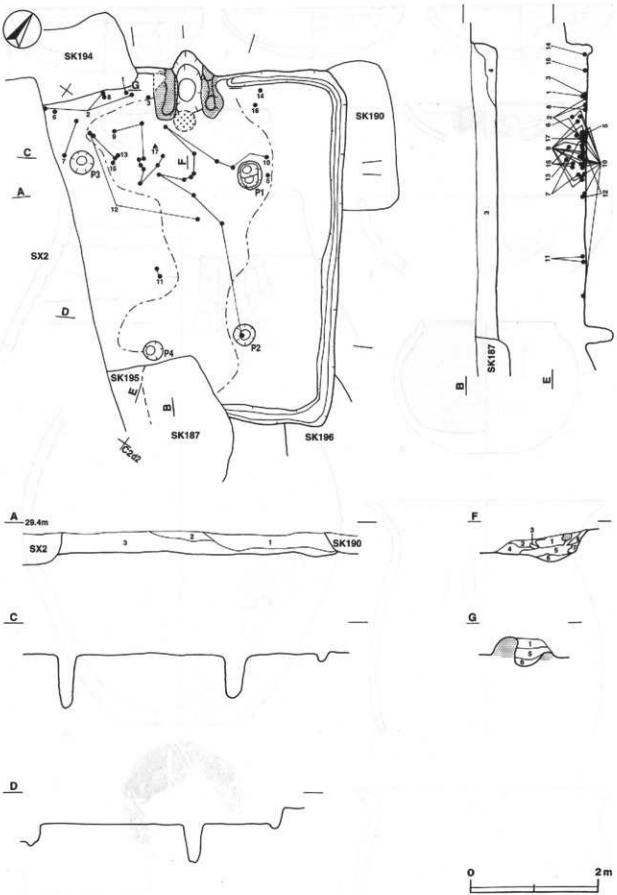
1　にぶい黄褐色　ローム粒子・粘土粒子少量，焼土中ブロック・粘土小ブロック・粘土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子微量，ローム中ブロック極微量
3　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，焼土小ブロック微量
4　灰　赤　色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・粒子微量
5　暗 赤 褐 色　焼土小ブロック・粒子少量
6　暗 赤 褐 色　焼土粒子少量，粘土粒子微量
7　にぶい褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
8　暗 赤 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量

覆土　4層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

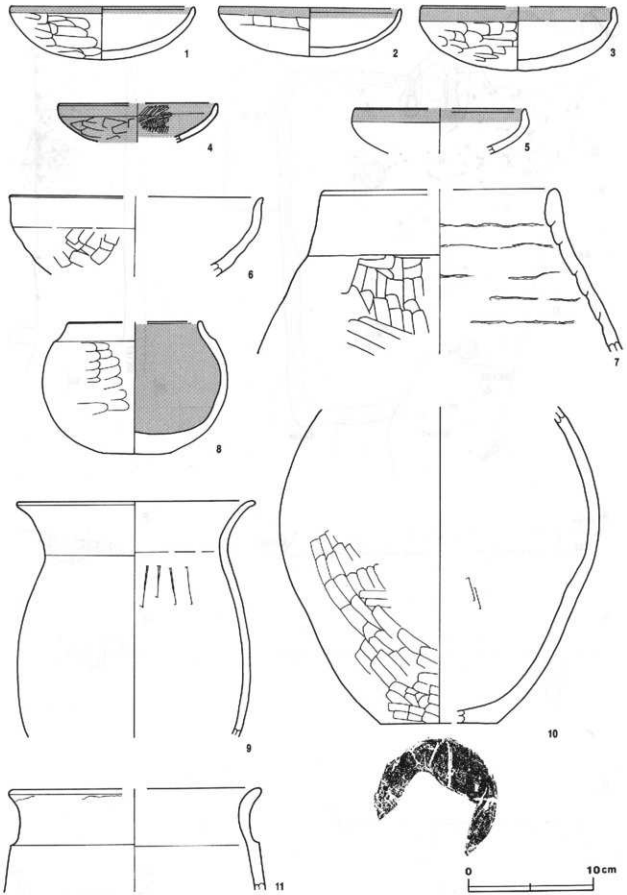
土層解説

1　黒　　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
4　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量

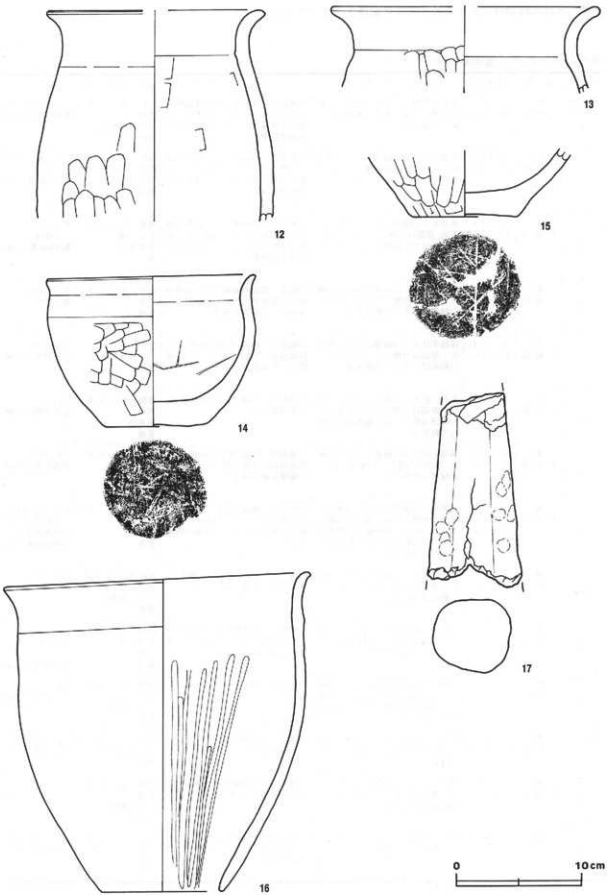
遺物　土師器片692点が出土している。土師器片は，中央部から東部にかけての覆土下層から全体的に出土している。第53図1・2の土師器坏と8の土師器椀は，竈西袖の西側の覆土下層から出土している。3の土師器坏は，竈西袖脇の覆土下層から出土している。6の土師器坏と7の土師器甕は，北西部の第2号不明遺構に接する位置の覆土下層から出土している。5の土師器坏は，中央部の東壁側の覆土下層から出土している。9の土師器甕は，P 3 の東側の覆土下層から出土している。10・11・12の土師器甕は，中央部の覆土下層から出土している。13・15の土師器甕は，P 3 の東側の覆土上層から出土している。14の土師器甕と16の土師器甑は，竈東袖の東側の覆土下層から出土している。4の土師器坏は，覆土中から出土している。17の土製支脚は，P 3 の東側の覆土下層から出土している。



第52図　第６号住居跡実測図



第53図　第６号住居跡出土遺物実測図(1)



第54図　第６号住居跡出土遺物実測図(2)

所見　本跡の時期は，出土土器から６世紀後半と考えられる。

第６号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	坏 土師器	A 14.3 B 4.3	体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。丸底。端部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。口縁部内・外面黒色磨き。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P58 100% PL30 竪西第西第竪土下層
2	坏 土師器	A 14.0 B 3.8	底部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。口縁部内・外面黒色磨き。	砂粒・長石・石英・雲母 灰黄赤褐色 普通	P59 80% PL30 二次焼成 竪西第西第竪土下層
3	坏 土師器	A [15.6] B 5.0	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。口縁部内・外面黒色磨き。	砂粒・長石・石英・雲母・礫 灰黄褐色 普通	P60 50% 二次焼成 竪西第第竪土下層
4	坏 土師器	A [12.2] B (3.0)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。	口縁部～体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面磨き。体部内・外面黒色処理。	砂粒・長石・石英・雲母 普通	P63 10% 竪土中
5	坏 土師器	A [13.4] B (3.6)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面，体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。口縁部内・外面黒色磨き。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P62 20% 中央部竪土下層
6	坏 土師器	A [19.8] B (6.2)	体部上位から口縁部にかけて破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。端部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面，体部内面横ナデ。体部外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P61 10% 北西部竪土下層
7	甕 土師器	A [18.0] B (12.9)	体部上位から口縁部にかけて破片。体部は内彎して口縁部に至る。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面，体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面に輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P65 10% 北西部竪土下層
8	鉢 土師器	A [10.3] B 10.4 C [5.6]	底部から口縁部にかけての破片。底部は内厚である。体部は内彎して立ち上がり，やや扁平な球形を呈する。口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。体部内面黒色処彩。	砂粒・長石・石英・雲母 褐灰色 普通	P64 50% PL30 二次焼成を受けた可能性有り。 竪西第西第竪土下層
9	甕 土師器	A 18.2 B (18.5)	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面，体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・黒色粒子 にぶい黄褐色 普通	P66 50% P3 東側覆土下層
10	甕 土師器	B (24.4) C [9.3]	底部から体部中位にかけての破片。体部は内彎し，倒卵形を呈する。上位に最大径をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・礫 灰褐色 普通	P67 40% 底部外面ヘラ記号「ハ」 中央部竪土下層
11	甕 土師器	A [19.4] B (7.5)	体部上位から口縁部にかけて破片。体部はほぼ直立して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P69 10% 中央部竪土下層
第54図 12	甕 土師器	A [16.9] B (16.8)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して口縁部に至る。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P68 10% 中央部竪土下層
13	甕 土師器	A [20.8] B (6.7)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P70 5% P3 東側覆土上層
14	甕 土師器	A 16.3 B 11.9 C 7.7	体部は内彎して立ち上がる。平底。口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P72 100% PL30 竪東袖覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 15	甕 土師器	B (5.3) C 8.3	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。底部外面擬状圧痕。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P71 20% P3東側覆土上層
16	椀 土師器	A 23.5 B 25.2 C 9.4	体部中位から口縁部にかけて一部欠損。無底式。体部は内彎して立ち上がり体部上位ではほぼ直立する。口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ後，縦位の磨き。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P73 85% PL31 竈東袖覆土下層

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	径 (cm)	重量(g)	備考
第54図17	土製支脚	(15.2)	6.1	(604.2)	DP4 P3東側覆土下層 PL32

第7号住居跡（第55・56図）

位置 調査区域の南部，C2f3区。

重複関係 第6号掘立柱建物跡，第158・168・174号土坑，第21号ピットに本跡が掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形 東部が調査区域外に延びているため，正確な平面形は不明であるが，南北軸3.67m，東西軸(3.47)mの方形であると推定される。

主軸方向 N－16°－W

壁 壁高は14～28cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝 調査区域外に延びている東部は確認できないが，他の遺構に掘り込まれている東壁中央部と南東コーナー部を除いて壁下を巡っている。上幅10～20cm，下幅5～14cm，深さ4～6cmで，断面形はU字状である。

床 平坦である。

ピット 2か所（P1・P2）。P1・P2は，長径38cm，短径32cmの楕円形で，深さはそれぞれ22cm・30cmである。いずれも位置と規模から主柱穴と考えられる。

竈 北壁の中央部と考えられる位置を壁外に30cmほど掘り込み，砂質粘土で構築されている。規模は長さ90cm，幅110cmである。床面を火床面としている。煙道は，火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

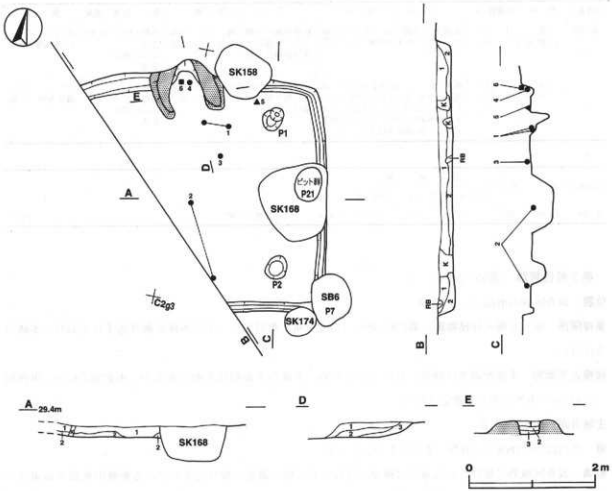
竈土層解説
1 赤灰色 粘土粒子中量，ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
2 灰赤色 焼土粒子中量，粘土粒子少量，ローム中ブロック・焼土小ブロック微量
3 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子少量，ローム中ブロック・粒子極微量

覆土 2層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1 黒色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物 土師器片121点，須恵器片16点，土製品1点，石製品1点が出土している。土師器片は，中央部の竈寄りの覆土下層から多く出土している。第56図1の須恵器坏は，竈南側の覆土下層から，4の須恵器壷，6の石製支脚は，竈の中央部の覆土下層から出土している。2の須恵器高台付坏，3の須恵器甕は，中央部の竈寄りの覆土下層から出土している。5の管状土錘は，P1の北西の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から9世紀前半と考えられる。

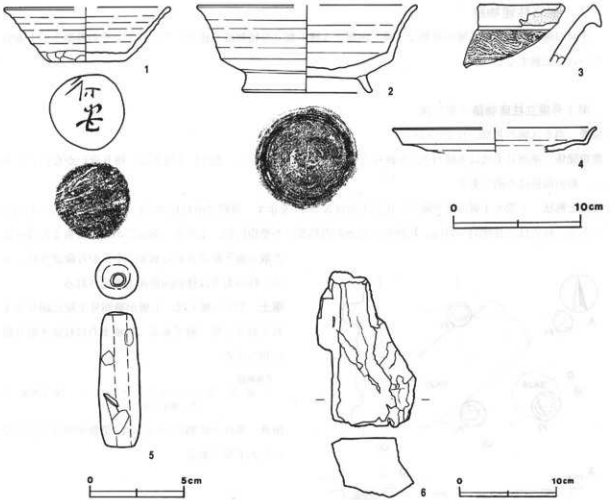


第55図　第７号住居跡実測図

第７号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	坏 須恵器	A [13.0] B 4.3 C 6.0	底部から口縁部にかけての一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 灰色 普通	P74 60% PL31 底部外面墨書「□宅ム」 竈南側覆土下層
2	高台付坏 須恵器	A [17.2] B 6.9 D 9.8 E 1.4	体部から口縁部にかけての一部欠損。平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部下位で屈曲し，口縁部は外反する。体部下位に稜をもつ。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・白色針状物質 暗灰色 普通	P75 60% PL31 中央部覆土下層
3	甕 須恵器	B (4.7)	口縁部の破片。口縁部は外傾して端部に至る。端部は上方と下方につまみ出されている。端部の中央部にわずかな稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。外面には櫛歯状工具による波状文が施されている。	砂粒 灰黄褐色 普通	P77 5% PL31 中央部覆土下層
4	盤 須恵器	A [16.2] B (1.9)	底部から口縁部にかけての破片。体部は大きく開き，上位で屈曲して口縁部に至る。口縁部は外反する。	体部・口縁部ロクロナデ。ロクロ目は弱い。	砂粒・長石・白色針状物質 黒褐色 普通	P76 5% PL31 竈中央部覆土下層

図版番号	種別	計測値			備考	
		長さ(cm)	径 (cm)	重量(g)		
第56図5	管状土錘	7.1	2.1	33.9	DP5　P1北西部覆土下層	PL32



第56図　第７号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種　別	計測値				石　材	備　考	
		長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第56図６	石　製　支　脚	16.1	10.2	6.0	1038.4	ホルンフェルス	Ｑ３　竈中央部覆土下層	PL34

表７　古峯Ｂ遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)(新旧)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設					覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
							整溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口	竈		
1	Ｂ２ｂ0	—	円　形	(4.50 × 4.50)	64～72	平坦	外周	1	－	2	^	－	自然	縄文土器片（深鉢，浅鉢），石鏃．	二段掘り込み状 本跡→SK10
2	Ｂ２ｂ6	N-41°-W	長方形	5.23 × 5.06	22～40	平坦	外周	4	1	2	1	竈	自然	土師器（坏，椀，壺，甕），土製支脚	
3	Ｂ２ｆ2	N-25°-W	[方形]	[5.00 × 5.00]	34～40	平坦	外周	4	1	1	1	竈	自然	土師器（坏）	SK17・103→本跡→SD1
4	Ｃ２ａ3	N-23°-W	方　形	5.80 × 5.62	14～20	平坦	外周	4	1	4	1	竈	自然	土師器（坏，鉢，甕，鍋），土製支脚	本　跡→SK11・131・132・134・135・136・140・170,SB5
5	Ｃ２ｄ4	N-23°-W	方　形	5.00 × 5.00	20～24	平坦	外周	4	－	－	1	竈	自然	土師器（坏，鉢，甕，鍋），鉄製品（鋤鍬），土製支脚，炭化材，木札	本跡→SK162・167,SB5,P32・33・36・38・42
6	Ｃ２ｃ1	N-34°-W	長方形	5.30 × (4.64)	26～34	平坦	垂直	3	－	－	1	竈	自然	土師器（坏，甕，鍋），土製支脚	本跡→SK187・190・194，SX 2
7	Ｃ２ｆ3	N-16°-W	[方形]	3.67 × (3.47)	14～28	平坦	外周	2	－	－	－	竈	自然	土師器片，須恵器（坏，高台付坏，鍋），石製支脚，土錘	本跡→SK158・168・174,P21,SB 6

2　掘立柱建物跡

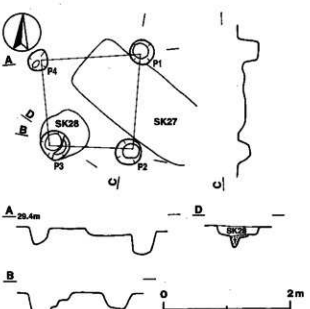
今回の調査で，調査区域の北部で１棟，南部で５棟の掘立柱建物跡を確認した。以下，その特徴と出土遺物について記載する。

第１号掘立柱建物跡（第57図）

位置　調査区域の北部，Ｂ２ｆ９区。

重複関係　第28号土坑に本跡のＰ３を掘り込まれ，本跡の方が古い。第27号土坑とは，切り合いがないことから，新旧関係は不明である。

規模と形状　１間×１間の建物跡で，桁行方向はＮ－０°を示す。規模は桁行1.36～1.48m，梁行1.32～1.44mである。柱穴は，長径34～44cm，短径31～34cmの円形及び不整楕円形，深さ26～38cmである。柱痕または柱抜き取り痕と推定される層が，Ｐ３から確認されており，柱の太さは径10cm前後と推定される。



第57図　第１号掘立柱建物跡実測図

覆土　Ｐ３の覆土は，上層が第28号土坑に掘り込まれており，単一層である。柱痕または柱抜き取り痕に相当する。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，粘性・締まり弱

所見　本跡の時期については，遺物が出土していないため不明である。

第２号掘立柱建物跡（第58図）

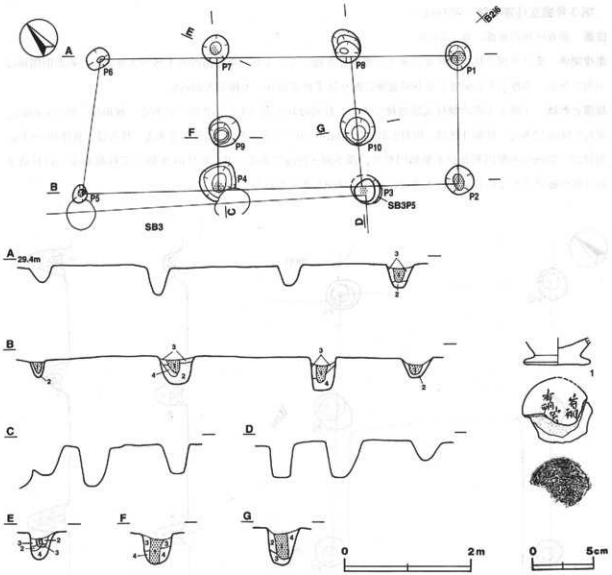
位置　調査区域の北部，Ｂ２ｈ4区。

重複関係　第３号掘立柱建物跡と重複しているが，重複箇所の土層が未確認のため新旧関係は不明である。

規模と形状　３間×１間の側柱式建物跡である。柱穴は10か所（Ｐ１～Ｐ10）である。規模は，桁行5.90m，梁行2.15mである。柱間寸法は，桁行1.50～2.24m（1.50＋2.24＋2.16）と不揃いである。柱穴は，長径34～58cm，短径24～52cmの不整円形及び不整楕円形で，深さ24～58cmである。棟通りの北寄りと南寄りには，それぞれＰ９とＰ10の間仕切り柱穴がある。柱痕あるいは柱抜き取り痕が確認されたのはＰ２・Ｐ４・Ｐ５～Ｐ８である。柱の太さは，径12～20cmと推定される。

桁行方向　Ｎ－50°－Ｗ

覆土　柱痕及び柱抜き取り痕は，第１層が相当し，第２～４層が埋め土と考えられる。第２～４層は硬く突き固められている。



第58図　第２号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

土層解説

1　黒　色　ローム粒子微量，締まり弱
2　褐　色　ローム小ブロック多量，ローム粒子・黒色小ブロック少量，粘性・締まり強
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム粒子微量，締まり強
4　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・粒子微量，粘性・締まり強

遺物　土師器片４点が出土している。第58図１の土師器高台付坏の底部片は，Ｐ９の柱穴埋土中から出土している。

所見　本跡の時期については，出土土器から10世紀代と考えられる。

第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表

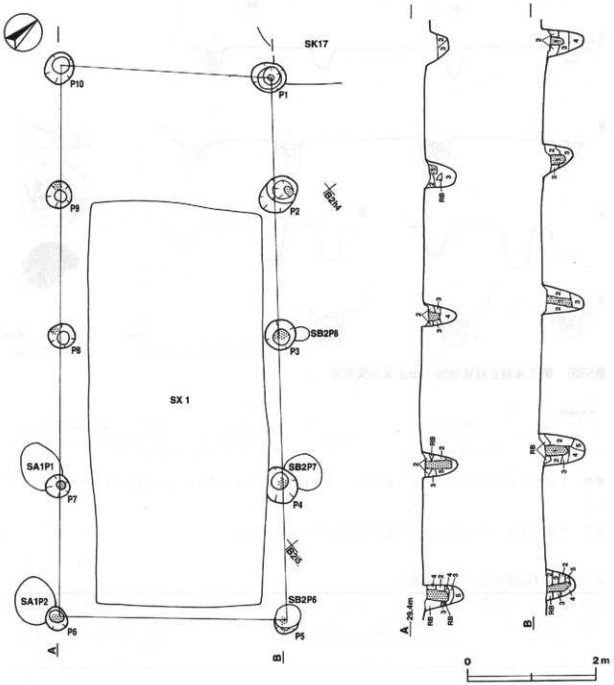
図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第58図 1	高台付坏 土 師 器	B　2.1 C［5.3］	高台から体部下端にかけての破片。高台は平底の底面から屈曲して体部に至る。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P152 30% PL32 底部外面墨書 「有朝ｓ」 P9 埋土中

第３号掘立柱建物跡（第59図）

位置　調査区域の南部，Ｂ２ｈ２区。

重複関係　第２号掘立柱建物跡及び第１号柵列と重複しているが，重複箇所の土層が未確認のため新旧関係は不明である。本跡のＰ４が第１号不明遺構に掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と形状　４間×１間の側柱式建物跡である。柱穴は10か所（Ｐ１～Ｐ10）である。規模は，桁行8.68m，梁行3.60m である。柱間寸法は，桁行2.10～2.30m（2.10＋2.20＋2.30＋2.10）である。柱穴は，長径40～64cm，短径32～52cmの不整円形及び不整楕円形で，深さ36～72cmである。Ｐ５とＰ10を除いて柱痕あるいは柱抜き取り痕が確認されている。柱の太さは，径10～16cmと推定される。



第59図　第３号掘立柱建物跡実測図

桁行方向　N－50°－W

覆土　柱痕及び柱抜き取り痕は，第１層が相当し，第２～５層が埋め土と考えられる。第２・４・５層は粘性が強いが，強く突き固められた形跡はない。

土層解説
1　黒　　色　ローム小ブロック・粒子微量，締まり強
2　極暗褐色　ローム小ブロック・粒子微量，ローム大・中ブロック極微量，粘性強
3　黒 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，粘性・締まり弱
4　褐　　色　ローム中ブロック多量，ローム小ブロック・黒色粒子少量，ローム粒子微量，粘性強，締まり弱
5　黒 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，粘性強，締まり弱

所見　遺物が出土していないため，正確な時期は不明であるが，第１号不明遺構との重複関係から中世以前と考えられる。

第４号掘立柱建物跡（第60図）

位置　調査区域の南部，Ｃ２ｅ４区。

重複関係　第６号掘立柱建物跡と重複しているが，重複箇所の土層が未確認のため新旧関係は不明である。第155号土坑に本跡のＰ２・Ｐ３を掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と形状　３間×２間の側柱式建物跡である。柱穴は10か所（Ｐ１～Ｐ10）である。規模は，桁行4.60m，梁行2.60m である。柱間寸法は，桁行が1.00～1.60m（1.40＋1.00＋1.60）と不揃いであり，梁行1.20～1.40m（1.20＋1.40）である。柱穴は，長径24～90cm，短径24～64cmの不整円形及び不整楕円形で，深さは，Ｐ８が14cm，Ｐ10が22cmと浅いが，ほかは32～76cmである。棟通りの南寄りのＰ５は，柱筋からはずれた位置で確認されている。柱痕あるいは柱抜き取り痕は確認されていない。

桁行方向　Ｎ－０°

覆土　Ｐ２及びＰ３は第155号土坑と重複しており，確認面より20cmほど掘り込まれているため，上層は残存していない。Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７の土層は，第６号掘立柱建物跡との重複により一部分が確認されただけである。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子微量，焼土小ブロック極微量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・粒子少量
3　暗 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，粘性強，締まり弱
4　褐　　色　ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・粒子微量，粘性・締まり強
5　黒 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，粘性・締まり強

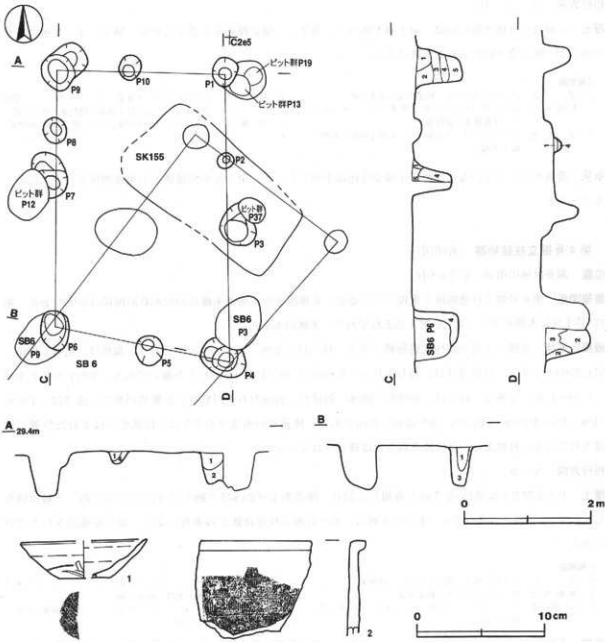
遺物　土師質土器片９点が出土している。第60図１の土師質土器小皿と２の土師質土器は，Ｐ９の埋土中から出土している。

所見　本跡の時期については，出土土器から中世と考えられる。

第４号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	小皿 土師質土器	A［9.7］ B 2.9 C［4.0］	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P153 40% P9 埋土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第60図 2	不明 土師質土器	厚さ 0.9	体部から口縁部にかけての破片。格子文が施されている。	TP87 P9 埋土中



第60図　第４号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

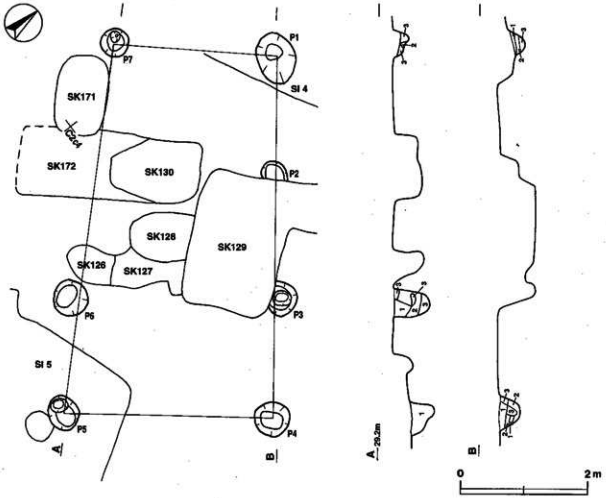
第５号掘立柱建物跡（第61図）

位置　調査区域の南部，Ｃ２ｂ3区。

重複関係　本跡のＰ１が第４号住居跡を，Ｐ5が第５号住居跡を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。第129号土坑に本跡のＰ２・Ｐ３が掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と形状　３間×１間の側柱式建物跡である。柱穴は７か所（Ｐ１～Ｐ7）である。規模は，桁行5.72m，梁行2.60～3.32mである。柱間寸法は，桁行1.80～2.00m(2.00＋1.80＋1.92)である。柱穴は，長径42～84cm，短径40～60cmの不整円形及び不整楕円形で，深さ28～68cmである。いずれの柱穴でも，柱痕あるいは柱抜き取り痕は確認されていない。

桁行方向　N－50°－W



第61図　第５号掘立柱建物跡実測図

覆土　第２～３層が埋め土と考えられる。粘性が強いが，強く突き固められた形跡はない。

土層解説
1　黒　　色　ローム粒子極微量，粘性弱
2　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，粘性強
3　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・粒子微量，粘性極強，締まり強

遺物　土師質土器細片１点が出土している。Ｐ３の柱穴埋土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世と考えられる。

第６号掘立柱建物跡（第62図）

位置　調査区域の南部，Ｃ２ｆ３区。

重複関係　第４号掘立柱建物跡と重複しているが，重複箇所の土層が未確認のため新旧関係は不明である。本跡のＰ４が第162号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。また，第155号土坑に本跡のＰ１を掘り込まれ，本跡の方が古い。

規模と形状　４間×１間の側柱式建物跡である。柱穴は10か所（Ｐ１～Ｐ10）である。規模は，桁行7.60m，梁行2.28～2.80mである。柱間寸法は，桁行1.40～2.60m（2.60＋2.00＋1.40＋1.60）である。Ｐ３・Ｐ６～Ｐ10は，長径66～124cm，短径46～80cmの不整円形及び不整楕円形で，深さ60～70cmである。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４は，長径32～40cm，短径26～38cmの不整円形及び不整楕円形で，深さ44～52cmである。Ｐ５は，深さは12cmで

ある。いずれの柱穴でも柱痕あるいは柱抜き取り痕は確認されていない。

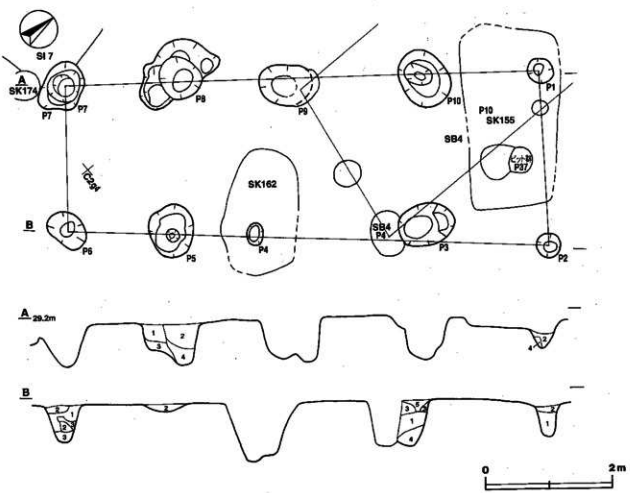
桁行方向　N－40°－E

覆土　第2～4層が埋め土と考えられる。第2～4層は粘性が強い覆土であるが，3層を除いて強く突き固められた形跡はない。

土層解説
1　黒　　色　ローム粒子極微量，締まり弱
2　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，粘性強
3　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・粒子微量，粘性・締まり強
4　赤　褐　色　ローム中ブロック・粒子中量，ローム小ブロック少量，粘性強

遺物　土師質土器細片8点が出土している。P8の柱穴埋土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世と考えられる。



第62図　第6号掘立柱建物跡実測図

表8　古峯B遺跡掘立柱建物跡一覧表

掘立柱建物跡番号	位置	桁行方向	種物	桁×梁(間)	規模(m)	面積(㎡)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	柱穴(cm) 構造	穴数	平面形	長径(軸)	短径(軸)	深さ	出土遺物
1	B2f9	N－0°	南北棟	1×1	1.44×1.44	2.13	1.36～1.48	1.32～1.44	—	4	円形・不整楕円形	34～44	31～34	26～38	
2	B2h4	N－90°－W	東西棟	3×1	5.90×2.15	12.69	1.50～2.24	2.00～2.18	側柱	10	不整円形・不整楕円形	34～58	24～52	24～58	土師器（高台付坏）
3	B2h2	N－90°－W	東西棟	4×1	8.68×3.60	31.22	2.10～2.30	3.32～3.60	側柱	10	不整円形・不整楕円形	40～64	32～52	36～72	
4	C2e4	N－0°	南北棟	3×2	4.60×2.60	11.96	1.00～1.60	1.30～1.40	側柱	10	不整円形・不整楕円形	34～50	24～64	32～76	土師質土器（小皿）

掘立柱建物跡番号	位置	長軸方向	建物	桁×梁(間)	規模(m)	面積(㎡)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	柱穴(cm) 構造	穴数	平面形	長径(幅)	短径(幅)	深さ	出土遺物
5	C2h3	N－50°－W	東西棟	3×1	5.72×3.32	19.00	1.80～2.60	2.60～3.32	側柱	7	不整円形・不整楕円形	42～84	40～49	28～68	土師質土器片
6	C2f3	N－40°－E	南北棟	4×1	7.60×2.80	21.28	1.40～2.40	2.28～2.80	側柱	10	不整円形・不整楕円形	32～124	26～89	12～70	土師質土器片

3　柵列

今回の調査で，柵列１か所を確認した。以下，その特徴について記載する。

第１号柵列（第63図）

位置　調査区域の南部，Ｂ２ｉ４～Ｂ２ｊ５区。

重複関係　本跡のＰ１・Ｐ２が，第３号掘立柱建物跡のＰ７・Ｐ６を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と形状　直線上に５か所（Ｐ１～Ｐ５）の柱穴が確認され，柱間寸法は，2.00～2.30mである。Ｂ２ｉ４区から南東方向（Ｎ－50°－Ｗ）に8.50m延びている。柱穴は，長径56～76cm，短径50～70cmの不整円形または不整楕円形で，深さ38～62cmである。柱痕あるいは柱抜き取り痕跡が確認されたのはＰ１・Ｐ５である。柱の太さは，径14～20cmと推定される。

覆土　柱痕あるいは柱抜き取り痕は，第１層が相当し，第２～３層は埋め土と考えられる。

Ｐ１土層解説
1　黒　　色　黒色粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・粒子微量
2　黒　　色　黒色粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム粒子微量

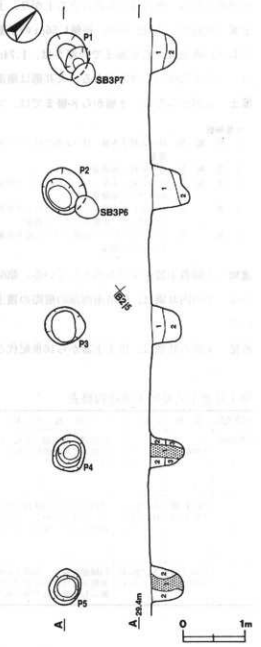
Ｐ２土層解説
1　黒　　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
2　黒　　色　ローム中・小ブロック少量，ローム粒子微量

Ｐ３土層解説
1　黒　　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
2　黒　　色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量

Ｐ４土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子微量
2　暗　褐　色　ローム大ブロック・粒子少量，ローム小ブロック微量
3　黒　褐　色　ローム中ブロック・粒子少量，ローム小ブロック微量

Ｐ５土層解説
1　黒　　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
2　黒　　色　ローム小ブロック少量

所見　本跡の時期は，重複関係にある第３号掘立柱建物跡より新しいので，中世以降と考えられるが，遺物が出土していないため，不明である。本跡の東側に隣接する第１号不明遺構と主軸方向が一致するので，第１号不明遺構に関



第63図　第１号柵列跡実測図

連する遺構の可能性も考えられる。

4　地下式壙

今回の調査で，地下式壙２基が確認された。以下，それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記載する。

第１号地下式壙（第64図）

位置　調査区域の北部，Ｂ２ｃ9 区。

重複関係　第４号溝と重複しているが，新旧関係は不明である。

主軸方向　Ｎ－52°－Ｗ

竪坑　深さ1.58m で，底面は長径1.20m，短径0.92m の楕円形である。主室の底面との間にわずかな高まりが認められる。壁はほぼ垂直に立ち上がり，上位で外傾する。

主室　底面は，長軸2.94m，短軸1.56m の不整長方形で，平坦である。鹿沼パミス層の下の層まで掘り込まれており，確認面から底面までの深さは，1.74m である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，南北両壁の中位にオーバーハング気味のくぼみがある。天井部は崩落している。

覆土　９層からなる。２層から８層までは，ブロック状に堆積して天井部の崩落土と考えられる。

土層解説

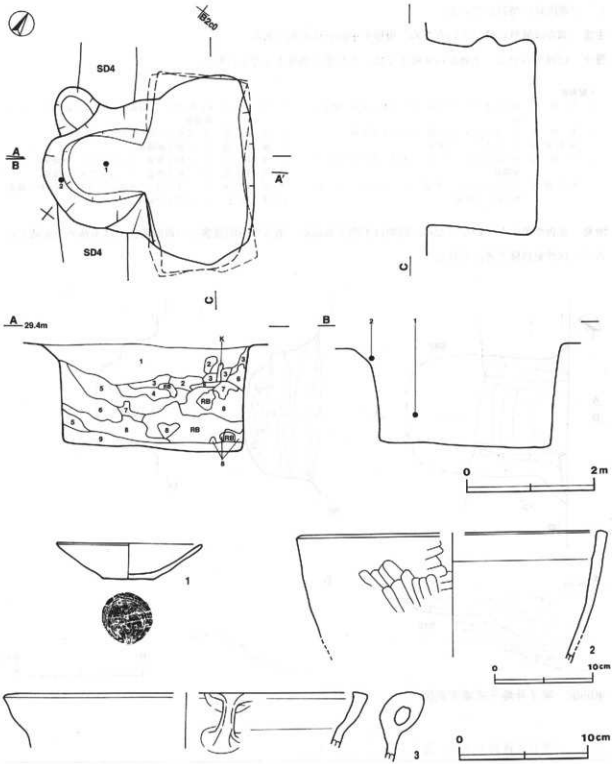
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子極微量
2　黒　褐　色　ローム粒子極微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，ローム中ブロック極微量
4　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・黒色小ブロック微量
5　褐　　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
6　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，黒色小ブロック微量
7　暗　褐　色　ローム小ブロック中量
8　褐　　色　ローム中ブロック多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量，KP 粒子微量
9　にぶい褐色　ローム大ブロック中量，ローム小ブロック少量，KP 粒子微量

遺物　土師質土器片４点が出土している。第64図１の土師質土器小皿は，竪坑中央部の覆土下層から出土している。２の内耳鍋は，竪坑南西部の壁際の覆土上層から出土している。３の内耳土器は，覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。

第１号地下式壙出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第64図 1	小　皿 土師質土器	A　11.3 B　2.8 C　4.1	口縁部一部欠損。平底。体部は，外傾して直線的に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部一体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。底部外面簾状圧痕残存。	砂粒・長石・石英・雲母・白色針状物質 乳褐色 普通	P78 95% PL31 竪坑中央部 覆土下層
2	内耳鍋 土師質土器	A〔31.0〕 B〔12.8〕	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面横位のナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P79 10% 体部外面スス付着 竪坑南西部 覆土上層
3	内耳土器 土師質土器	A〔28.4〕 B（5.4）	口縁部の破片。内耳１か所残存。耳貼り付け部の外面はやや外側に張らむ。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。耳貼り付け部ナデ。耳部縦位のナデ。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P80 5% PL31 覆土中



第64図　第１号地下式壙・出土遺物実測図

第２号地下式壙（第65図）

位置　調査区域の南部，Ｃ１ｃ０区。

重複関係　第２号不明遺構を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

主軸方向　Ｎ－40°－Ｅ

竪坑　深さ0.96mである。底面は，長軸（0.90)m，短径0.80mの不整長方形と推定される。壁は，主室に向

かって階段状に傾斜している。

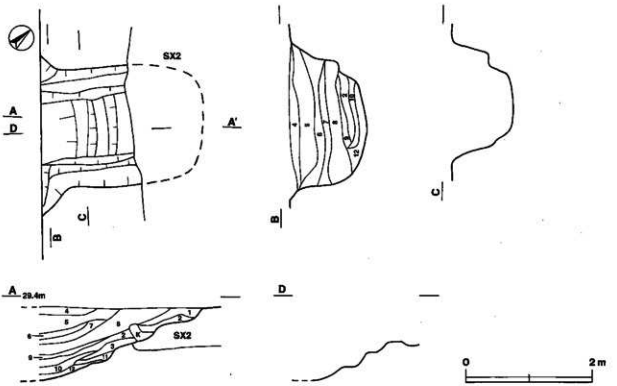
主室　調査区域外に延びているため，規模や平面形は不明である。

覆土　12層からなる。2層から8層までは，天井部の崩落土と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，締まり弱
2　黒　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
3　極暗褐色　ローム小ブロック多量
4　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック極微量
5　極暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・KP小ブロック微量
6　黒　　色　KP小ブロック微量，ローム大・中・小ブロック極微量
7　黒　褐　色　ローム粒子・KP小ブロック極微量
8　暗　褐　色　ローム粒子極微量
9　黒　褐　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック微量
10　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
11　暗　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子・KP粒子微量
12　黒　褐　色　ローム粒子少量

所見　遺物が出土していないため，時期は不明であるが，第2号不明遺構との新旧関係では本跡の方が新しいので，16世紀以降と考えられる。



第65図　第2号地下式壙実測図

表9　古峯B遺跡地下式壙一覧表

地下式壙番号	位置	長軸方向		平面形と規模（m） 上面 平面形	上面 長径(軸)×短径(軸)	底面 平面形	底面 長径(軸)×短径(軸)	深さ	壁面	底部	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
1	B 2 c9	N-52°-E	竪坑	不整楕円形	1.90 × 1.60	不整楕円形	1.20 × 0.92	1.58	垂直	平坦	人為	上層質土器(小皿，内耳土器)	SD 4と重複
			主室	不整楕円形	2.96 × 1.55	不整長方形	3.06 × 1.66	1.74	内傾	平坦			
2	C 1 c9	N-40°-E	竪坑	不整楕円形	[2.30] × 1.86	不整長方形	(0.90) × 0.80	0.96	垂直	平坦	人為		SX 2一本跡，
			主室	—	—	—	—	—	—	—			

5　土坑

今回の調査で，土坑209基を確認した。ここでは，形状などから陥し穴と考えられる土坑，図示可能な遺物を伴う土坑，特殊な形状を呈している土坑，土坑墓群と関連が考えられる土坑について記載する。

第18号土坑（第66図）

位置　調査区域の北部，Ｂ３ｆ１区。台地の突端部に位置する。

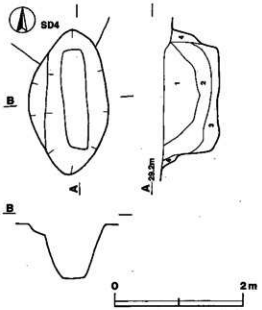
重複関係　第４号溝跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　長径2.28m，短径1.23mの楕円形で，深さ86cmである。底面はほぼ平坦で，長方形を呈する。北・南壁は垂直に立ち上がり，北壁は底面から24cm，南壁は底面から60cmの高さより上が外傾する。東・西壁は外傾して立ち上がり，西壁は底面から68cmの高さより上が外傾する。

長径方向　Ｎ－２°－Ｅ

覆土　４層からなり，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
4　褐　　色　ローム粒子中量



第66図　第18号土坑実測図

所見　本跡は，形状から陥し穴と考えられる。時期は，遺物が出土していないため不明である。

第51号土坑（第67図）

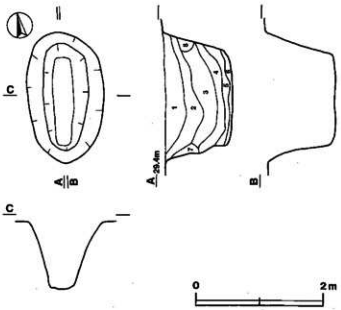
位置　調査区域の北部，Ｂ２ｅ７区。台地の突端部に位置する。

規模と形状　長径2.08m，短径1.21mの楕円形で，深さ128cmである。底面は平坦で，長方形を呈する。南・北壁はほぼ垂直に立ち上がり，北壁は底面から40cm，南壁は底面から60cmの高さより上が外傾する。東・西壁は外傾して立ち上がる。

長径方向　Ｎ－11°－Ｅ

覆土　８層からなり，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子極微量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子極微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化物少量，ローム小ブロック微量，暗褐色・黄白色パミス粒子極微量
4　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック極微量
5　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック極微量



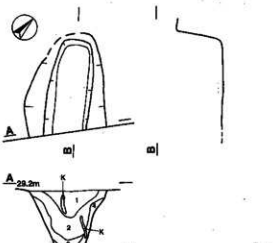
第67図　第51号土坑実測図

6　暗　褐　色　ローム粒子少量，KP中ブロック・小ブロック・粒子極微量
7　にぶい黄褐色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック微量
8　明 黄 褐 色　ローム中ブロック・粒子極多量，ローム大ブロック微量

所見　本跡は，形状から陥し穴と考えられる。時期は，遺物が出土していないため不明である。

第57号土坑（第68図）

位置　調査区域の南部，C２b9 区。台地の突端部に位置する。



第68図　第57号土坑実測図

規模と形状　長軸（1.59)m，短軸1.26m で，南東部が調査区域外のため正確な平面形は不明であるが，長楕円形と推定される。深さ75cmである。底面は平坦で，長方形を呈する。南・北壁は垂直に，東・西壁は外傾して立ち上がる。

長軸方向　N－34°－W

覆土　４層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　ローム粒子極微量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　暗　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量，ローム中ブロック極微量

所見　本跡は，形状から陥し穴と考えられる。時期は，遺物が出土していないため不明である。

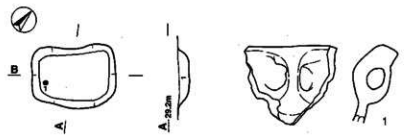
第60号土坑（第69図）

位置　調査区域の南部，C２b8 区。

規模と形状　長軸1.30m，短軸0.94m の長方形で，深さ20cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

長軸方向　N－46°－W

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。



第69図　第60号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム中・小ブロック極微量，粘性弱

遺物　土師質土器片１点が出土している。第69図１の内耳土器の耳部は，南部の南壁寄りの覆土下層から出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。時期は，出土土器から中世と考えられる。

第60号土坑出土遺物観察表

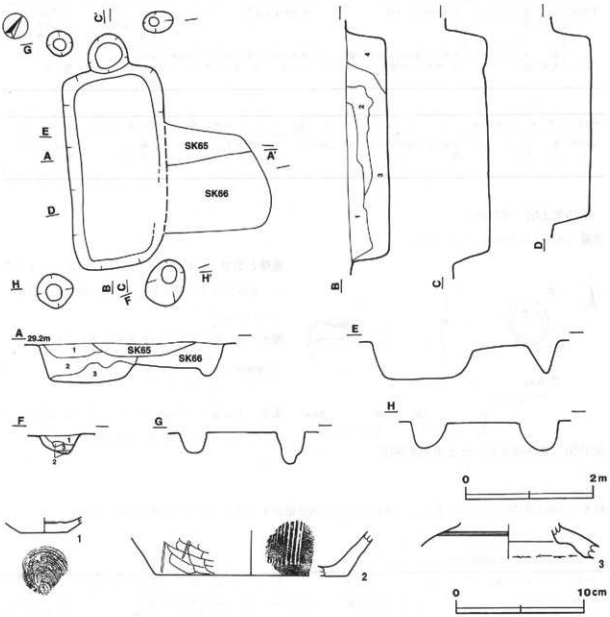
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	内耳土器 土師質土器	B（6.2）	口縁部の破片。内耳1か所残存。耳貼り付け部の外面はやや外傾に膨らむ。縁部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。耳貼り付け部ナデ。耳部縦位のナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P81 5% PL31 外面にススが付着 南部南壁寄り 覆土下層

第64号土坑（第70図）

位置　調査区域の南部，C 2 b7 区。

重複関係　第65号土坑に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。また第66号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と形状　長軸3.65m，短軸1.57m の不整長方形で，深さ60cmである。底面はほぼ平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。各コーナー部の16～50cm外側に，長径44～74cm，短径34～58cmの円形及び楕円形で，深さ



第70図　第64号土坑・出土遺物実測図

32～52cmのピットが確認されている。

長軸方向　N－46°－W

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム中・小ブロック極微量，粘性弱

遺物　土師質土器片24点が出土している。第70図１の土師質土器小皿，２の瓦質土器擂鉢，３の陶器瓶子は覆土中から出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。各コーナー部の外側に確認されているピットは，柱穴の跡とすれば，上屋をもつ土坑の可能性も考えられる。時期は，出土土器から13世紀代と考えられる。

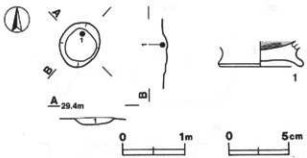
第64号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第70図 1	小　皿 土師質土器	B（1.2） C　3.8	底部の破片。平底。	底部回転糸切り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P82 20% 内・外面にススが付着，覆土中
2	擂　鉢 瓦質土器	B（3.5） C［15.0］	底部から体部にかけての破片。平底。体部は，外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ。内面横ナデ後，５条１単位の擂り目。	砂粒 褐灰色 普通	P83 5% 覆土中

図版番号	器　種	計測値(cm)	手　法　の　特　徴	色調・釉薬	産地・年代	備　考
第70図 3	瓶　子 陶　器	B（1.8）	体部上位肩部の破片。４条の沈線が巡る。外面施釉。	灰オリーブ色 灰釉	古瀬戸 13世紀代	P84 5% PL31 覆土中

第75号土坑（第71図）

位置　調査区域の南部，Ｂ２ｊ7区。



第71図　第75号土坑・出土遺物実測図

規模と形状　径約0.60mの円形で，深さ５cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　ローム小ブロック・粒子極微量

遺物　土師器片３点が出土している。第71図１の土師器高台付坏は，北壁寄りの覆土下層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から９世紀後半から10世紀前半と考えられる。性格は不明である。

第75号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第71図 1	高台付坏 土　師　器	D　6.6 E（1.5）	高台から底部にかけての破片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部内面ヘラ磨き。底部回転糸切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・スコリア 灰黄褐色 普通	P85 50% PL31 北壁寄り覆土下層

第87号土坑（第72図）

位置　調査区域の南部，Ｂ２ｊ6区。

重複関係　第86号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。また，第85号土坑とは重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　長軸1.43m，短軸1.31mの方形で，深さ37cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。

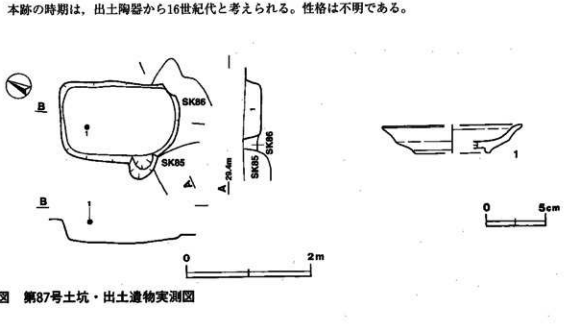
長軸方向　Ｎ－21°－Ｗ

覆土　２層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量，粘性・締まり強

遺物　陶器１点が出土している。第72図１の陶器灰釉丸皿は，中央部の北壁寄りの覆土上層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土陶器から16世紀代と考えられる。性格は不明である。



第72図　第87号土坑・出土遺物実測図

第87号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	手法の特徴	色調・釉薬	産地・年代	備考
第72図 1	灰釉丸皿 陶器	A [10.9] B 2.2 D [6.0] E 0.3	底部から口縁部にかけての破片。削り出し高台。高台～口縁部内・外面施釉。	明オリーブ灰色 灰釉	瀬戸・美濃系	P95 40% PL31 中央部北壁寄り 覆土上層

第89号土坑（第73図）

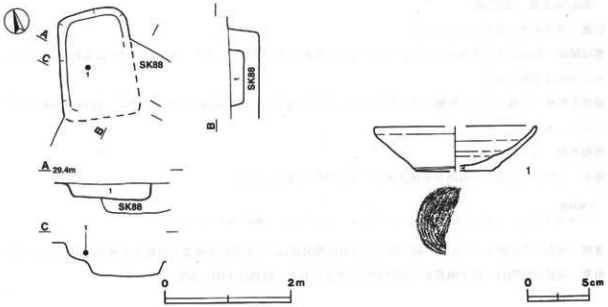
位置　調査区域の南部，Ｂ２ｊ5区。

重複関係　第88号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と形状　中央部から南部にかけて，第88号土坑と重複しているため，正確な規模と平面形は不明であるが，長軸（1.52）m，短軸（1.10）mで長方形と推定される。深さ25cmである。底面は平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。

長軸方向　Ｎ－８°－Ｅ

覆土　単一層である。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。



第73図　第89号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量，ローム中ブロック微量，粘性・締まり弱

遺物　土師質土器片5点が出土している。第73図1の土師質土器小皿は，中央部の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，塚域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。

第89号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第73図 1	小　皿 土師質土器	A ［12.7］ B　3.5 C ［ 5.9］	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は，下端内面が肥厚し外傾する。口縁部はやや直立する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部外面横ナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P86 50% PL31 中央部覆土下層

第93号土坑（第74図）

位置　調査区域の南部，Ｂ２ｊ６区。

規模と形状　長軸2.61m，短軸2.16m の不整長方形で，深さ36cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。南東壁外側に，長径54cm，短径34cmの楕円形で，深さ52cmのピットが，南西壁の外側から，長径70cm，短径50cmで，南西壁を深さ10cm掘り込む形でスロープ状の掘り込みが確認されている。南部の中央付近から南西壁を掘り込むスロープ状の掘り込み部分にかけての確認面で，長径124cm，短径80cmの楕円形で，深さ18cmの範囲に，暗赤褐色の焼土を中央にしてその周りを赤灰色の粘土で囲む形の硬化面が確認された。

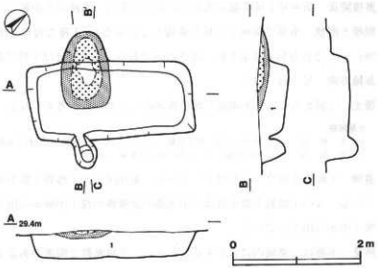
長軸方向　Ｎ－41°－Ｅ

覆土　単一層である。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量，ローム中ブロック微量

遺物　土師質土器細片12点が出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられるが，焼土と粘土による硬化面の性格は不明である。時期は，出土土器から中世と考えられる。



第74図　第93号土坑実測図

第94号土坑（第75図）

位置　調査区域の南部，B２i５区。

重複関係　第99号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と形状　長軸2.60m，短軸1.64m の不整長方形で，深さ30cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。南西壁の外側から，長径70cm，短径30cmで，南西壁を深さ12cm掘り込む形でスロープ状の掘り込みが確認されている。南部の中央付近から北西壁を掘り込むスロープ状の掘り込み部分にかけての確認面で，長径146cm，短径80cmの楕円形で，深さ16cmの範囲に，暗赤褐色の焼土を中央にしてその周りを赤灰色の粘土で囲む形の硬化面が確認された。硬化面と同位置の北部の壁寄りの底面にも，粘土が４cmの厚さで確認されている。

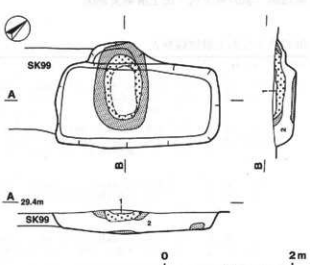
長軸方向　N－41°－E

覆土　２層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒 暗 褐 色　粘土粒子少量，ローム小ブロック・粒子微量，締まり強
2　赤　灰　色　焼土粒子少量，粘土粒子・炭化粒子微量

遺物　土師質土器細片３点が出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられるが，焼土と粘土による硬化面の性格は不明である。時期は，出土土器から中世と考えられる。



第75図　第94号土坑実測図

第97号土坑（第76図）

位置　調査区域の南部，B２j６区。

重複関係　第96号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と形状　南部で第96号土坑と重複しているため，正確な規模と平面形は不明であるが，長軸［1.68］m，短軸1.19mで長方形と推定され，深さ33cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。

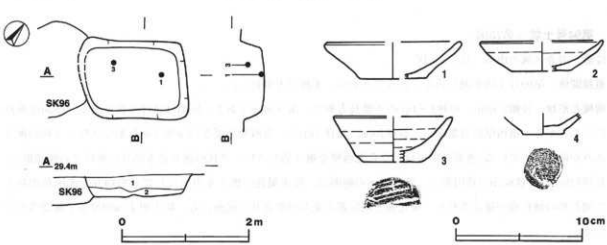
長軸方向　N－59°－E

覆土　2層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量，ローム中ブロック微量，炭化粒子極微量，粘性強
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　土師質土器片5点が出土している。第76図1の土師質土器小皿は，北部の東壁側の覆土下層から出土している。3の土師質土器小皿は，中央部の北壁側の覆土中層から出土している。2・4の土師質土器小皿は，覆土中から出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。



第76図　第97号土坑・出土遺物実測図

第97号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	小皿 土師質土器	A［10.4］ B　2.9 C［5.0］	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部下端ナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P87 20% 北部東壁側 覆土下層
2	小皿 土師質土器	A［9.6］ B　2.3 C［4.6］	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は，外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに直立する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部外面横ナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P88 40% PL31 覆土中
3	小皿 土師質土器	A［9.1］ B　3.5 C［4.6］	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は肥厚で体部は外傾して立ち上がる。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。体部下端ナデ。底部外面簾状圧痕。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P89 40% 中央部北壁側 覆土中層
4	小皿 土師質土器	B（1.7） C　3.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は，外傾して立ち上がる。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ後，外面横ナデ，内面擬位のナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・石英・雲母 明褐色 普通	P90 30% 覆土中

第117号土坑（第77図）

位置　調査区域の南部，C2c7区。

重複関係　第118号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と形状　北部で第118号土坑と重複しているため，正確な規模と平面形は不明であるが，長軸[1.50]m，短軸1.47mで長方形と推定され，深さ60cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。

長軸方向　N－45°－W

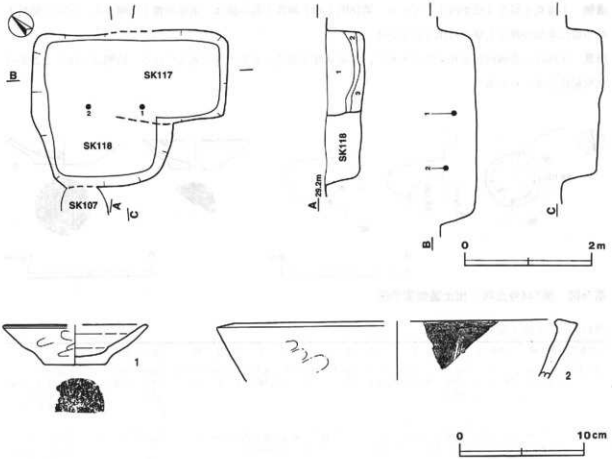
覆土　3層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム小ブロック中量，黒色粒子少量，ローム中ブロック・ローム粒子・炭化物微量，締まり弱
2　黒　　色　黒色粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・炭化物微量
3　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒色粒子少量，焼土粒子・粘土小ブロック微量，締まり弱

遺物　土師質土器片5点が出土している。第77図1の土師質土器小皿は，中央部の東壁側の覆土中層から出土している。2の土師質土器擂鉢は，北部の覆土上層から出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。



第77図　第117号土坑・出土遺物実測図

第117号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第77図 1	小　皿 土師質土器	A [11.4] B　3.1 C [4.8]	底部から口縁部にかけての破片。底部はやや突出している。体部は大きく外傾して口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P⑬ 50% PL31 中央部東壁側 覆土中層

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第77図 2	擂　鉢 土師質土器	A [25.6] B (4.6)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は外傾する。口縁端部内面は内側にやや突出気味である。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面縦位のナデ。内面に擂り目。外面に指頭圧痕を残す。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P94 5% 北部覆土上層

第144号土坑（第78図）

位置　調査区域の南部，B 2 i 2 区。

重複関係　第100号土坑に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

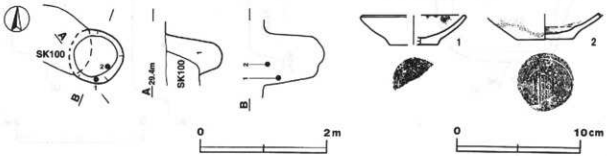
規模と形状　北部で第100号土坑と重複しているため，正確な規模と平面形は不明であるが，径約0.90m で円形と推定され，深さ97cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。

覆土　単一層である。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　ローム中ブロック・粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　土師質土器片３点が出土している。第78図１の土師質土器小皿は，南部の覆土上層から，２の土師質土器小皿は東部の覆土上層から出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。



第78図　第144号土坑・出土遺物実測図

第144号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第78図 1	小　皿 土師質土器	A [8.2] B　2.0 C [4.5]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P96 30% 口縁部内・外面 タール付着 南部覆土上層
2	小　皿 土師質土器	B (2.0) C　4.5	底部から体部中位にかけての破片。体部は大きく開く。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P97 50% PL31 体部内・外面 タール付着 東部覆土上層

第152号土坑（第79図）

位置　調査区域の南部，C 2 d 5 区。

重複関係　第151号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。また，第５号住居跡に掘り込まれており，本跡の方が古い。さらに，第150・183号土坑，第18号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　北部で第151号土坑と重複しているため，正確な規模と平面形は不明であるが，長軸（1.46）m，短軸0.95mで長方形と推定され，深さ17cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

長軸方向　N－46°－E

覆土　2層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

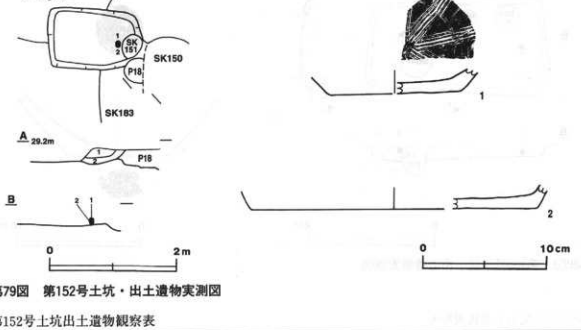
土層解説

1　黒　褐　色　黒色粒子中量，ローム中・小ブロック少量，ローム粒子極微量，粘性弱

2　黒　褐　色　黒色粒子中量，ローム中・小ブロック少量，ローム粒子・炭化物微量，粘性弱

遺物　土師質土器片5点が出土している。第79図1の瓦質土器擂鉢，2の土師質土器鉢は，南東コーナー部の東壁側の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。



第79図　第152号土坑・出土遺物実測図

第152号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第79図 1	擂　鉢 瓦質土器	B（1.8） C［10.4］	底部から体部下端にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部～底部内・外面ナデ。底部から体部にかけて，内面に5条1単位の擂り目。	砂粒・スコリア 黄灰色 普通	P98　5％ 南東コーナー部 東壁側覆土下層
2	鉢 土師質土器	B（1.8） C［22.6］	底部から体部下端にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面，底部内面ナデ。底部外面ヘラ削り後，ナデ。	長石・石英・スコリア 黒色 普通	P99　5％ 南東コーナー部 東壁側覆土下層

第155号土坑（第80図）

位置　調査区域の南部，C2e4区。

重複関係　第37号ピットに掘り込まれていることから，本跡の方が古い。また，第4・6号掘立柱建物跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　長軸2.82m，短軸1.52mの長方形で，深さ17cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は垂直に立

ち上がる。

長軸方向　N－51°－W

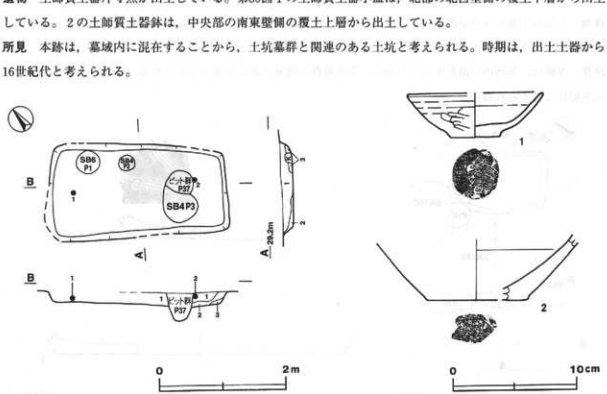
覆土　3層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1　極暗褐色　ローム小ブロック中量，黒色小ブロック少量，ローム粒子微量，粘性弱
2　黒　褐　色　ローム小ブロック・黒色小ブロック少量，ローム粒子微量
3　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒色小ブロック少量

遺物　土師質土器片4点が出土している。第80図1の土師質土器小皿は，北部の北西壁側の覆土下層から出土している。2の土師質土器鉢は，中央部の南東壁側の覆土上層から出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。



第80図　第155号土坑・出土遺物実測図

第155号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第80図 1	小　皿 土師質土器	A［10.5］ B　3.5 C　4.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部内・外面，体部内面ロクロナデ。体部外面ロクロナデ後，横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P100 60% PL31 北部北壁側 覆土下層
2	鉢 土師質土器	B（5.1） C［8.0］	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端内面から底部内面にかけて横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P101 5% 中央部南壁側 覆土上層

第162号土坑（第81図）

位置　調査区域の南部，C2f4区。台地の突端部に位置する。

重複関係　第6号掘立柱建物跡のP4に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

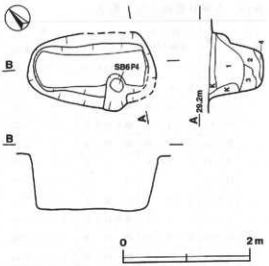
規模と形状　長径2.02m，短径［1.11］mの長楕円形で，深さ85cmである。底面は平坦で，長方形を呈する。南東・北西壁は垂直に立ち上がり，北西壁は底面から50cmの高さより上が外傾する。南西壁は外傾して立ち上がる。北東壁は垂直に立ち上がり，底面から50cmの高さより上が内彎して立ち上がる。

長径方向　N－44°－W

覆土　4層からなる。中層の第2・3層は不規則な堆積状況から人為堆積と考えられ，他はレンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量，粘性強
4　黒　褐　色　ローム粒子少量，粘性・締まり強

所見　本跡は，形状から陥し穴と考えられる。時期は，遺物が出土していないため不明である。



第81図　第162号土坑実測図

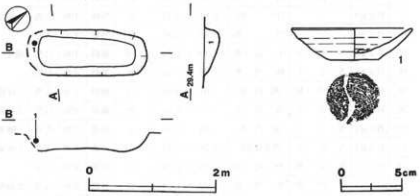
第204号土坑（第82図）

位置　調査区域の南部C1a0区。

規模と形状　南部が撹乱されているため，正確な規模と平面形は不明であるが，長軸[1.88]m，短軸0.80mの長方形と推定され，深さ27cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

長軸方向　N－38°－E

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。



第82図　第204号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム大・中ブロック極微量

遺物　土師質土器片2点，陶器片2点が出土している。第82図1の土師質土器小皿は，南部の覆土中層から出土している。

所見　本跡は，墓域内に混在することから，土坑墓群と関連のある土坑と考えられる。時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。

第204号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	小皿 土師質土器	A［9.3］ B 2.5 C 3.9	体部から口縁部にかけて一部欠損。体部は大きく開く。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母にぶい褐色 普通	P102 70% PL31 南部覆土中層

表10　古墓B遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)，その他
1	B 2 c9	N－52°－W	不整楕円形・不整長方形	1.90×1.60, 2.94×1.56	158～174	垂直	平坦	人為	土師質土器(小皿，内耳土器)	第1号地下式壙（墓坑，主墓）
2	B 2 b5	N－58°－W	楕円形	1.41 × 1.02	95	外傾	平坦	自然		本跡→SD 2
3	B 2 b9	N－36°－W	隅丸長方形	0.97 × 0.81	30	外傾	平坦	自然	土師器片（坏，甕）	SD 4と重複(新旧不明)
4	B 3 f3	N－71°－E	隅丸長方形	2.57 × 2.25	9	緩斜	平坦	自然	土師器片（坏，甕）	本跡→SD 5
5	B 2 b5	N－46°－W	楕円形	1.11 × 0.70	15	緩斜	凹状	自然		SD 2と重複(新旧不明)
6	B 2 d0	N－34°－W	不定形	2.50 × 1.20	48	緩斜	平坦	自然	土師質土器片(小皿，内耳土器)	SD 4→本跡
7	B 3 h1	—	円形	0.85 × 0.78	18	外傾	平坦	自然	土師質土器片(小皿，内耳土器)	
8	B 2 j0	N－52°－E	不定形	1.22 × 0.67	6	緩斜	平坦	自然	土師器片（甕）	
9	B 3 i1	N－52°－W	隅丸長方形	2.25 × 1.40	26	外傾	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	
10	B 2 h0	N－54°－W	楕円形	1.13 × 0.86	10	緩斜	平坦	人為	土師質土器片（小皿）	SI 1→本跡
11	B 3 f2	N－27°－E	楕円形	1.12 × 0.94	42	外傾	平坦	人為		SK12と重複(新旧不明)
12	B 3 f2	N－65°－W	[楕円形]	(1.04 × 0.80)	24	外傾	平坦	人為		SK11，13と重複（新旧不明）
13	B 3 f2	N－3°－E	楕円形	0.95 × 0.67	17	外傾	平坦	人為		SK12と重複(新旧不明)
14	B 3 f1	N－48°－W	楕円形	0.96 × 0.73	13	緩斜	平坦	人為		
15	B 2 g0	—	[円形]	(0.84) × 0.77	25	外傾	平坦	人為	土師器片（甕）	SK16と重複(新旧不明)
16	B 2 g0	—	円形	0.86 × 0.86	33	外傾	平坦	人為		SK15と重複(新旧不明)
17	B 2 g3	N－63°－W	不定形	(2.40) × 1.74	19	緩斜	平坦	自然	縄文土器片（深鉢）	本跡→SI 3
18	B 3 f1	N－2°－E	楕円形	2.28 × 1.23	86	外傾	平坦	自然		SD 4と重複(新旧不明)
19	B 3 g4	N－55°－W	[楕円形]	1.04 ×[0.90]	24	緩斜	平坦	人為	土師質土器片(小皿，内耳土器)	
20	B 3 h3	N－30°－E	楕円形	1.70 × 0.82	19	緩斜	平坦	自然	土師質土器片（内耳土器）	
21	B 3 g4	N－4°－E	[楕円形]	(1.86) × 1.37	30	外傾	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	本跡→SK22・23，SK24と重複（新旧不明）
22	B 3 g3	N－20°－W	[隅丸長方形]	1.18 ×(0.84)	30	外傾	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	SK21→本跡
23	B 3 h4	N－30°－W	不定形	(1.70 × 1.28)	21	外傾	平坦	人為		SK21・24→本跡，SK25と重複（新旧不明）
24	B 3 h4	N－42°－W	楕円形	1.22 × 1.04	32	外傾	平坦	人為	土師器片（坏，甕）	SK21・23と重複（新旧不明）
25	B 3 h4	—	円形	0.80 × 0.77	42	外傾	平坦	自然	土師質土器片（内耳土器）	SK 26・SK 23と重複（新旧不明）
26	B 3 h4	N－31°－W	隅丸長方形	1.81 × 1.06	34	緩斜	平坦	自然	土師質土器片(小皿，内耳土器)	SP 1→本跡，SK25と重複（新旧不明）
27	B 2 f0	N－50°－W	長方形	2.28 × 1.03	14	緩斜	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	SB 1と重複（新旧不明）
28	B 2 f9	N－51°－E	楕円形	0.79 × 0.71	16	垂直	平坦	人為	土師器（甕）	SB 1→本跡
29	B 3 h3	N－30°－E	不定形	1.35 × 0.81	12～24	緩斜	平坦	自然		
30	B 2 f9	—	円形	0.63 × 0.63	10	緩斜	平坦	自然		
31	B 2 f9	N－4°－W	不整楕円形	0.93 × 0.84	28	緩斜	平坦	人為		
32	B 2 f9	N－18°－W	不整楕円形	1.08 × 0.73	36	外傾	平坦	人為		SK34→本跡
33	B 2 e8	N－46°－W	[長方形]	[2.11 × 1.01]	33	外傾	平坦	人為	土師質土器片（小皿）	SK34→本跡
34	B 2 f9	N－52°－W	不定形	[2.75] × 1.01	14	外傾	平坦	人為		本跡→SK32・33
35	B 2 g9	N－47°－W	長方形	1.24 × 0.97	22	外傾	平坦	人為	土師器（甕）	
36	B 2 e0	N－55°－W	隅丸長方形	1.56 × 1.09	29	緩斜	平坦	人為		
37	B 2 c9	N－57°－E	楕円形	0.97 × 0.81	22	外傾	平坦	人為		
38	B 2 d8	—	円形	1.01 × 0.95	61	垂直	平坦	人為	縄文土器片（深鉢）	
39	B 2 d8	N－82°－E	楕円形	1.81 × 1.24	51	外傾	平坦	自然	土師器片（坏，甕）	
40	B 2 e7	N－62°－E	楕円形	1.17 × 1.02	12	緩斜	凹状	自然	土師器片（甕）	
41	B 2 d7	N－62°－W	[楕円形]	0.84 ×(0.59)	13	緩斜	平坦	人為		本跡→SK42
42	B 2 d7	N－39°－E	長方形	2.75 × 1.50	47	外傾	平坦	自然	土師器片（甕）	SK41→本跡
43	B 2 d8	N－47°－E	方形	1.11 × 1.09	25	外傾	平坦	自然		
44	B 2 d7	—	円形	0.90 × 0.89	20	緩斜	平坦	自然		
45	B 2 d7	N－47°－E	楕円形	0.95 × 0.86	18	緩斜	平坦	人為		

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新田関係(古一般),その他
46	B 2 d7	N−39°−E	長方形	1.54 × 0.99	58	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
47	B 2 e6	N−44°−E	長方形	1.92 × 1.15	28	緩斜	平坦	人為		
48	B 2 c7	N−39°−E	長方形	1.87 × 1.11	27	緩斜	平坦	人為	土師器片(甕)	
49	B 2 c6	N−38°−E	長方形	1.40 × 0.97	43	外傾	平坦	人為		
50	B 2 d5	N−42°−E	楕円形	1.24 × 0.98	32	外傾	平坦	人為		
51	B 2 e7	N−11°−E	楕円形	2.08 × 1.21	128	外傾	平坦	自然		
53	B 2 h8	N−10°−E	楕円形	0.53 × 0.47	36	緩斜	皿状	人為		
54	B 2 i8	N−23°−W	楕円形	0.79 × 0.71	18	外傾	平坦	自然		
55	B 2 h8	N−42°−W	楕円形	0.79 × 0.65	51	外傾	皿状	人為		
56	B 2 i7	N−46°−E	[長方形]	2.16 ×[1.18]	14	緩斜	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
57	C 2 b9	N−34°−W	[楕円形]	(1.59)× 1.26	75	外傾	平坦	自然		
58	C 2 a0	N−44°−W	[楕円形]	0.94 ×(0.79)	16	緩斜	平坦	自然	土師質土器片(小皿)	
59	C 2 b8	—	円形	0.90 × 0.88	24	外傾	平坦	自然		SK77と重複(新田不明)
60	C 2 b8	N−46°−E	長方形	1.30 × 0.94	20	緩斜	平坦	自然	土師質土器(内耳土器)	
61	C 2 a8	N−43°−E	長方形	2.01 × 1.14	32	垂直	平坦	人為	陶器片	
62	C 2 b7	N−49°−E	長方形	1.85 × 1.35	39	外傾	平坦	人為		
63	C 2 c8	N−41°−E	[長方形]	1.90 ×(0.59)	33	緩斜	平坦	人為	土師質土器片(内耳土器),陶器片	
64	C 2 b7	N−37°−W	不整長方形	3.65 × 1.57	60	外傾	平坦	自然	土師質土器(小皿)・瓦質土器(鍋蓋),陶器片	SK66→本跡→SK65
65	C 2 b7	N−50°−E	不定形	[1.36 × 0.76]	19	外傾	平坦	人為		SK65→SK64→本跡
66	C 2 b7	N−51°−E	[長方形]	[2.39]× 1.53	63	垂直	平坦	人為	土師質土器片(内耳土器)	本跡→SK64→SK65
67	C 2 a7	N−40°−W	長方形	3.00 × 1.49	48	垂直	平坦	人為	土師質土器片(小皿・内耳土器),陶器片,古銭(開元通寶)	
68	C 2 b8	N−59°−E	[長方形]	(0.78)× 0.94	28	緩斜	平坦	人為	土師器(甕)	SK69→本跡,SK77と重複(新田4-9号)
69	C 2 b8	N−45°−W	長方形	1.98 × 0.92	36	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	本跡→SK68
70	C 2 c8	N−71°−W	不整楕円形	0.93 × 0.69	60	外傾	平坦	自然	土師質土器片(小皿)	
71	C 2 b6	N−48°−E	長方形	1.49 × 1.26	48	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
72	C 2 a6	N−34°−E	楕円形	0.57 × 0.50	65	外傾	凹状	自然	陶器片	
73	B 2 j7	N−29°−E	不整長方形	2.56 × 1.29	78	垂直	平坦	人為	土師質土器片(内耳土器)	
74	B 2 j6	N−39°−E	隅丸長方形	1.88 × 0.89	24	緩斜	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	
75	B 2 j7	N−44°−E	楕円形	0.68 × 0.60	5	緩斜	平坦	自然	土師器(高台付坏)	
76	C 2 b8	N−55°−E	楕円形	0.57 × 0.41	61	外傾	平坦	自然	土師器片(坏,甕)	本跡→SK77
77	C 2 b8	N−39°−W	[楕円形]	0.48 ×(0.38)	24	緩斜	皿状	自然		SK76→本跡,SK59・64と重複(新田不明)
78	C 2 c8	N−43°−E	楕円形	0.90 × 0.55	25	緩斜	皿状	人為		
80	C 2 c7	N−50°−W	不定形	(3.03 × 3.00)	24	緩斜	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	本跡→SK80,SK89・211・212と重複(新田不明)
81	C 2 b6	N−45°−E	楕円形	1.26 × 0.76	18	緩斜	平坦	人為		
82	B 2 j5	N−48°−W	長方形	2.11 × 1.12	24	緩斜	平坦	人為	土師質土器片(内耳土器)	
83	C 2 a5	N−35°−W	楕円形	0.54 × 0.43	64	外傾	平坦	人為	土師質土器片(内耳土器)	
85	C 2 a6	N−46°−E	長方形	2.61 × 1.13	45	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	SK86→本跡,SK87と重複(新田不明)
86	B 2 j6	N−46°−E	[長方形]	(2.18 × 1.08)	23	外傾	平坦	人為	土師質土器片(内耳土器)	本跡→SK85・87
87	B 2 j6	N−21°−W	不整長方形	1.43 × 1.31	37	外傾	平坦	人為	陶器(灰釉丸皿)	SK86→本跡,SK85と重複(新田不明)
88	C 2 a5	N−45°−E	長方形	2.36 × 1.24	46	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿),陶器片	本跡→SK89
89	B 2 j5	N−8°−E	[長方形]	(1.52 × 1.10)	25	外傾	平坦	人為	土師質土器(小皿)	SK88→本跡
90	B 2 j4	N−32°−E	長方形	1.94 × 1.39	33	外傾	平坦	人為	土師器片(甕)	
91	B 2 j5	—	円形	1.06 × 1.04	11	緩斜	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
92	B 2 j4	N−42°−E	隅丸長方形	2.02 × 1.24	62	外傾	平坦	自然		
93	B 2 j6	N−41°−E	不整長方形	2.61 × 2.16	36	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
94	B 2 i5	N−41°−E	不整長方形	2.60 × 1.64	30	外傾	平坦	人為	土師質土器片(内耳土器)	SK99→本跡

土坑番号	位量	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新),その他
95	C 2 a6	N－42°－E	楕円形	0.64 × 0.56	46	外傾	平坦	自然	土師質土器片(内耳土器)	
96	B 2 j6	N－46°－E	[不整長方形]	(1.70)× 1.37	44	外傾	平坦	自然	土師質土器片(小皿,内耳土器)	本跡→SK97
97	B 2 j6	N－59°－E	[長方形]	[1.68]× 1.19	33	外傾	平坦	人為	土師質土器(小皿)	SK96→本跡
98	C 2 c7	N－28°－W	不整楕円形	1.63 × 1.28	52	外傾	平坦	自然		SK30→本跡, SK209上層版(新旧不明)
99	B 2 i5	N－39°－E	長方形	2.51 × 1.30	22	外傾	平坦	人為	土師器片(甕)	本跡→SK94
100	B 2 h2	N－49°－W	[隅丸長方形]	[1.25]× 0.84	50	外傾	平坦	人為	土師質土器片(内耳土器)	SK144→本跡, SK145上層版(新旧不明)
101	B 2 h2	N－44°－E	[隅丸長方形]	[1.44]× 0.82	20	緩斜	平坦	自然		SK138と重複(新旧不明)
102	B 2 f3	N－62°－W	隅丸長方形	1.57 × 0.81	12	緩斜	平坦	自然	土師質土器片(内耳土器)	SK103→本跡
103	B 2 f3	N－6°－E	楕円形	1.31 × 0.99	32	緩斜	平坦	自然		本跡→SK102, SI 5と重複(新旧不明)
104	C 2 c6	N－62°－W	長方形	1.39 × 1.06	42	外傾	平坦	自然	土師質土器片(小皿,内耳土器)	SK102と重複(新旧不明)
105	C 2 d6	N－42°－E	[長方形]	1.08 ×(0.63)	16	緩斜	平坦	自然	土師質土器片(小皿,内耳土器)	SK106・175と重複(新旧不明)
106	C 2 d6	N－46°－W	[不整楕円形]	1.74 ×[1.61]	48	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	SK105と重複(新旧不明)
107	C 2 c6	—	円形	0.83 × 0.77	36	外傾	平坦	自然	土師器(甕)	SK118と重複(新旧不明)
108	C 2 c5	N－42°－E	[不整長方形]	1.52 ×[1.50]	23	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	SK109→本跡
109	C 2 c5	N－52°－E	[方形]	0.89 ×[0.83]	22	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	本跡→SK108・110
110	C 2 b5	N－50°－W	[長方形]	[1.01]× 0.36	26	緩斜	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	SK109→本跡
111	C 2 a3	N－7°－E	不定形	0.98 × 0.73	21	緩斜	平坦	自然		SI 4→本跡
112	C 2 d7	N－48°－W	長方形	1.37 × 0.78	48	外傾	平坦	自然	土師質土器片(小皿)	
113	C 2 d6	N－54°－W	[長方形]	(1.10)× 1.05	44	外傾	平坦	人為		SK125と重複(新旧不明)
114	C 2 c5	N－42°－W	[長方形]	0.90 ×[0.67]	31	緩斜	平坦	自然	土師質土器片(小皿)	SK115→本跡
115	C 2 c5	N－40°－W	[長方形]	1.46 ×[0.90]	36	緩斜	平坦	自然	土師質土器片(小皿)	本跡→SK114
116	C 2 c5	N－28°－E	長方形	1.57 × 0.91	46	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	SK167・181と重複(新旧不明)
117	C 2 c7	N－45°－W	[方形]	[1.50]× 1.47	60	外傾	平坦	人為	土師質土器(小皿,擂鉢)	SK118→本跡
118	C 2 c6	N－43°－E	[長方形]	2.38 × 2.09	60	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器),陶器片	本跡→SK117, SK107上層版(新旧不明)
119	C 2 d6	N－50°－E	[長方形]	1.20 ×[1.00]	42	垂直	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	
120	C 2 d6	N－49°－E	[長方形]	(0.92)× 0.88	20	外傾	平坦	人為		
121	C 2 d6	N－40°－E	長方形	1.36 × 0.92	32	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
122	C 2 d6	N－45°－E	[長方形]	1.84 ×[1.12]	24	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
123	C 2 d6	N－46°－E	[楕円形]	(1.32 × 0.96)	16	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	
124	C 2 d5	N－47°－E	不定形	(0.79 × 0.66)	31	外傾	平坦	自然		SK149→本跡, SK126・147・180と重複(新旧不明)
125	C 2 d6	N－40°－W	隅丸長方形	1.08 × 0.71	33	外傾	平坦	自然		SK113と重複(新旧不明)
126	C 2 c4	N－74°－E	不整楕円形	0.88 × 0.60	40	外傾	平坦	自然	土師質土器片(小皿)	
127	C 2 c4	N－45°－E	不定形	(0.84)× 0.48	28	外傾	平坦	自然		
128	C 2 b4	N－40°－E	[楕円形]	(1.00)× 0.80	40	外傾	平坦	自然	土師質土器片(内耳土器),磁器片	
129	C 2 b4	N－35°－W	長方形	2.16 × 1.48	60	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	
130	C 2 b4	N－40°－E	不整長方形	1.44 × 1.00	44	緩斜	平坦	自然	土師質土器片(小皿),陶器片,炭化物	
131	C 2 a2	N－40°－E	[長方形]	[2.60]× 1.00	32	垂直	平坦	人為	磁器片	
132	C 2 a3	N－25°－E	不定形	[0.84 × 0.20]	20	外傾	平坦	人為		
133	C 2 a2	N－44°－E	長方形	2.00 × 1.00	24	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
134	C 2 a2	N－43°－E	[長方形]	[1.16]× 1.24	16	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
135	C 2 a3	N－40°－E	長方形	1.08 × 0.71	33	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿)	
136	B 2 j3	N－54°－W	長方形	2.08 × 1.21	32	外傾	平坦	人為		
137	B 2 i2	N－44°－W	長方形	1.32 × 0.95	24	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器),磁器片	
138	B 2 h2	N－68°－E	[長方形]	[0.98]× 0.89	10	緩斜	平坦	人為		SK139→本跡, SK101上層版(新旧不明)
139	B 2 h2	N－54°－E	不定形	1.17 ×(1.00)	12	緩斜	平坦	自然		本跡→SK138
141	B 2 j3	N－45°－E	長方形	2.21 × 1.07	21	緩斜	平坦	人為		

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新),その他
142	B 2 i 3	N－62°－E	楕円形	1.22 × 1.10	40	緩斜	平坦	自然	縄文土器片（深鉢）	
143	C 2 a 2	N－40°－W	[隅丸長方形]	[2.28] × 1.08	24	外傾	平坦	人為	土師質土器片（甕）	
144	B 2 i 2	―	円形	0.91 ×[0.87]	97	垂直	皿状	人為	土師質土器（小皿）	本跡→SK100
145	B 2 h 2	N－16°－E	楕円形	1.01 × 0.88	110	垂直	平坦	自然	土師質土器片（小皿）	SK100と重複(新旧不明)
146	C 2 d 5	N－46°－W	不定形	1.35 × 0.83	15	緩斜	平坦	自然	土師質土器片（小皿）	SK148→SK147→本跡
147	C 2 d 5	N－83°－W	[長方形]	1.08 × 0.85	36	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿),古銭(元祐通寶)	SK148→本跡→SK146, SK315と重複(新旧不明)
148	C 2 d 5	N－90°－W	楕円形	0.92 × 0.64	32	緩斜	平坦	自然	土師質土器片（小皿）	本跡→SK147→SK146・148, SK284と重複（新旧不明）
149	C 2 d 5	N－5°－W	[隅丸長方形]	1.07 × 0.73	24	外傾	平坦	人為	土師質土器片（小皿）	SK124・147→本跡, SK180・218と重複
150	C 2 d 5	N－40°－W	[隅丸長方形]	1.16 ×(0.88)	36	外傾	平坦	人為	鉄製品（鎌か）	
151	C 2 d 5	N－47°－W	楕円形	0.36 × 0.28	20	外傾	平坦	自然		
152	C 2 d 5	N－16°－E	不整長方形	(1.48) × 1.00	44	緩斜	平坦	人為	土師質土器(陶鉢),瓦質土器(鍋鉢)	SK151→本 跡→SK5, SK153・163・P182と重複
153	C 2 e 5	N－43°－W	隅丸長方形	1.25 × 0.88	33	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	P34と重複(新旧不明)
155	C 2 e 4	N－51°－W	長方形	2.82 × 1.52	17	外傾	平坦	人為	土師質土器（鉢）	本 跡→P37・SB4・11と重複(新旧不明)
156	C 2 e 5	N－45°－E	[長方形]	1.86 ×(0.76)	68	外傾	平坦	人為	土師器片（坏）	SK152→本 跡, P34・35と重複（新旧不明）
157	C 2 f 5	N－45°－E	[長方形]	(1.19 × 0.73)	18	外傾	平坦	人為	土師器片(坏,甕),須恵器片(坏)	本跡→SK156, P29・27・28・30・31と重複（新旧不明）
158	C 2 f 3	N－80°－E	不整楕円形	0.94 × 0.88	26	緩斜	平坦	自然	土師器片（甕）	SI 7→本跡, SK178と重複（新旧不明）
159	C 2 d 3	N－38°－E	[長方形]	1.89 ×(1.18)	28	外傾	平坦	人為		本 跡→SK161, SK162・P221と重複（新旧不明）
160	C 2 d 6	―	円形	0.69 × 0.63	58	外傾	平坦	自然	土師質土器片（内耳土器）	SK112と重複(新旧不明)
161	C 2 d 3	N－38°－E	不整楕円形	1.55 × 0.83	23	緩斜	平坦	自然	土師器片（坏,甕）	SK159・179→本跡, SK162・P21・24と重複（新旧不明）
162	C 2 f 4	N－44°－W	[隅丸長方形]	2.02 ×[1.11]	85	垂直	平坦	人為		本跡→SB 6
163	C 2 e 3	N－43°－E	長方形	1.40 × 1.08	52	緩斜	平坦	人為	土師質土器片（小皿）	本跡→SK177
164	C 2 d 3	N－36°－W	長方形	1.49 × 0.97	43	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿,内耳土器)	
165	C 2 g 3	―	円形	0.72 × 0.68	40	外傾	平坦	人為		本跡→SK210
166	C 2 g 3	N－50°－W	[長方形]	1.48 ×(0.82)	21	外傾	平坦	人為		本跡→P34
167	C 2 d 5	―	円形	0.67 × 0.64	70	外傾	平坦	自然	土師質土器片（内耳土器）	SI 5・SK116と重複（新旧不明）
168	C 2 f 3	N－29°－W	不整楕円形	1.18 × 1.11	48	緩斜	平坦	自然	土師質土器片（小皿）	SI 7→本跡
169	C 2 b 4	N－55°－E	[楕円形]	0.84 ×(0.77)	15	緩斜	平坦	人為		SI 4→本跡
170	C 2 a 4	N－30°－W	[楕円形]	1.11 ×(0.56)	12	緩斜	平坦	自然		SI 4→本跡
171	C 2 b 3	N－30°－W	[長方形]	(1.20) × 0.84	36	外傾	平坦	人為		
172	C 2 c 4	N－40°－E	[隅丸長方形]	(2.92) × 1.04	36	外傾	平坦	人為	土師質土器片(小皿),陶器片	
173	B 2 h 1	―	[円形]	[1.10] × 1.05	52	垂直	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	
174	C 2 f 3	N－50°－E	楕円形	0.49 × 0.42	34	外傾	平坦	自然		SI 7→本跡
175	C 2 d 6	N－43°－E	[長方形]	0.97 ×(0.69)	20	緩斜	平坦	人為		SK165と重複(新旧不明)
176	C 2 f 3	N－38°－E	[長方形]	[1.19] × 0.95	17	緩斜	平坦	自然		P20→本跡, SK177と重複（新旧不明）
177	C 2 e 3	N－43°－E	隅丸長方形	1.92 × 1.72	31	緩斜	平坦	人為	土師器片（甕）	SK163→本跡→SK176, SK178と重複（新旧不明）
178	C 2 e 3	N－48°－W	[長方形]	1.02 × 0.72	18	緩斜	平坦	人為	土師質土器片（小皿）	SK177→本跡, SK158と重複（新旧不明）
179	C 2 d 3	N－38°－E	長方形	2.51 × 0.74	28	外傾	平坦	人為	土師質土器片（小皿）	本跡→SK161
180	C 2 d 5	N－35°－E	[長方形]	(0.75) × 0.60	19	緩斜	平坦	自然		SK124・149と重複（新旧不明）
181	C 2 c 5	N－40°－E	[長方形]	(1.13 × 0.34)	12	垂直	平坦	自然		SK116と重複(新旧不明)
182	C 2 d 3	N－53°－W	[長方形]	0.90 ×(0.63)	11	緩斜	平坦	自然		
183	C 2 d 5	N－32°－W	[長方形]	(1.40) × 1.20	22	緩斜	平坦	自然		
184	C 2 c 3	N－38°－W	楕円形	2.21 × 0.90	50	外傾	平坦	人為	土師器片（甕）	SK185・186と重複（新旧不明）
185	C 2 c 2	N－48°－E	[長方形]	2.01 × 1.09	41	緩斜	平坦	人為	土師器片（甕）	本跡→SK186, SK184・186と重複（新旧不明）
186	C 2 c 2	N－48°－E	[長方形]	1.39 ×[1.18]	53	緩斜	平坦	人為		SK185→本跡, SK184・186と重複（新旧不明）
187	C 2 c 2	N－53°－W	長方形	2.03 × 1.30	52	外傾	平坦	人為	土師器片（坏,甕）	SI 6→本跡, SK188・189・191と重複（新旧不明）
188	C 2 d 2	N－37°－E	[隅丸長方形]	2.04 ×[1.50]	46	垂直	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	SK189→本 跡, SX 2と重複（新旧不明）

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新),その他
189	C 2 d2	N－49°－W	[長方形]	[2.30 × 1.25]	23	緩斜	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	本跡→SK188, SI 2・SK 187と重複（新旧不明）
190	C 2 b2	N－39°－E	[長方形]	2.33 ×(0.86)	28	緩斜	平坦	人為	磁器片	SI 6→本跡
192	C 2 c6	—	[円形]	0.72 × 0.70	38	外傾	平坦	自然	土師器片（甕），須恵器片（甕）	SK104・107と重複（新旧不明）
193	C 2 c6	—	円形	0.56 × 0.48	41	外傾	平坦	自然	土師器片（甕）	
194	C 1 b0	N－44°－E	[長方形]	[2.40]×(1.27)	46	外傾	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	SI 6→SK 207→本跡→SX 2
195	C 2 c1	N－49°－W	[長方形]	0.96 ×(0.50)	48	外傾	平坦	人為	土師器片（坏，甕）	SI 6→本跡→SX 2, SK 187と重複（新旧不明）
196	C 2 c2	N－40°－W	[長方形]	(1.66 × 0.88)	29	緩斜	平坦	人為	土師器片（坏，甕）	SI 6・SK 185・186と重複（新旧不明）
197	C 2 d6	N－2°－E	不整楕円形	1.22 × 0.82	16	緩斜	平坦	自然	土師器片（甕）	
198	C 1 c0	N－40°－E	[長方形]	[2.30]× 1.86	96	外傾	平坦	人為	陶器片	第2号地下式壙(墓址)
199	C 2 d2	N－44°－E	長方形	1.28 ×[1.12]	17	緩斜	平坦	人為		
200	C 1 c9	N－42°－W	[長方形]	1.14 ×(0.80)	43	外傾	平坦	自然	土師器片（甕）	
201	C 1 b9	N－43°－E	[長方形]	(1.30)× 1.20	52	外傾	平坦	人為	土師質土器片（小皿）	
202	C 1 b0	N－46°－W	[長方形]	[2.06]× 1.11	32	緩斜	平坦	人為	土師質土器片（内耳土器）	本跡→SK203
203	C 1 b0	N－49°－W	[長方形]	1.82 ×[0.80]	20	緩斜	平坦	人為		SK202→本跡
204	C 1 a0	N－38°－E	[隅丸長方形]	[1.88]× 0.80	27	緩斜	平坦	自然	土師質土器（小皿），陶器片	
205	C 2 a1	N－45°－E	隅丸長方形	1.22 × 0.82	36	緩斜	平坦	人為	土師器片（甕），須恵器片（坏），鉄製品（刀子）	
206	C 2 a1	N－53°－W	楕円形	1.04 × 0.68	50	緩斜	平坦	人為	土師器片（坏）	
207	C 1 c0	N－42°－E	[長方形]	(1.02 × 0.42)	46	外傾	平坦	人為	土師器片（甕）	SI 6→本跡→SK 194→SX 2
208	C 2 d5	—	円形	0.54 × 0.50	49	外傾	平坦	自然		
209	C 2 d7	—	円形	0.67 × 0.64	49	外傾	皿状	自然		SK80・98と重複（新旧不明）
210	C 2 g3	N－49°－W	[長方形]	(0.60)× 0.55	16	緩斜	平坦	人為	須恵器片（坏）	SK165→本跡
211	C 2 c7	N－41°－W	楕円形	0.66 × 0.57	39	外傾	皿状	自然		SK63・80と重複（新旧不明）
212	C 2 c7	N－59°－E	楕円形	0.75 × 0.58	62	外傾	平坦	自然		SK80と重複（新旧不明）
213	B 3 i2	N－47°－E	[長方形]	0.82 ×(0.68)	76	垂直	平坦	自然		
214	B 2 h8	—	円形	0.62 × 0.59	20	緩斜	平坦	自然		
215	C 2 e5	N－45°－E	[不整楕円形]	(0.66)× 0.42	13	緩斜	平坦	自然		SK147・149と重複（新旧不明）

6　溝跡

今回の調査で，溝跡５条を確認した。以下，その特徴と出土遺物等について記載する。

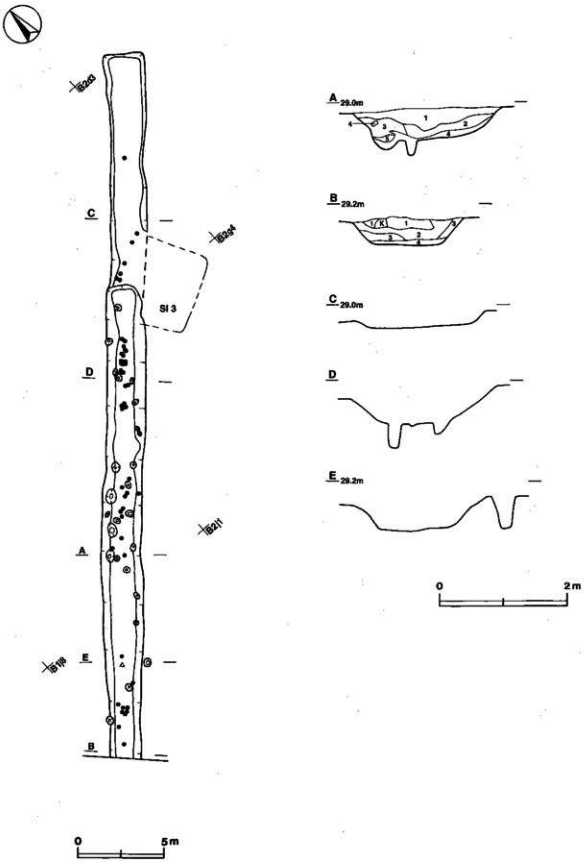
第１号溝跡（第83～87図）

位置　調査区域の北部・南部，Ｂ２ｃ４～Ｃ１ａ７区。

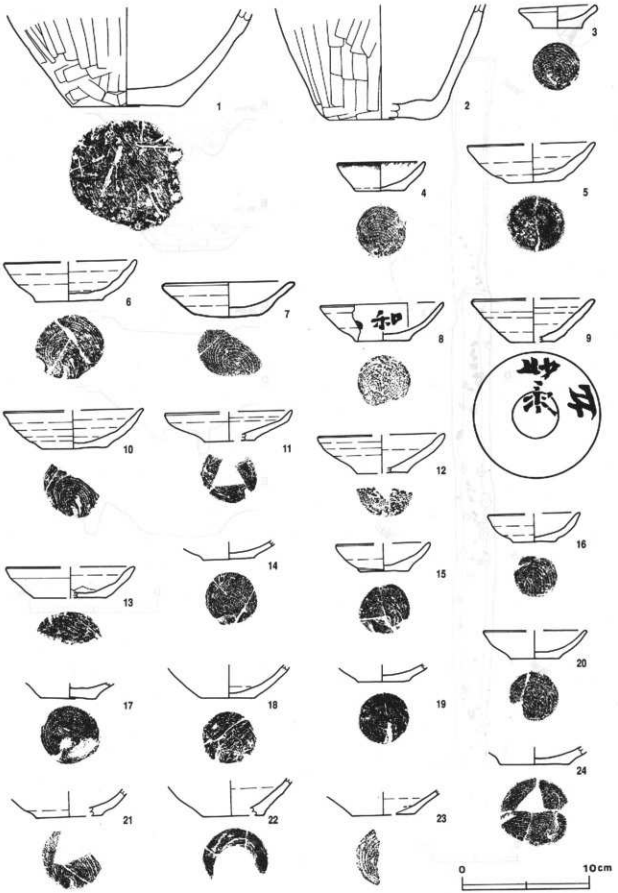
重複関係　Ｂ２ｊ２区で第３号住居跡を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と形状　南端部の調査区域外（Ｃ１ａ７区）から北東方向（Ｎ－42°－Ｅ）に直線的に延びている。調査できた範囲の長さは41.00mである。上幅2.20～3.48m，下幅1.00～1.40m，深さは10～60cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は北部寄りは弧状で，南部寄りは逆台形である。中央部から南部にかけて，東・西壁の底面からの立ち上がり部に20か所，底面に４か所，西壁先端部に２か所，東壁先端部に１か所のピットが確認されている。ピットは，長径20～72cm，短径18～50cmの円形及び楕円形で，深さ20～50cmである。

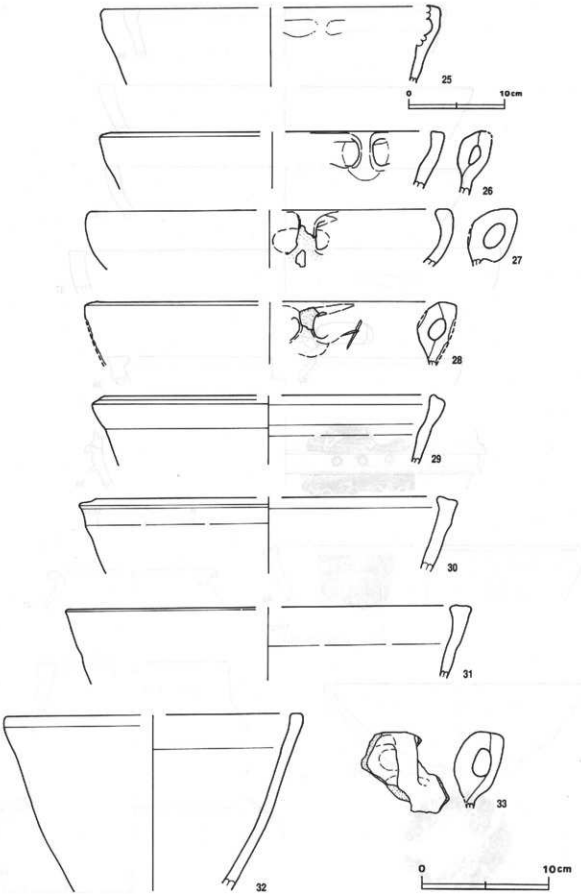
覆土　５層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。



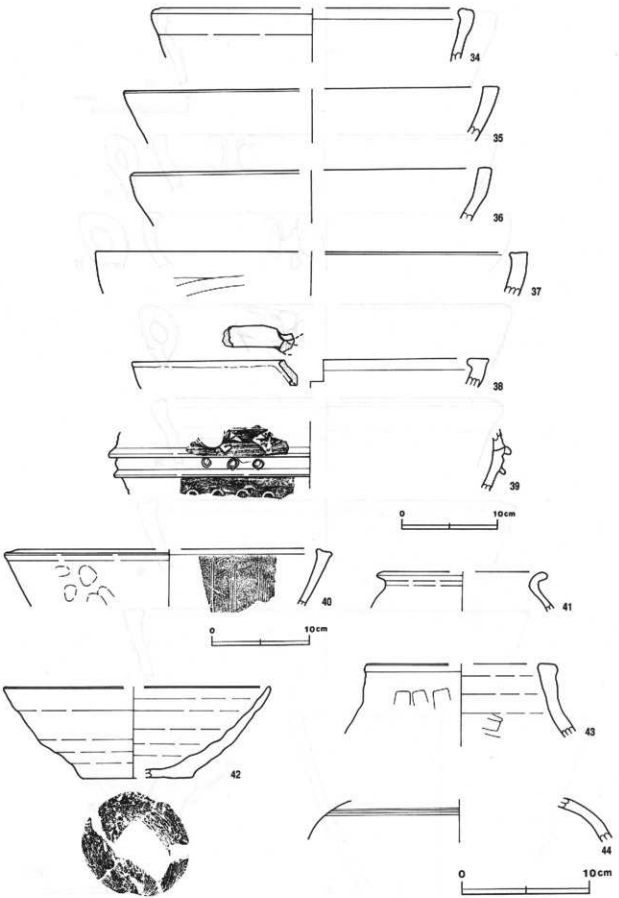
第83図　第１号溝跡実測図



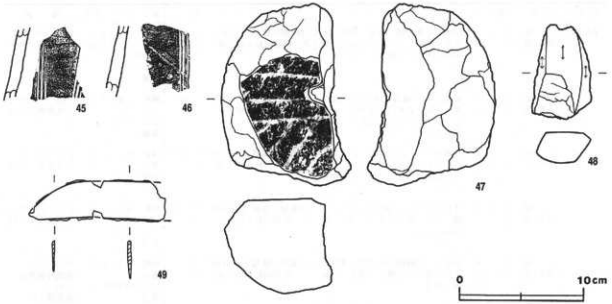
第84図　第１号溝跡出土遺物実測図(1)



第85図　第１号溝跡出土遺物実測図(2)



第86図　第１号溝跡出土遺物実測図(3)



第87図　第1号溝跡出土遺物実測図(4)

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量，炭化物極微量
2　黒　褐　色　ローム中ブロック・小ブロック・粒子極微量，粘性強，締まり弱
3　極暗褐色　ローム粒子微量，ローム粒子極微量，締まり弱
4　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量，粘性強，締まり弱
5　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子極微量

遺物　土師質土器片339点，瓦質土器片1点，陶器片3点，混入した土師器2点が出土している。土師質土器片は，中央部から南部にかけての覆土中層から多く出土している。第84図3・4・17の土師質土器小皿，29・30・36の土師質土器内耳土器，40の土師質土器擂鉢，43の瓦質土器片，41の陶器甕・44の陶器瓶子は，南端部の覆土中層から出土している。5・6・7・9・10・11・13・15・18・19・20・21・22・23の土師質土器小皿，26・27・32・37の土師質土器内耳土器片，42の土師質土器鉢は，中央部の覆土中層から出土している。25・28・31・33の土師質土器内耳土器片は，北部の覆土中層から出土している。8の土師質土器小皿，35の土師質土器内耳土器，39の土師質土器火鉢は，南部の覆土中から出土している。12・14・16・19の土師質土器小皿，34・38の土師質土器内耳土器片は中央部の覆土中層から出土している。45の土師質土器擂鉢と46の瓦質土器擂鉢は，覆土中から出土している。47の石臼は中央部，48の砥石と49の鉄鎌は南部の覆土中層から出土している。1・2の土師器甕は，第3号住居跡と重複している北部の覆土中から出土している。第3号住居跡から混入したものと考えられる。

所見　本跡の時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。性格は不明である。

第1号溝跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第84図 1	甕 土師器	B〔7.6〕 C　8.6	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色　普通	P103 10% 北部覆土中
2	甕 土師器	B〔9.1〕 C〔8.4〕	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。底部外面輪状圧痕。	砂粒・長石・石英・雲母 黒褐色　普通	P104 10% 北部覆土中
3	小　皿 土師質土器	A　5.9 B　1.9 C　3.9	口縁部一部欠損。平底。底部はやや突出している。体部は大きく開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 灰黄褐色　普通	P105 90% 南端部覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 4	小皿 土師質土器	A 7.0 B 2.2 C 4.0	口縁部一部欠損，平底。底部はわずかに突出している。体部は内彎気味に開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア・白色針状物質 におい橙色 普通	P106 95% PL32 口縁部内・外面スス付着
5	小皿 土師質土器	A [11.0] B 3.1 C 4.4	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。底部はやや突出している。体部は内彎気味に開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア におい褐色 普通	P107 70% PL32 中央部覆土中層
6	小皿 土師質土器	A [10.3] B 3.1 C 5.4	体部下位から口縁部にかけて欠損。平底。底部はやや突出している。体部は内彎して開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 明褐色 普通	P108 60% PL32 中央部覆土中層
7	小皿 土師質土器	A 10.0 B 2.7 C 5.2	体部下位から口縁部にかけて欠損。平底。体部は大きく開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア におい褐色 普通	P109 50% PL32 中央部覆土中層
8	小皿 土師質土器	A [9.6] B 2.6 C 4.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 におい黄橙色 普通	P111 50% 体部外面墨書「和□□」 南部覆土中
9	小皿 土師質土器	A [9.4] B 3.4 C [4.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は大きく開く。口縁部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P110 40% PL32 体部外面墨書「砂水ュ」，「寺」 中央部覆土中層
10	小皿 土師質土器	A [10.8] B 3.0 C [5.0]	体部下位から口縁部にかけての破片。平底。底部はやや突出している。体部は大きく開く。口縁部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P112 50% 口縁部内面タール付着 中央部覆土中層
11	小皿 土師質土器	A [10.0] B 2.3 C [4.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部はやや突出している。体部は大きく開く。口縁部との境に稜をもち，わずかに屈曲し口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 におい橙色 普通	P113 50% 中央部覆土中層
12	小皿 土師質土器	A [9.8] B 3.0 C [4.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部はやや突出している。体部は内彎して開く。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・石英・雲母 におい黄橙色 普通	P114 40% 中央部覆土中層
13	小皿 土師質土器	A [10.0] B 2.5 C [5.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は大きく開く。口縁部との境にわずかに稜をもつ。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部へラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア におい橙色 普通	P115 40% 中央部覆土中層
14	小皿 土師質土器	B (1.0) C 4.0	底部から体部下位にかけての破片。平底。底部はやや突出している。体部は大きく開く。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 におい黄橙色 普通	P116 30% 中央部覆土中層
15	小皿 土師質土器	A [7.2] B 2.2 C 3.9	体部下位から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内彎して開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色　普通	P117 60% 中央部覆土中層
16	小皿 土師質土器	A [7.2] B 2.3 C 3.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア におい橙色 普通	P119 30% 中央部覆土中層
17	小皿 土師質土器	B (1.2) C 4.3	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は大きく開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P120 20% 南端部覆土中層
18	小皿 土師質土器	B (2.6) C 4.2	底部から体部中位にかけての破片。平底。体部は大きく開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。底部外面螺状圧痕。	砂粒・長石・石英・雲母 におい黄橙色 普通	P121 30% 中央部覆土中層
19	小皿 土師質土器	B (1.4) C 4.1	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は大きく開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色　普通	P122 20% 中央部覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 20	小皿 土師質土器	A [9.6] B 2.6 C 4.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P118 40% 中央部覆土中層
21	小皿 土師質土器	B (2.0) C [5.2]	底部から体部下位にかけての破片。平底。底部はやや突出している。体部は大きく開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P124 10% 中央部覆土中層
22	小皿 土師質土器	B (2.8) C [4.8]	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は大きく開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P125 40% 中央部覆土中層
23	小皿 土師質土器	B (1.9) C [4.8]	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は大きく開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・白色針状物質 橙色 普通	P126 10% 体部外面タール付着 中央部覆土中層
24	小皿 土師質土器	B (1.4) C 5.4	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は大きく開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P123 20% 覆土中
第85図 25	内耳土器 土師質土器	A [34.6] B (8.2)	口縁部の破片。内耳1か所の欠損痕。耳貼り付け部の外面はやや外側に膨らむ。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。耳貼り付け部ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P132 5% 外面にスス付着 北部覆土中層
26	内耳土器 土師質土器	A [26.6] B (5.0)	口縁部の破片。内耳1か所残存。耳貼り付け部の外面はやや外側に膨らむ。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。耳貼り付け部ナデ。耳部縦位のナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P128 5% 外面にスス付着
27	内耳土器 土師質土器	A [28.0] B (6.5)	口縁部の破片。内耳1か所残存。耳貼り付け部の外面はやや外側に膨らむ。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。耳貼り付け部ナデ。耳部縦位のナデ。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P130 5% PL32 外面にスス付着 中央部覆土中層
28	内耳土器 土師質土器	A [28.8] B (5.0)	口縁部の破片。内耳1か所残存。耳貼り付け部の外面は外側に膨らむ。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。耳貼り付け部ナデ。耳部縦位のナデ。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	P129 5% 外面にスス付着 北部覆土中層
29	内耳土器 土師質土器	A [25.8] B (5.5)	口縁部の破片。口縁部下位の外面はやや外側に膨らむ。端部は中央部に沈線が巡り，内上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 明褐色 普通	P133 5% 外面にスス付着 南端部覆土中層
30	内耳土器 土師質土器	A [29.2] B (5.9)	口縁部の破片。口縁部下位の外面はやや外側に膨らむ。端部は中央部に沈線が巡り，内上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 明褐色 普通	P134 5% 外面にスス付着 南端部覆土中層
31	内耳土器 土師質土器	A [31.0] B (5.7)	口縁部の破片。口縁部下位の外面はやや外側に膨らむ。端部は中央部に沈線が巡り，内上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P135 5% 外面にスス付着 北部覆土中層
32	内耳土器 土師質土器	A [23.2] B (13.8)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は外傾する。口縁部内面はやや内側に膨らむ。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のナデ。内面横位のナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 黒色(外)褐色(内) 普通	P127 5% 外面にスス付着 中央部覆土中層
33	内耳土器 土師質土器	B (6.2)	口縁部の破片。内耳1か所残存。耳貼り付け部の外面は外側に膨らむ。端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。耳貼り付け部ナデ。耳部縦位のナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P131 5% 北部覆土中層
第86図 34	内耳土器 土師質土器	A [24.8] B (4.1)	口縁部の破片。口縁部下位の外面はやや外側に膨らむ。端部は中央部に沈線が巡り，内上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P137 5% 外面にスス付着 中央部覆土中層
35	内耳土器 土師質土器	A [29.2] B (4.3)	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。端部は平坦で，内側にわずかにつまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P138 5% 外面にスス付着 南部覆土中
36	内耳土器 土師質土器	A [27.8] B (4.2)	口縁部の破片。口縁部下位の外面はやや外側に膨らむ。端部は中央部に浅い沈線が巡り，内側にわずかにつまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	P139 5% 外面にスス付着 南端部覆土中層
37	内耳土器 土師質土器	A [33.8] B (3.5)	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。端部は平坦で，内側につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P136 5% 外面にスス付着 中央部覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 38	内耳土器 土師質土器	A [27.8] B (2.2)	口縁部上位の破片。内耳1か所の剥離痕。端部は平坦で，内側に強くにつまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 黒褐色　普通	P140 5% 外面にススが付着 中央部覆土中層
39	火鉢 土師質土器	B (6.3)	体部片。体部は内弾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。上位外面に菱形文の刻印あり。中位に2条の縦帯が巡り，その間に凹凸文が，縦帯の下部にはC字文が，半截竹管状工具により施されている。	砂粒・長石・雲母に赤い黄褐色 普通	P142 5% PL32 南部覆土中
40	擂鉢 土師質土器	A [30.6] B (5.9)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は外傾する。口縁端部内面は内側に突出気味である。端部は平坦であるが，中央部がわずかにくぼんでいる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。内面に5条1単位の擂り目。外面に指頭圧痕を残す。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P143 5% 南端部覆土中層
42	鉢 土師質土器	A [20.8] B 7.2 C 8.8	底部から口縁部にかけて欠損。平底。体部は内弾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P141 70% PL32 体部外面にススが付着 中央部覆土中層
43	壺 瓦質土器	A [14.1] B (5.3)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内弾し，口縁部はほぼ直立する。口縁部上位外面に後をもつ。端部は平坦であり，肥厚する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面櫛状ナデ。内面横位のヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・石英 普通	P144 5% 南端部覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	手法の特徴	色調・釉薬	産地・年代	備考
第86図 41	小形壺。 陶器	A [12.5] B (2.8)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内弾して立ち上がり，口縁部は強く外反する。内・外面施釉。	オリーブ黒色 灰釉	瀬戸・美濃系 不明	P145 5% 南端部覆土中層
44	瓶子 陶器	B (3.1)	肩部の破片。4条の沈線が巡る。外面施釉。	灰オリーブ色 灰釉	古瀬戸 13世紀代	P146 5% PL32 南端部覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第87図 45	擂鉢 土師質土器	厚さ 0.9	体部片。3条1単位の擂り目を残す。	TP85
46	擂鉢 瓦質土器	厚さ 0.9	体部片。擂り目（単位不明）を残す。	TP86

図版番号	種別	計測値				石材	備考	
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第87図47	石臼	(14.2)	(10.1)	7.5	(1348.7)	花崗岩	Q14　覆土中層	PL34
48	砥石	(7.4)	4.2	2.4	(89.7)	凝灰岩	Q15　覆土中層	

図版番号	種別	計測値				備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第87図49	鉄鏃	(10.8)	3.3	0.3	(21.2)	M6　覆土中層

第２号溝跡（第88図・付図２）

位置　調査区域の北部，Ｂ２c5～Ｂ１j7区。

重複関係　Ｂ１j6区で第３号溝を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

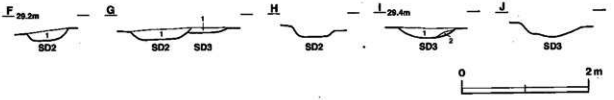
規模と形状　北部中央部寄り（Ｂ２c5）から北東方向（Ｎ－35°－Ｅ）のＢ１j7区まで直線的に延びている。長さは14.40mである。上幅0.40～0.80m，下幅0.24～0.60m，深さは16～20cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は逆台形である。

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量

遺物　土師質土器細片３点が出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世と考えられる。性格は不明である。



第88図　第２・３号溝跡実測図

第３号溝跡（第88図・付図２）

位置　調査区域の北部，Ｂ１j6～Ｂ２b8区。

重複関係　Ｂ１j6区で第２号溝に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

規模と形状　北部中央部（Ｂ２b8）から北西方向（Ｎ－50°－Ｗ）に直線的に延びている。第２号溝との重複部分は確認できないので正確な長さは不明であるが，(9.00)mである。上幅0.64～0.96m，下幅0.20～0.36m，深さは16～22cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は弧状ある。

覆土　２層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　土師器細片３点が出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世と考えられる。性格は不明である。

第４号溝跡（第89図・付図２）

位置　調査区域の北部，Ｂ１j7～Ｂ３e1区。

重複関係　Ｂ２b8区で第３号土坑と，Ｂ２c9区で第１号地下式壙と重複しているが，新旧関係は不明である。Ｂ２d0区で第６号土坑に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。Ｂ３e1区で本跡が第18号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と形状　北部中央部寄り（Ｂ３e1区）から北西方向（Ｎ－35°－Ｗ）のＢ１j7区まで直線的に延びている。長さは27.50mである。上幅0.88～2.00m，下幅0.56～1.68m，深さは12～32cmである。底面は平坦であ

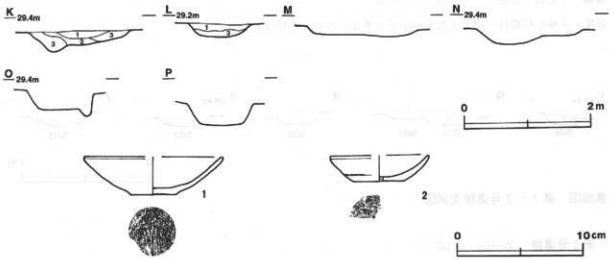
る。第3号土坑と重複している北側に，幅20～40cm，長さ2.80mの範囲で粘土が確認されている。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で，一部弧状である。

覆土　3層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子極微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

遺物　土師質土器2点が出土している。第89図1・2の土師質土器小皿は，覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から16世紀代と考えられる。性格は不明である。



第89図　第4号溝跡・出土遺物実測図

第4号溝跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第89図 1	小　皿 土師質土器	A [10.8] B 2.9 C 3.7	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部糸切り後，ナデ。	砂粒・黒色粒子 橙色 普通	P147 20% 覆土中
2	小　皿 土師質土器	A [7.6] B 2.0 C [4.1]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部糸切り後，ナデ。	砂粒・黒色粒子 橙色 普通	P148 30% 口縁部内・外面スス付着 覆土中

第5号溝跡（第90図・付図2）

位置　調査区域の北部，B3f3～B3f4区。

重複関係　B3f3区で第4号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

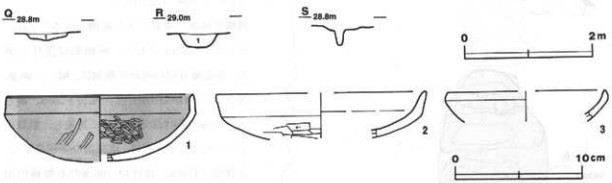
規模と形状　北部中央部寄り（B3f3区）から北東方向（N－75°－E）のB3f4区まで直線的に延びている。長さは10.80mである。上幅1.00～1.44m，下幅0.32～0.80m，深さは8～32cmである。底面はほぼ平坦であるが，一部凹凸がある。第4号土坑と重複している西部，中央部，北東端部に，長径28～80cm，短径28～64cmの不整円形及び不整楕円形のピット状のくぼみが確認されている。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で，一部弧状である。

覆土　単一層であり，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子極微量

遺物　土師器片23点が出土している。第90図１・２・３の土師器坏は，覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から６世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第90図　第５号溝跡・出土遺物実測図

第５号溝跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	坏 土師器	A 14.6 B（5.1）	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して開き，口縁部との境に稜をもつ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面，体部内・外面黒色処理。	砂粒・長石にぶい黄褐色普通	P149 30% PL32 覆土中
2	坏 土師器	A [16.6] B（3.5）	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して開き，口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・雲母灰褐色普通	P150 30% 覆土中
3	坏 土師器	A [12.8] B（2.3）	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して開き，口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒にぶい褐色普通	P151 5% 覆土中

表11　古峯Ｂ遺跡溝跡一覧表

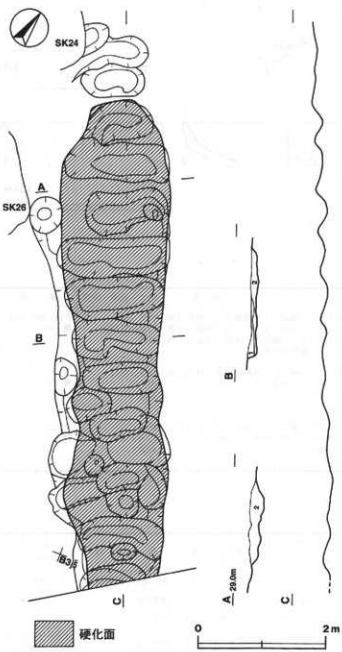
溝番号	位置	方向	断面	規模 確認長(m)	規模 上幅(cm)	規模 下幅(cm)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
1	B2e4～C1a7	N-42°-E	弧状・逆台形	41.0	2.20～3.48	1.00～1.40	10～60	緩斜	平坦	自然	土師質土器片，瓦質土器片，陶器片	SI 3→本跡
2	B2e5～B1j7	N-35°-E	逆台形	14.4	0.40～0.80	0.24～0.60	16～20	緩斜	平坦	自然	土師質土器片	SD 3→本跡
3	B1j6～B2b6	N-50°-W	弧状	(9.0)	0.64～0.96	0.20～0.36	16～22	緩斜	平坦	自然	土師器片	本跡→SD 2
4	B1j7～B3e1	N-35°-W	逆台形・弧状	27.5	0.88～2.00	0.56～1.68	12～32	緩斜	平坦	自然	土師質土器片	B11j6(7)区B2e1(2)区B3e1(2)区 SK18→本跡→SK 6
5	B3f3～B3f4	N-75°-E	逆台形・弧状	10.8	1.00～1.44	0.32～0.80	8～32	緩斜	平坦・ピット	自然	土師器片	SK 4→本跡

7　道路跡

今回の調査で，道路跡１条を確認した。以下，その特徴について記載する。

第１号道路跡（第91図）

位置　調査区域の北部，Ｂ３h4～Ｂ３j5区。



第91図　第１号道路跡実測図

重複関係　第26号土坑に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

規模と形状　調査できた範囲で長さ7.56m，幅1.10～1.74mである。断面形は弧状である。南北軸方向の底面の断面は，幅６～38cm，深さ２～10cmの凹部分と，幅20～50cm，高さ８～20cmの凸状部分が交互に連続し，畝状を呈している。平面形は，直線的な帯状を呈し，長径80～176cm，短径40～60cmの不整楕円形の面が，南北軸上に隣接し連続し硬化面を形成している。

主軸方向　N－23°－W

覆土　２層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。黒褐色土の第２層は，硬く踏み固められた路面に相当すると考えられる。

土層解説

1	極暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，粘性強
2	黒褐色	ローム小ブロック微量，粘性強，締まり極めて強

遺物　土師質土器細片２点，瓦質土器細片１点が出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世と考えられる。

8　石器集中地点

発掘調査当初の遺構確認の際，中央部の遺構確認面から掻器１点が出土した。そこで，竪穴住居跡等の遺構調査終了後，文化層の有無を確認するため，石器の出土している地点を中心として調査区域全域にわたって，２×２ｍのグリッド44か所を設定しローム層の掘り下げを行った。その結果，石器集中地点を２か所確

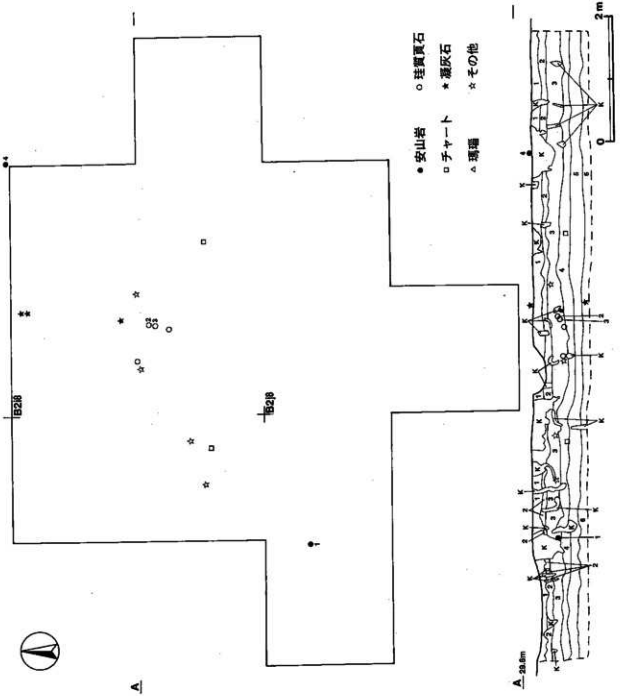
認した。以下，その特徴について記載する。

第１号石器集中地点（第92・93図）

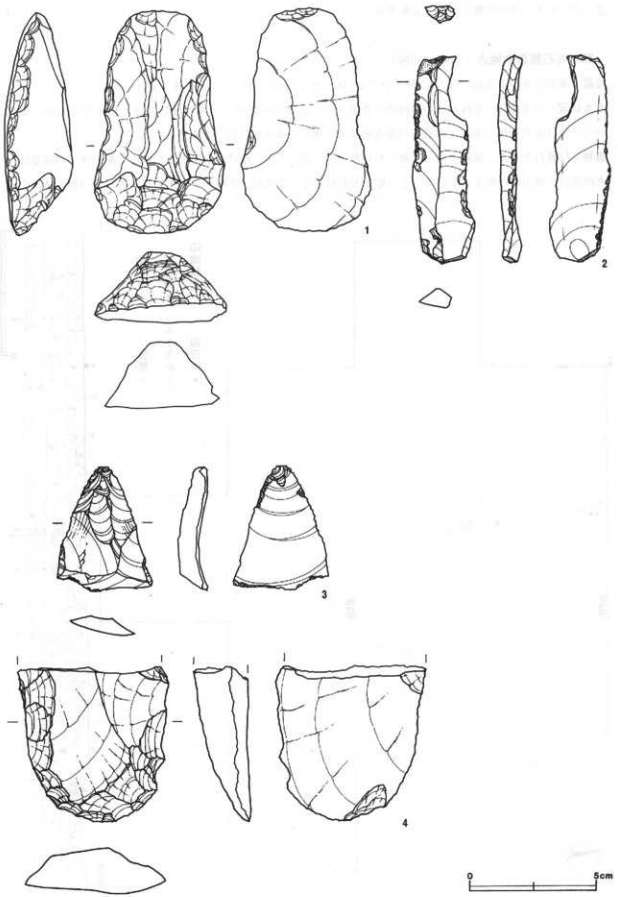
位置　調査区域の中央部，Ｂ２ｉ7区・Ｂ２ｉ8区・Ｂ２ｉ9区・Ｂ２ｊ7区・Ｂ２ｊ8区。

出土状況　南北８m，東西10mの範囲内に存在する。遺物は中央部から南西部にかけて出土しており，標高29.4～28.4mの範囲である。当遺跡の基本層序第３層から第９層に相当する。

遺物　打製石斧１点，掻器１点，彫刻刀形石器１点，剥片１点，礫11点が出土している。第93図１の掻器は，南西部の１層中から出土している。２の彫刻刀形石器は，中央部の４層から出土している。３の剥片は，中央



第92図　第１号石器集中地点実測図



第93図　第１号石器集中地点出土遺物実測図

部の２層から出土している。４の打製石斧は，北東部の１層中から出土している。

所見　本跡の石器類の石材は，安山岩と珪質頁岩である。石核や敲石等の石器製作に関わる石器類は出土していない。出土している石器類は，他地域から持ち込まれた可能性が考えられる。本跡の時期は，石器類がATを含む下総Ⅵ層から出土していることから，約22,000年前と考えられる。

第１号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	剥離と調整の特徴	備考
第93図 1	掻器	8.9	5.2	2.7	118.7	安山岩	素材の背面側に二次加工を施し，中央に素材面を残している。断面形態が甲高三角形，もしくは台形を呈するように加工している。素材の主要剥離面側には，ほとんど二次加工は認められず，わずかに先端部と右側縁の裏面に認められるだけである。	Q 7 PL34 1 層 南西部
2	彫刻刀形石器	8.2	2.4	1.0	13.8	珪質頁岩	素材の石刃の末端部を微断するように剥離軸と直行して，角度の高い剥離を加えている。これを打面として右側縁に階状剥離を施し，彫刀面を作出している。彫刀面は２度作出されている。両側縁に衣裏にわたって微細な剥離痕が認められる。	Q 5 PL34 4 層 中央部
3	剥片	4.9	3.8	1.2	10.1	珪質頁岩	縦長剥片を素材としている。打面は点状で，点末端は広く広がり主要剥離面側に湾曲している。背面には，主要剥離面と同方向の剥離の他に，左側縁側からの剥離面も認められる。右側縁と末端部の主要剥離面側の縁辺に，使用痕と考えられる微細な剥離痕が認められる。	Q 4 PL34 3 層 中央部
4	打製石斧	(6.2)	6.0	2.2	77.3	安山岩	上半部は欠損しており，背面側にのみ二次加工が施され，主要剥離面側には加工が施されていない。如工は縁辺に留まる剥離であり，器体を覆うような調整は施されていない。刃部は厚く，刃部が分厚くなっている。	Q 8 1 層 北東部

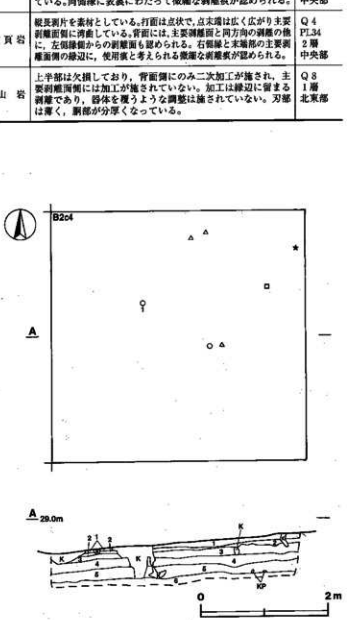
第２号石器集中地点（第94・95図）

位置　調査区域の北部，Ｂ２ｃ４区。

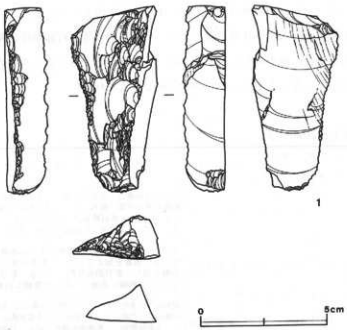
出土状況　南北４ｍ，東西４ｍの範囲内に存在する。遺物は中央部から北部にかけて出土しており，標高26.9～28.8ｍの範囲である。当遺跡の基本層序第３層から第７層に相当する。

遺物　彫掻器１点，剥片５点が出土している。第95図１の彫掻器は，北西部の４層中から出土している。剥片は上層の１・２層から出土している。

所見　本跡からは，石核や敲石等の石器製作に関わる石器類は確認されていない。出土している石器類は，他地域から持ち込まれた可能性が考えられる。本跡の時期は，石器類がAT層を含む下総Ⅵ層から出土していることから，約22,000年前と考えられる。



第94図　第２号石器集中地点実測図



第95図　第２号石器集中地点出土遺物実測図

第２号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値				石　材	剥離と調整の特徴	備　考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第95図 1	剥 採 器	7.3	3.4	1.7	31.8	珪質頁岩	縦長の稜付き剥片を素材とする。素材末端部の平坦面から櫛状剥離を施し剥刃部を作出している。剥刃面は少なくとも３度作出されている。また，素材剥片の打面部から左側縁にかけて連続する剥離が加えられて，弧状の刃部が作出されており，採器としても機能していたと考えられる。	Ｑ６ PL34 ４層

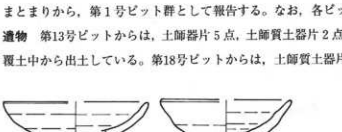
9　ピット群

今回の調査で，調査区域の南東部にピット群１か所を確認した。以下，その特徴について記載する。

第１号ピット群（第96図・97図）

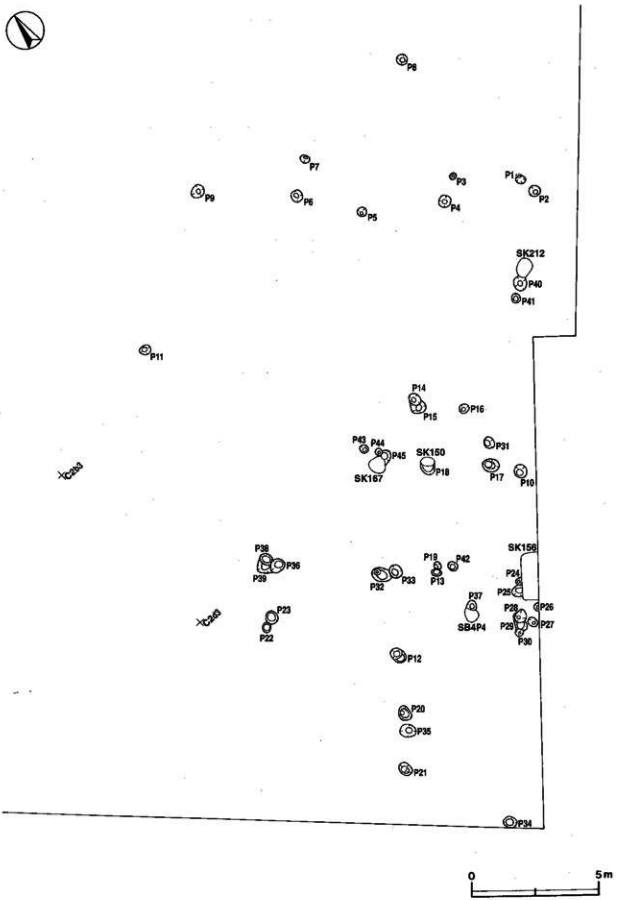
位置　調査区域の南東部，Ｂ２ｊ５区・Ｃ２ａ４区・Ｃ８ａ８区・Ｃ２ｃ３区・Ｃ２ｃ８区・Ｃ２ｇ３区に囲まれた範囲で，44基のピットを確認した。年代の同一性などで一連のものであるかどうか不明であるが，位置的なまとまりから，第１号ピット群として報告する。なお，各ピットについては表に記載した。。

遺物　第13号ピットからは，土師器片５点，土師質土器片２点が出土している。第96図１の土師質土器小皿は，覆土中から出土している。第18号ピットからは，土師質土器片３点が出土している。第32号ピットからは，土師器片５点が出土している。第33号ピットからは，土師器片１点が出土している。第34号ピットからは，２の土師質土器小皿が，南部の覆土上層から出土している。第38号ピットからは，土師器片３点が出土している。



第96図　第１号ピット群出土遺物実測図

所見　出土遺物から，第13・18・34号ピットの時期は中世と推定される。第32・33・38号



第97図　第１号ピット群実測図

ピットから出土している遺物は，混入したものと考えられる。他のピットから遺物が出土していないことから，本跡の正確な時期は不明である。覆土の堆積状況から，柱痕あるいは柱抜き取り痕跡は確認されていない。ピット相互の関係やピット群としての性格，また各ピットの性格は不明である。

表12　第1号ピット群計測表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
1	36	32	62		16	36	33	52		31	44	41	39	
2	43	40	72		17	66	52	76		32	78	51	56	土師器片
3	29	27	21		18	63	(30)	25	土師質土器片	33	51	41	48	
4	60	54	34		19	30	26	57		34	61	(42)	69	土師質土器
5	38	36	32		20	56	46	70		35	62	50	51	
6	46	43	42		21	54	41	73		36	61	55	57	
7	38	29	34		22	36	34	72		37	41	(35)	58	
8	39	36	35		23	51	50	60		38	54	37	65	縄文土器片，土師器片
9	53	48	54		24	28	(26)	32		39	(50)	(41)	50	
10	50	49	59		25	(43)	(43)	43		40	55	51	50	
11	43	34	54		26	31	(19)	29		41	34	34	47	
12	82	58	64		27	44	33	54		42	38	35	42	
13	38	27	−	土師器片，土師質土器片	28	53	42	66		43	32	28	−	
14	47	46	53		29	48	(24)	38		44	27	25	35	
15	56	(36)	50		30	33	27	32		45	(44)	(38)	−	

第1号ピット群出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	小皿 土師質土器	A [11.2] B 2.9 C [5.7]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して開く。	口縁部〜体部内・外面ロクロナデ。底部ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P155 20% 第13号ピット 覆土中
2	小皿 土師質土器	A [10.4] B 3.4 C 4.6	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。底部はやや突出している。体部は内彎気味に開き，口縁部に至る。	口縁部〜体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P156 70% 第34号ピット 南部覆土上層

10　不明遺構

今回の調査で，不明遺構2基を確認した。以下，遺構の特徴と出土した遺物について記載する。

第1号不明遺構（第98図）

位置　調査区域の南部，B2h3区。

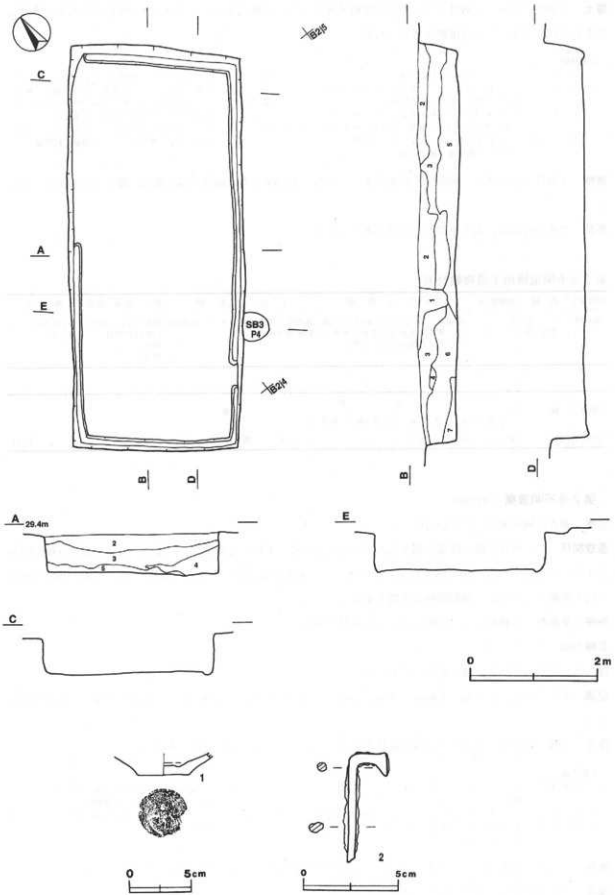
重複関係　第3号掘立柱建物跡を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模と平面形　長軸6.40m，短軸2.75mの長方形である。

長軸方向　N−90°−W

壁　壁高は54〜60cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　西壁の中央部から北西コーナー部寄りと東壁の南東コーナー部寄りの一部を除く，壁下を巡っている。上幅8〜14cm，下幅5〜12cm，深さ2〜4cmである。断面形は緩やかなU字状である。



第98図　第１号不明遺構・出土遺物実測図

覆土　7層からなり，上層はブロック状の堆積状況を示し，下層にはロームブロックが黒色土とともに多量に含まれていることから人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，黒色中ブロック微量，粘性・締まり強
3　暗　褐　色　ローム小ブロック・粒子中量，ローム中ブロック少量，黒色小ブロック微量，粘性弱，締まり弱
4　黒　　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，ローム中ブロック極微量，締まり強
5　褐　　色　ローム中ブロック多量，ローム小ブロック・粒子少量，黒色小ブロック微量，粘性・締まり極強
6　極暗褐色　ローム小ブロック・粒子少量，ローム中ブロック・黒色小ブロック微量，粘性・締まり弱
7　褐　　色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量，ローム粒子・黒色小ブロック微量，粘性強

遺物　土師質土器片2点，磁器片1点が出土している。第98図1の土師質土器小皿は，覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から中世と考えられる。

第1号不明遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図1	小皿 土師質土器	B（1.3） C　4.0	底部から体部下位にかけての破片。平底。底部はわずかに突出している。体部は外傾して開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母・白色針状物質 橙色 普通	P154 40% 覆土中

図版番号	種別	計測値				備考
		長さ(cm)	径　(cm)	孔径(cm)	重量(g)	
第98図2	角釘	（5.8）	0.6	0.5	（5.4）	M7　覆土中　PL34

第2号不明遺構（第99図）

位置　調査区域の南部，C1c0区。

重複関係　第6号住居跡の西部を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。また，第2号地下式壙（第198号土坑）に本跡の西部を掘り込まれていることから，本跡の方が古い。なお，第188・189・194・195・207号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長軸8.05m，短軸3.30mの長方形である。

長軸方向　N—50°—W

壁　壁高は54～60cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

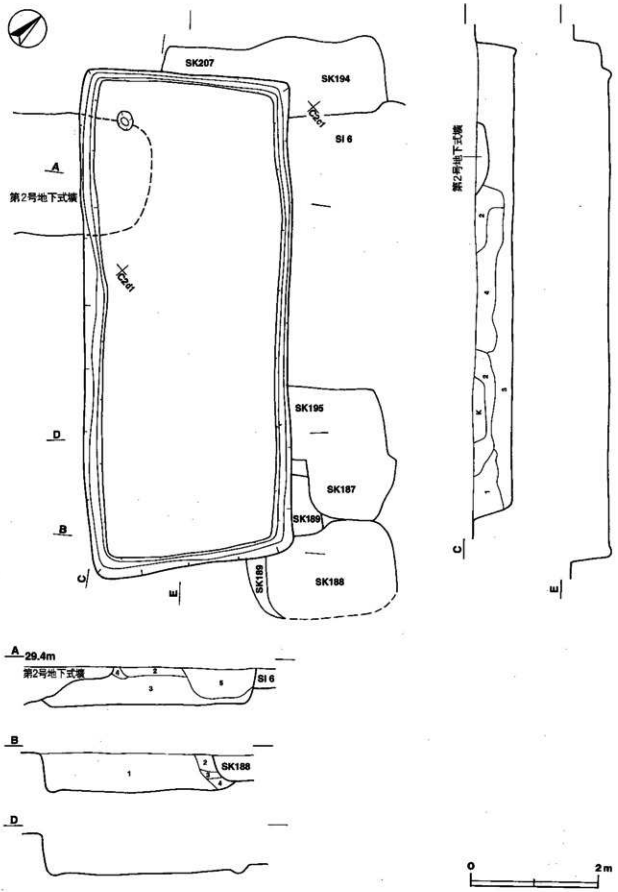
壁溝　壁下を全周している。上幅8～20cm，下幅6～14cm，深さ2～4cmである。断面形は緩やかなU字状である。

覆土　5層からなり，ブロック状の堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　ローム小ブロック・粒子中量，ローム中ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，粘性強
3　黒　褐　色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
4　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量，ローム中ブロック微量，ローム大ブロック極微量
5　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量

遺物　土師質土器細片5点が出土している。土師質土器細片は南部の覆土中層から出土している。

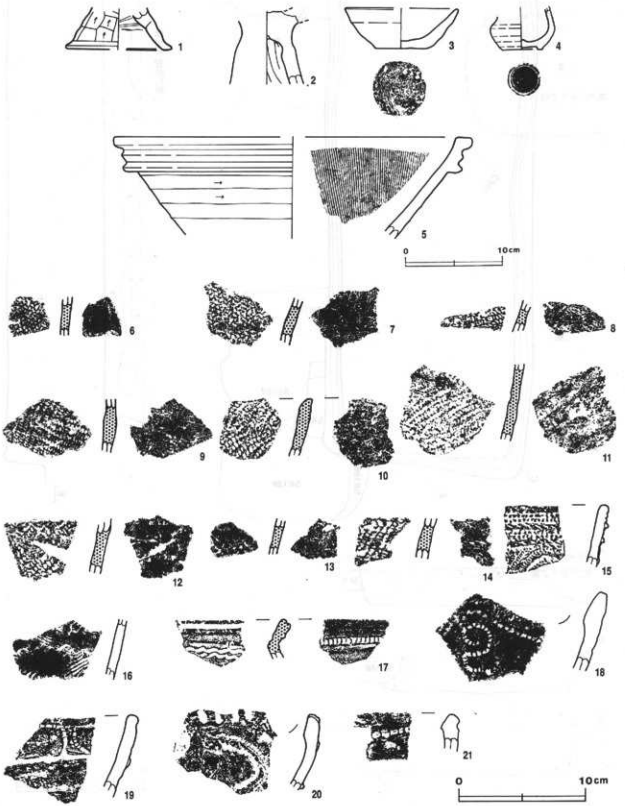
所見　本跡の時期は，出土土器から中世と考えられる。



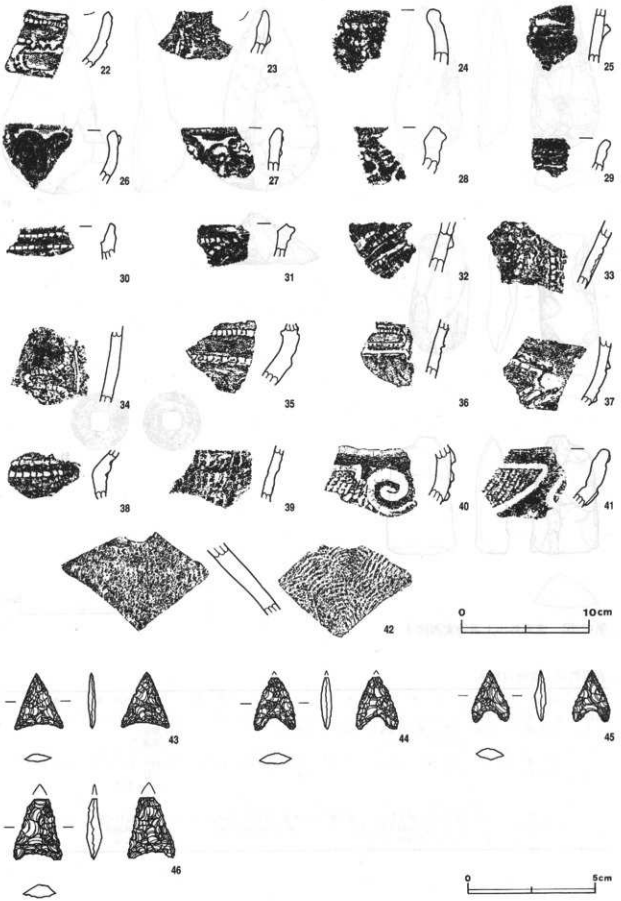
第99図　第２号不明遺構実測図

11　遺構外出土遺物

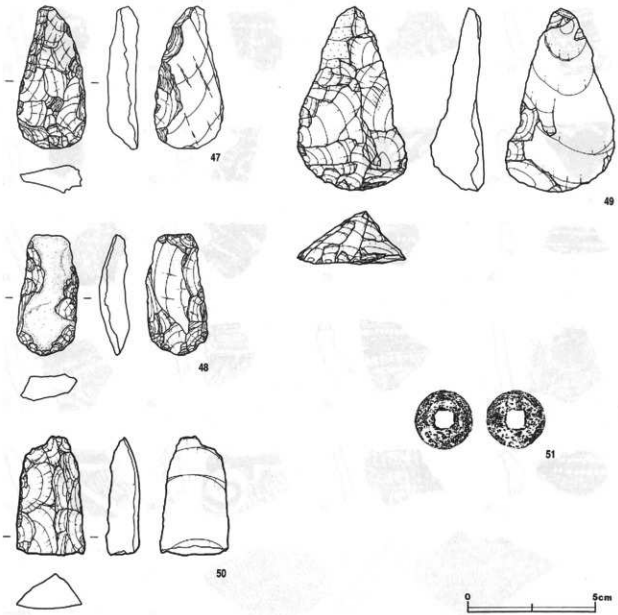
今回の調査で，遺構に伴わない縄文時代から中世までの土器や石器，古銭が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。（第100～102図）



第100図　遺構外出土遺物実測図(1)



第101図　遺構外出土遺物実測図(2)



第102図　遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	高坏 土師器	B（3.3） D［8.4］	高台部破片。高台は「ハ」の字状に開く。端部は外反し，外面は平坦が巡っている。	高台部外面ヘラ削り後，ナデ。内面横ナデ。	砂粒・長石・石英 黒色 普通	P41 20%
2	台付甕 土師器	B（5.7）	台部の破片。台部は「ハ」の字状に開く。	台部内・外面縦位のヘラ削り。外面縦位のナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P157 10%
3	小皿 土師質土器	A［9.0］ B　3.2 C　4.0	体部から口縁部かけて一部欠損。平底。底部はわずかに突出している。体部は外傾して開く。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・雲母・白色針状物質 橙色　普通	P158 70%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	色調・胎土	産地・年代	備考
第100図 4	小形水注。陶器	B（3.4） C 3.1	底部から体部上位にかけての破片。平底。削り出し輪高台。体部は内彎して開く。	にぶい橙色 無釉	不明	P160 50% PL32
5	壺 陶器	A［36.8］ B（10.6）	底部から口縁部にかけての破片。6条1単位の撚り目。三段の口縁帯。	橙色 無釉	不明	P159 10% PL32

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第100図 6	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	胴部片。組紐文が施されている。	TP79
7	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。組紐文が施されている。	TP83 PL33
8	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	胴部片。組紐文が施されている。	TP81 PL33
9	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。単節縄文が施されている。	TP77
10	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。単節縄文が施されている。	TP101
11	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。単節縄文が施されている。	TP100
12	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。単節縄文が施されている。	TP84 PL33
13	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	胴部片。交互刺突文が施されている。	TP80
14	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。単節縄文が施されている。	TP78
15	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。半截竹管状工具による結節平行沈線が施されている。	TP99 PL33
16	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。結節した単節縄文が施されている。	TP104
17	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。内面に結節沈線が，外面には鋸歯状沈線が施されている。	TP98
18	深鉢 縄文土器	厚さ 1.4	口縁部片。角押文が施されている。	TP58 PL33
19	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。隆帯に沿って角押文が施されている。	TP92 PL33
20	深鉢 縄文土器	厚さ 1.1	口縁部片。隆帯に沿って角押文が施されている。波状口縁の波頂部にきざみが施されている。	TP94 PL33
21	深鉢 縄文土器	厚さ 0.7	口縁部片。角押文が施されている。	TP74
第101図 22	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。隆帯に沿って角押文が施されている。	TP91
23	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。隆帯に沿って角押文が施されている。	TP73
24	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。角押文が施されている。	TP72
25	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。X字状に隆帯が施されている。	TP61
26	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。Y字状に隆帯が施されている。	TP60 PL33
27	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	口縁部片。Y字状の隆帯が施されている。	TP75
28	深鉢 縄文土器	厚さ 1.3	口縁部片。角押文が施されている。口唇部に刻みが施されている。	TP65
29	深鉢 縄文土器	厚さ 0.6	口縁部片。結節した原体によって施文されている。	TP64

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	備考
第101図30	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。角押文が施されている。	TP69
31	深鉢 縄文土器	厚さ 1.1	口縁部片。角押文が施されている。口形部に刻みが施されている。	TP68
32	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	胴部片。角押文が施されている。	TP63
33	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。隆帯に沿って角押文が施されている。	TP97
34	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。角押文が施されている。	TP96
35	深鉢 縄文土器	厚さ 1.3	口縁部片。隆帯に沿って角押文が施されている。	TP88
36	深鉢 縄文土器	厚さ 0.9	口縁部片。隆帯に沿って角押文が施されている。	TP90
37	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。隆帯に沿って角押文が施されている。	TP93
38	深鉢 縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。角押文が施されている。	TP76
39	深鉢 縄文土器	厚さ 0.8	胴部片。ひだ状の輪積み痕が施されている。	TP102
40	深鉢 縄文土器	厚さ 1.1	口縁部片。隆帯による渦巻文が施されている。	TP89 PL33
41	深鉢 縄文土器	厚さ 1.2	口縁部片。羊歯縄文を地文とし，隆帯による区画文が施されている。	TP95 PL33
42	壺 須恵器	厚さ 1.3	体部片。内面に同心円状の当て具痕を残す。	TP18 PL33

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	
第101図43	石鏃	2.2	1.9	0.3	0.7	凝灰岩	Q 2 表土中	PL34
44	石鏃	(2.0)	1.5	0.4	(1.0)	チャート	Q 9 表土中	PL34
45	石鏃	2.1	1.5	0.5	0.6	チャート	Q12 表土中	PL34
46	石鏃	(2.4)	1.8	0.6	(1.8)	チャート	Q13 表土中	PL34
第102図47	石斧	11.2	5.4	2.4	152.6	ホルンフェルス	Q10 表土中	
48	石斧	9.5	4.8	2.4	108.3	ホルンフェルス	Q11 表土中	
49	抉器	7.3	4.3	2.2	42.9	チャート	Q16 表土中	
50	打製石斧	9.4	5.5	3.1	155.7	ホルンフェルス	Q17 表土中	

図版番号	種別	計測値 径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	初鋳期銭	備考
第102図51	不明	2.4	0.7	0.1	1.8	不明	M 8 銅銭 表土中

第4節　まとめ

古峯B遺跡から確認された遺構は，竪穴住居跡7軒（縄文時代1軒，古墳時代5軒，平安時代1軒），掘立柱建物跡6棟（平安時代1棟，中世4棟，時期不明1棟），構列1か所（中世），地下式壙2基（中世），土坑209基（中世79基，時期不明130基），溝跡5条（古墳時代1条，中世4条），道路跡1条（中世），石器集中地点2か所（旧石器時代2か所），ピット群1か所（時期不明），不明遺構2基（中世）である。ここでは，旧石器時代から中世の各時期別に遺構と遺物について述べ，まとめとしたい。

1　旧石器時代

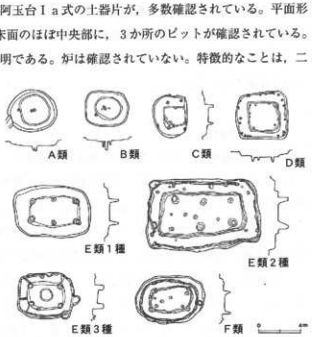
この時代の遺構としては，石器集中地点2か所を確認している。第1号石器集中地点は，調査区域の中央部，標高29mの台地縁辺部に位置する。出土した石器と石器集中地点との関係について簡単に述べることとする。

第1号石器集中地点から出土した石器類を石材で分類すると，頁岩が4点，次に凝灰岩が3点，安山岩とチャートが各2点である（総数15点）。器種別では，剥片が3点，掻器・彫刻刀形石器・打製石斧が各1点である(礫は9点)。第2号石器集中地点からは，瑪瑙が3点，頁岩が2点，チャートと凝灰岩が各1点である。種別では，剥片が5点，掻器と礫が1点である。出土地点は，1層が最も多く，次に4～6層が同数，2・3層の順である。

このように，出土した石器の主体は剥片であり，石核や台石・敲石等の石器製作に関わる遺物は確認されていない。出土した石器は，他の場所から当地へ持ち込まれた可能性が考えられる。第1・2号石器集中地点の時期については，出土している遺物の最下層が，ATを含む下総Ⅵ層であることから，約22,000年前と考えられる。

2　縄文時代

この時代の遺構として，竪穴住居跡1軒を確認している。第1号住居跡は，調査区域の北部に位置している。隆帯に沿って角押文が施されてた縄文時代中期前半の阿玉台Ⅰa式の土器片が，多数確認されている。平面形は，径4.5mほどの円形で，深さは64～72cmである。床面のほぼ中央部に，3か所のピットが確認されている。1か所は柱穴と考えられるが，他の2か所は性格が不明である。炉は確認されていない。特徴的なことは，二段掘り込み状を呈していることである。ただし，本跡は，上段に幅を持った平坦面を有する，いわゆる「有段式竪穴遺構」ではない。上段の平坦面はほとんどないといっていい状態であり，見方を変えれば壁面の角度が下部に比べ，上部で大きく外傾しているということもできる。そうした意味で「二段掘り込み状」なのである。



第103図　有段式竪穴遺構形態分類図

有段式竪穴遺構は，縄文時代中期前半に出現しており，県内からは10遺跡21か所の報告例がある。そして，遺構の属性（平面形，柱穴の配列，壁溝及び間仕切り溝の有無）により，形態の分類（第103図）や変遷についての研究がなされている。本跡のよう

に，「平面形は円形を基調とし，床面中央に1か所主柱穴を持つもの。」の類例としては，千葉県の水砂遺跡027住居跡（平面形は上・下段とも円形。壁溝や炉はなく，中央に主柱穴と考えられるピットが1か所ある。）が代表的である。027住居跡からは，阿玉台Ⅰb式の土器が出土している。本跡は，阿玉台Ⅰa式期の所産と考えられ，水砂027住居跡に先行するものであることから，いわゆる「有段式竪穴遺構」の祖形である可能性も考えられる。

出土遺物は，縄文時代中期前葉の阿玉台Ⅰa式，遺構外から縄文時代前期前葉の関山式，黒浜式，浮島式，縄文時代中期中葉の加曽利EⅠ式の土器片が確認されている。

3　古墳時代

この時代の遺構としては，竪穴住居跡5軒を確認している。第2～6号住居跡が該当する。第2・3号住居跡は調査区域の中央部から，第4～6号住居跡は調査区域の南部から確認されている。各遺構とも，時期は古墳時代後期であり，この時期に小集落が形成されたものと考えられる。

平面形は，第2～5号住居跡は方形であり，第2号不明遺構との重複により西部が残存していない第6号住居跡も，ほぼ方形と推定される。規模は，長軸5.00～5.80m，短軸［4.64］～5.62mであり，5軒の住居跡ともほぼ同規模と考えられる。壁高は，第2・4・5号住居跡が23～25cm，第3・6号住居跡が30・35cmである。柱穴は，第2～5号住居跡とも主柱穴が各コーナー部寄りに位置している。第6号住居跡については，南西コーナー部が残存していないため確認できないが，他の3か所のコーナー部に主柱穴が位置していることから，同様であると推定される。出入口施設に伴うピットも，各住居跡とも南壁中央部寄りの位置から確認されている。貯蔵穴は，第2～4号住居跡から確認されている。第2号住居跡では北西コーナー部，第3・4号住居跡は北東コーナー部に付設されている。竈は，各住居跡とも北壁中央部に構築されている。また，第4～6号住居跡は，極めて隣接して確認されている。第4号住居跡を基点と考えた場合，第5号住居跡は南北軸線の延長上約5m南側に，第6号住居跡は東西軸線の延長上約5m西側に位置している。主軸方向は，第4・5号住居跡がN－23°－W，第6号住居跡がN－34°－Wである。

出土遺物は，土師器（坏，椀，壺，甕，甑），須恵器（坏，鉢，提瓶），鉄製品（小札），土製品（支脚）などである。坏の中には，通常の黒色処理がなされたものと，それとは異なる技法で，口縁部内・外面を黒色に塗られたものが確認されている。甕の中には，底部外面に「ハ」「Ⅰ」のヘラ記号や木葉痕，簾状圧痕を残すものも確認されている。

4　平安時代

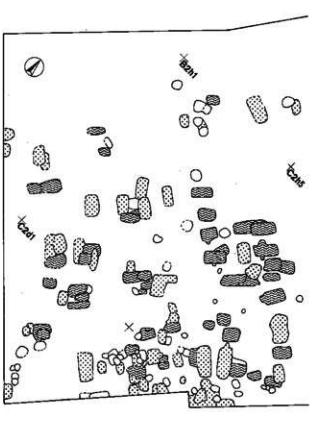
この時代の遺構としては，竪穴住居跡1軒を確認している。第7号住居跡は，調査区域の南部から確認されている。第1号住居跡は，北西・南西の両コーナー部を含む西部が調査区域外に延びているため，正確な平面形と規模は不明であるが，確認できた範囲から推定して長方形と考えられる。規模は，南北軸が3.67mで，東西軸（3.47）mで，深さは14～28cmである。柱穴及び壁溝は，調査できた東部で確認されている。2か所の柱穴が，北東・南東コーナー部に寄った位置から確認されているので，調査区域外の西部の北西・南西の両コーナー部寄りにも位置していると推定される。同様に，東部の壁の下に壁溝が巡るので，西部の壁の下にも巡り，全周するものと考えられる。竈は，北壁の中央部と推定される位置に，砂質粘土で構築されている。

出土遺物は，須恵器（坏・高台付坏・盤・甕），土製品（管状土錘），石製品（支脚）などである。高台付坏と盤の胎土には，白色針状物質が含まれている。坏の底部外面に墨書（「□宅」）が確認されている。

5　中世

この時代の遺構として，掘立柱建物跡４棟，構列１か所，地下式壙２基，土坑79基，溝跡４条，道路跡１条，不明遺構２基を確認している。掘立柱建物跡は第３～６号が，溝跡は第１～４号溝跡が該当する。ここでは，覆土の堆積状況や出土遺物，類例等から考えて土坑墓と推定される土坑について述べることにする。

確認された土坑を，平面形が長方形を呈するものに区分すると，60基余りを数える。特にこれらの遺構の密度が高い調査区域の南部をみると，平面形の長軸方向によって二分することができる(第104図)。長軸方向が北西のものが20基余り，北東のものが30基余りである。これらの土坑の内には，壁外から壁面に向かい，スロープ状やステップ状の傾斜部をもつものがある。東壁にもつものは第88・98号土坑，南壁にもつものは第73号土坑，西壁にもつものは第87・93号土坑，北壁にもつものは第64号土坑である。これらの遺構の傾斜部は，幅40～140cm，長さ30～50cmほどで硬化しており，出入口施設の可能性が考えられる。第73号土坑では，傾斜部が南壁に接する付近の底部から，土坑の中央部にかけて，粘土が４cmほどの厚さで不規則に分布している状況が確認されている。第93・94号土坑の覆土上層からは，焼土と粘土による硬化した面が確認されている。これらの土坑からは，人骨や骨片は検出できなかったが，酸性土壌という地質状況から，遺存しない可能性が極めて高いためと考えられる。



第104図　調査区域南部土坑分布図

多数の土坑墓が高い密度で確認されていることから，調査区域南部は，墓域であると考えられる。中世の墓域では，建物跡，火葬跡，溝跡，構列，井戸跡，方形竪穴遺構などを含めた総体的な追求が求められている。当遺跡からは井戸跡は検出されていないが，地下式壙，構列，溝跡などは確認されている。

当遺跡から，北西方向１kmほどのところに宍戸城跡が所在している。中世の墓域と城館との関わりや，土坑墓と地下式壙など墓域内の周辺遺構との関連について，今後の調査・研究が課題である。

参考文献

(1)　縄文時代研究班　「関東地方における縄文時代中期の「有段式竪穴遺構」について」『研究ノート』５号
茨城県教育財団　1995年７月

(2)　中・近世研究班　「中世の竪穴遺構について」『研究ノート』創刊号　茨城県教育財団　1991年７月

(3)　吉原作平　「中世墓域の検討」『研究ノート』４号　茨城県教育財団　1994年７月

第5章　高土台塚群

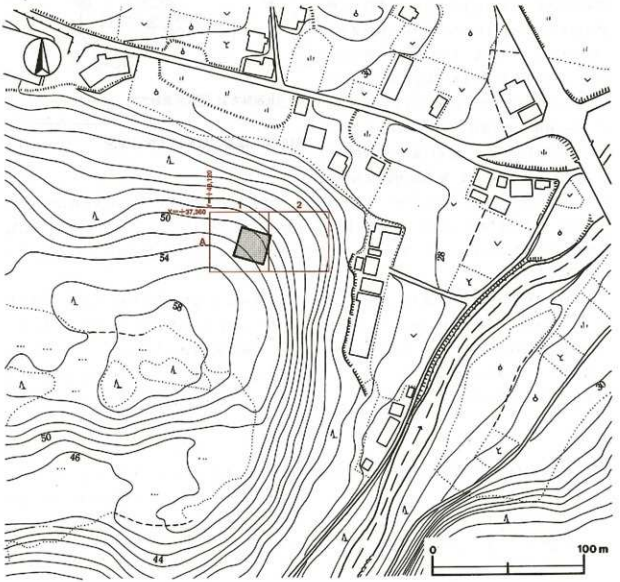
第1節　遺跡の概要

高土台塚群は，友部町の南西山地東側，涸沼川左岸の標高51mほどの丘陵地の北東斜面に所在している。調査区域は，東西20m，南北20m，面積400㎡であり，現況は山林である。

調査区域の南東約1km地点には，坂ノ上塚群がある。その北西側約200mの丘陵地の南斜面には東平遺跡が，その南東側には古峯A遺跡が所在している。

今回の調査によって，近世の塚1基を確認した。塚の上に，かつて延宝8年の銘をもつ石碑が建てられており，調査時には調査区域外に移設されていた。石碑は，大日信仰に関するものと考えられる。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に2箱出土した。塚の盛土からは，土師質土器，陶器，古銭（寛永通寶）が1点出土している。



第105図　高士台塚群調査区設定図

第2節　遺構と遺物

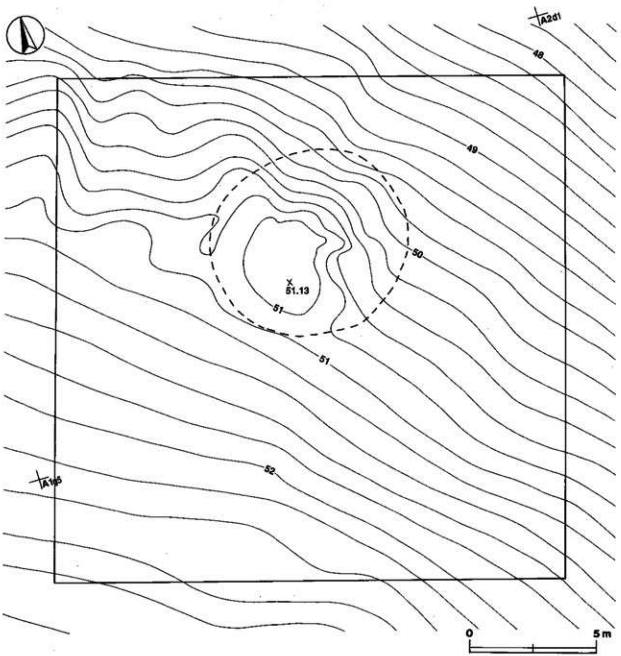
1　塚

今回の調査で，近世の塚1基が確認されている。

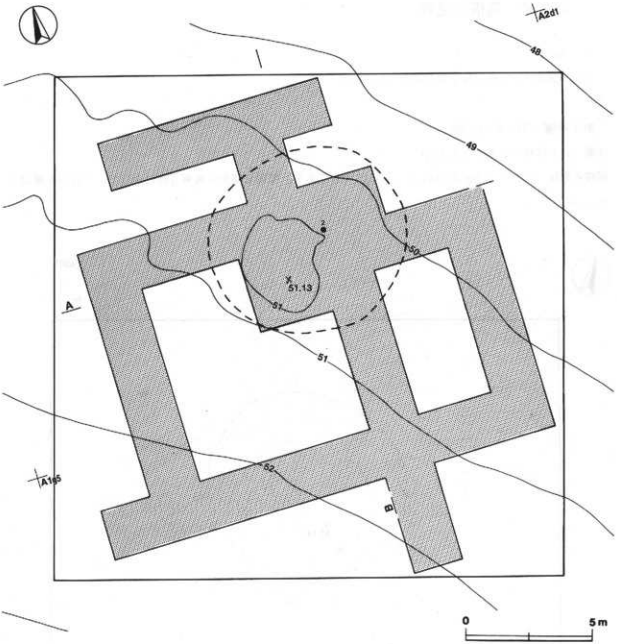
第1号塚（第106～109図）

位置　調査区域の北部，A1g5区。

規模と形状　径7.2～7.9mの円形で，高さは1.4mである。塚頂上部から南東方向にかけて，くぼみが確認されている。



第106図　第1号塚実測図(1)



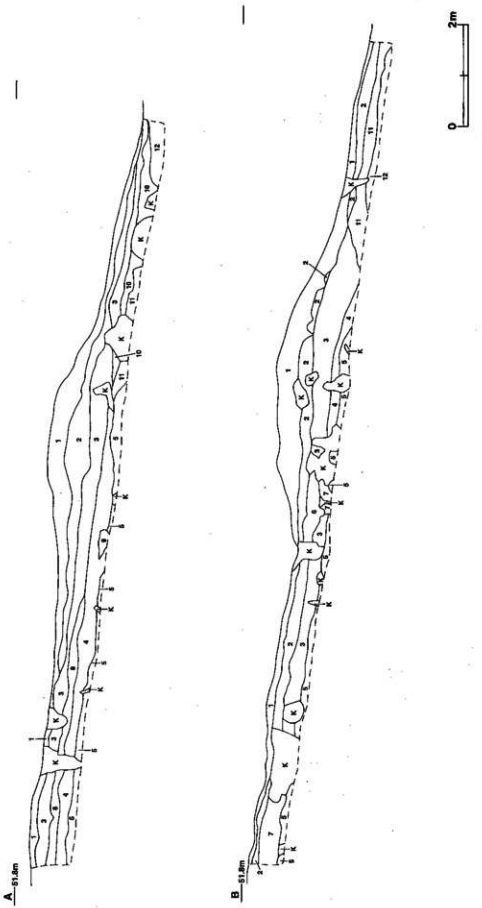
第107図　第1号塚実測図(2)

構築状況　旧地表面を基底部にし，12層で構築されている。盛土は，ほぼ水平に積み上げられている。

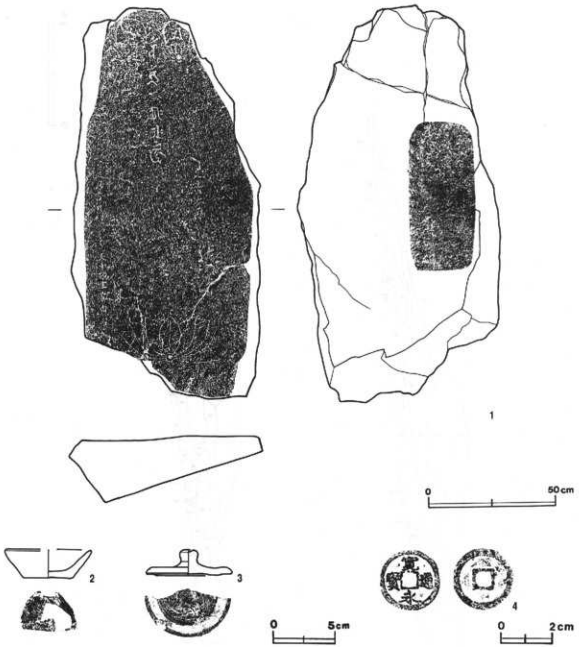
土層解説

1　黒　褐　色　黒色粒子中量，粘性弱，締まり極めて弱
2　黒　褐　色　黒色粒子少量，締まり弱
3　黒　褐　色　黒色粒子中量，焼土粒子微量
4　黒　褐　色　黒色粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物・黒色粒子微量
6　黒　褐　色　黒色粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子極微量，粘性弱，締まり弱
7　極暗褐色　黒色粒子中量，炭化物少量，ローム粒子極微量，粘性弱
8　暗　褐　色　ローム粒子少量，黒色粒子微量
9　黒　　色　黒色粒子中量
10　黒　褐　色　黒色粒子少量，ローム粒子微量
11　黒　褐　色　黒色粒子少量，ローム粒子極微量
12　黒　褐　色　ローム粒子少量，黒色粒子微量

遺物　土師質土器3点，陶器1点，古銭「寛永通寶」1点，石碑1点，根固め石24点が出土している。第109図2の土師質土器小皿は，盛土中から出土している。3の陶器蓋は，頂上部付近の盛土中層から出土している。4の古銭「寛永通寶」は，南東部の盛土中から出土している。1の石碑は，本跡の上にあったが，今回の工事に伴い移設されたものである。根固め石は，頂上部から南東部の盛土中層から下層にかけて出土している。



第108図　第１号塚実測図(3)



第109図　第１号塚出土遺物実測図

所見　本跡の時期は，確認された石碑から近世の前半，延宝８年（1680年）ごろと考えられる。

第１号塚出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石材	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第109図 1	石碑	157.5	80.0	26.5	計測不能	花崗岩	Q１ 塚頂上部から調査区域外へ移設

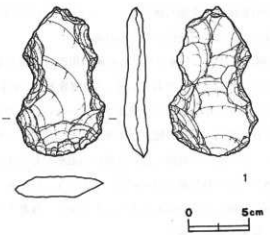
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 2	小皿 土師質土器	A ［6.6］ B 2.2 C ［3.9］	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は大きく開き，口縁部に至る。	口縁部～体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P 1 40% PL32 盛土中

図版番号	器種	計測値(cm)	手法の特徴	色調・釉薬	産地・年代	備考
第109図 3	蓋 陶器	A ［6.6］ B 2.0 F 1.4 G 1.0	天井部から口縁部にかけての破片。内・外面施釉。天井部内面に回転糸切り痕を残す。	黒褐色 鉄釉	不明	P 2 50% PL32 頂上部付近 盛土中

図版番号	器種	計測値				鋳造期間	備考
		径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第109図4	寛永通寶	2.5	0.6	0.1	2.0	1697～1747年	M 1 盛土中 PL34

2 遺構外出土遺物

今回の調査で，遺構に伴わない石製品1点が出土している。以下それを記載する。(第110図)



第110図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石材	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第110図1	打製石斧	11.8	6.9	1.7	162.7	ホルンフェルス	Q 2 表面採集

第3節　まとめ

今回の調査で，塚1基が確認されている。

第1号塚は，丘陵地の北東に向かう傾斜部に立地している。第1号塚の南方向の調査区域外の山林にも，塚が確認された。調査以前に，開発工事のための森林伐開が行われたため，遺構周辺の土が掘り返され，地面の凹凸が散見された。第1号塚は，径7.2～7.9mの円形で，高さは1.4mである。

遺物としては，調査区域外から石碑1点が確認されている。上記の伐開作業に先立ち，頂上部から移設されたものである。この石碑の表面の中央部の右側には，「延宝八天庚申」（「天」は「年」の意）と「□□□□」，左側には「二月吉日」と刻まれているので，建立は延宝8年（1680年）2月と推定される。中央部の左側には，「大小施主敬白」と刻まれている。中央部の上部には，「𑖌」（バン：大日如来），「𑖀」（ウン：大誓願），「𑖭」（タラーク：南　虚空蔵菩薩），「𑖨」（キリーク：西　阿弥陀如来），「𑖮」（アク：北　不空成就如来），「𑖀」（ウン：東　阿閦如来）と刻まれた「金剛界五仏」の梵字が確認できた。「金剛界五仏」は日待信仰で用いられるものであるので，第1号塚は，「大日塚」として信仰の対象であったと考えられる。一方，「延宝八天庚申」と刻まれていることから，「庚申塔」として庚申待のための造立という見方もできる。石碑に。「𑖌」（バン）の梵字の両側上方には，蓮台を伴った「𑖩𑖾」（ア：日）と「𑖪𑖾」（シャ：月）が，石碑の下部には，一際大きい蓮台が刻まれている。石碑の裏面の中央部右側には，「□」が刻まれている。「□」は，石碑表面に上記の梵字を刻んだ人物が，裏面に残した記号の可能性が考えられる。

県内での，「金剛界五仏」を刻み「日待」を趣旨とする石碑の出現は文禄2年（1593年），「庚申塔」を造立趣旨とする石碑の出現は天正9年（1581年）とされている。「金剛界五仏」の石碑は，特に筑波山麓を中心とする県南一帯の地域に限定されており，県内全域では確認されていない。この石碑が建てられた当時，水戸藩領内では厳しい信仰統制が敷かれており，石碑の建立は簡単なことではなかったようである。水戸藩の影響力を受けていた宍戸の地において，しかも宍戸城跡に近い位置に当遺跡が存在することは，極めて興味深い。

第1号塚は，確認された遺物から江戸時代前半の所産で，延宝8年（1680年）ごろに構築されたと考えられる。当遺跡は，本跡の南東方向に位置しほぼ同時期と考えられる坂ノ上塚群とともに，その当時の民間信仰の一端をうかがえる塚群として，貴重な資料である。